

## 替田遺跡(第4次)発掘調査報告

2004(平成16)年・3月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

津市は三重県の伊勢湾沿岸のほぼ中央に位置し、人々の歴史とともに豊な文化遺産が培われてきました。このことは、様々な時代の、多数の重要な埋蔵文化財が、この地で確認されていることでもわかります。

たとえば、津市納所町の納所遺跡は弥生時代前期に農耕文化が定着していた頃の集落跡として知られています。

また、津市鳥居町鳥居古墳から出土した押出仏は7世紀のもので、その頃既に仏教がこの地方に伝わっていた証といえましょう。

さらに、現在の津市は、かつて日本三津のひとつとされる「安濃津」として、中世には交通の要衝でありました。この「安濃津」は明応の大地震によって壊滅したとされますが、近年の発掘調査でかつての繁栄が解明されつつあります。

この報告書は、国道163号国補道路特殊改良および県営ほ場整備事業（津中部地区）にともなって実施した、替田遺跡発掘調査の報告書です。

調査によって、平安時代後期の掘立柱建物や中期の井戸などの遺構が検出され、墨書き土器や八花硯、転用硯なども出土しました。

ところで、埋蔵文化財が土地に根ざした文化財であるため、その保護については開発事業との調整は深刻な問題です。現在に生きる私達は、埋蔵文化財を国民共有の財産として、後世に伝えていく義務があります。一方、国民の生活の向上と安全の実現に必要なため、たとえ埋蔵文化財が包蔵された土地であっても、開発事業が避けられず、結果的に多くの遺跡が破壊されることとなります。

このため、開発に先立つ事前の発掘調査によって、いわゆる記録保存というかたちで埋蔵文化財を後世に伝え、地域の歴史の解明に少しでも役立つことができればと思っています。

今回の調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、三重県県土整備部・農林水産商工部、津地方県民局津建設部・農林水産商工部など、関係諸機関から多くのご協力と暖かいご支援をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成16年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫



## 例　　言

1 本書は、三重県津市南河路に所在する替田（かえた）遺跡の第4次発掘調査にかかる報告書である。

2 調査および整理の体制は以下のとおりである。

　調査主体 三重県教育委員会

　調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査第一課 第二係 主事 宮田勝功 田上 稔

　発掘作業 (財)三重県農業開発公社

3 本書の執筆・編集は宮田勝功が、遺物の撮影は宮田勝功と萩原義彦が担当した。

4 本書が対象とした実調査面積は1,720m<sup>2</sup>（国道163号部分1,400m<sup>2</sup>、県道部分320m<sup>2</sup>）である。

5 本書が対象とした現地調査期間は平成11年9月13日から平成12年1月13日である。

6 本書に用いた挿図の方針は、国土調査法の第IV座標系を基準とし、座標北を示している。なお、当該遺跡の磁北は6度40分、座標北から西偏している（平成7年国土地理院）。

7 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

S A : 柱列 S B : 掘立柱建物 S D : 溝 S E : 井戸 S K : 土坑

S R : 流路 S Z : その他 P H : 柱穴、小穴

8 用語については、次の語句を用いた。

「つき」には、杯・壺があるが、杯を使用した。

「わん」には、碗・椀・塊があるが、灰釉陶器、綠釉陶器、無釉陶器には椀を使用した。その他は碗を使用した。

9 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。また本書に記載した遺構・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1997年度版)に準拠している。

10 替田遺跡の調査区および遺構番号については、すでにA～E地区で発掘調査が実施されているため、本報告書の調査区はF地区およびG地区とした。遺構番号については、F地区検出遺構を601から、中勢バイパスにともなう第1次・第2次調査のA～D地区に継続して付けることにし、また遺構番号G地区検出遺構を701からとした。

11 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会・三重県県土整備部・農林水産商工部及び三重県津地方県民局津建設部・農林水産商工部から多大な協力をいだいた。また津市教育委員会からご教示ならびにご指導を賜った。

12 本書が扱う発掘調査は、一般国道163号および県営ほ場整備（津中部地区）関連事業にともなうものである。

13 発掘調査の経費は三重県県土整備部、三重県農林水産商工部、三重県教育委員会が負担した。

14 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

## 本文目次

I 前言 .....	1	III 替田遺跡(F地区)の成果 .....	9
1 調査の契機 .....	1	1 層序 .....	9
2 調査の経過 .....	1	2 遺構 .....	9
3 調査の方法 .....	2	3 遺物 .....	21
II 位置と歴史的環境 .....	3	IV 替田遺跡 (G地区) の成果 .....	45
1 位置と地形 .....	3	1 層序 .....	45
2 歴史的環境 .....	4	2 遺構 .....	45
		3 遺物 .....	50

### 挿図目次

F 地区		G 地区	
第1図 遺跡位置図 .....	3	第21図 出土土器実測図(5) .....	26
第2図 遺跡地形図 .....	5	第22図 挖立柱建物・柱列等方位図 .....	29
第3図 調査区位置図 .....	7	第23図 出土木製品実測図(1) .....	30
第4図 遺跡付近字切図 .....	8	第24図 出土木製品実測図(2) .....	31
第5図 遺構平面図・調査区地区割図 .....	10	第25図 出土木製品実測図(3) .....	32
第6図 調査区北壁土層図 .....	11	第26図 出土木製品実測図(4) .....	33
第7図 S R601 トレンチ土層図 .....	12	第27図 出土木製品実測図(5) .....	34
第8図 S B610・613・621・622 平面図・断面図 .....	13	第28図 出土木製品実測図(6) .....	35
第9図 S B612・624、S A631 平面図・断面図 .....	14	第29図 出土木製品実測図(7) .....	36
第10図 S A633・634 平面図・断面図 .....	15	第30図 出土木製品実測図(8) .....	37
第11図 S E611 平面図・断面図・土層図 .....	16	第31図 S E611 井戸桿模式図 .....	37
第12図 S E627 平面図・土層図 .....	17		
第13図 S R630 土器出土状況図 .....	18		
第14図 S K632 遺物出土状況図 .....	18		
第15図 Pht4 土器出土状況図 .....	18		
第16図 Pht11・12柱根出土状況図 .....	19		
第17図 出土土器実測図(1) .....	21		
第18図 出土土器実測図(2) .....	23		
第19図 出土土器実測図(3) .....	24		
第20図 出土土器実測図(4) .....	25		

### 表 目 次

F 地区		G 地区	
第1表 試掘結果一覧表 .....	7	第8表 出土土器観察表(5) .....	42
		第9表 出土木製品観察表(1) .....	42
F 地区		第10表 出土木製品観察表(2) .....	43
第2表 挖立柱建物一覧表 .....	20	第11表 出土木製品観察表(3) .....	44
第3表 柱列一覧表 .....	20	第12表 出土木製品観察表(4) .....	44
第4表 出土土器観察表(1) .....	38		
第5表 出土土器観察表(2) .....	39		
第6表 出土土器観察表(3) .....	40		
第7表 出土土器観察表(4) .....	41		

### 図版目次

F地区		G地区	
調査風景 .....	55	図版9 出土土器(4) .....	64
図版1 調査前風景・調査後全景 .....	56	図版10 出土木製品(1) .....	65
図版2 SR630・SB612・613 .....	57	図版11 出土木製品(2) .....	66
図版3 SB621・SB622 .....	58	図版12 出土木製品(3) .....	67
図版4 SB624・SA631 .....	59	図版13 出土木製品(4) .....	68
図版5 SE611・627・SK632・SR630・遺物出土状況 .....	60		
図版6 出土土器(1) .....	61		
図版7 出土土器(2) .....	62		
図版8 出土土器(3) .....	63		
		図版14 調査前風景・調査後全景 .....	69
		図版15 調査後 .....	70
		図版16 出土土器・出土木製品 .....	71

# I 前 言

## 1 調査の契機

昨今の自動車の普及により、津市周辺の交通網は飽和状態になっている。国道163号は上野市方面から津市内への主要な幹線道路であり、一色町一色橋付近の交差点では、朝夕の通勤ラッシュ時に自動車の絶え間ない列が見られる。そのため国道163号のバイパスを南河路の南側に建設することになった。三重県埋蔵文化財センターでは、事業を計画した県土整備部道路整備課から事業照会を受けて、事業地が替田遺跡（遺跡番号201-759）および神戸遺跡（遺跡番号201-598）にかかることがわかり、試掘調査を平成11年1月に実施した。その結果、替田遺跡は7,800m<sup>2</sup>が事業地内の遺跡範囲となった。中勢バイパスより西側では、試掘坑No.2から土坑・ピットなどの遺構を検出し、土師器壺・陶器碗などの遺物を確認している。（第3図、第1表）

このことをふまえて、県土整備部と文化財保護の協議を重ねた結果、事業地内の遺跡が滅失する部分1,400m<sup>2</sup>について緊急発掘調査を実施することになった。また隣接する県営は場整備（津中部地区）関連事業部分320m<sup>2</sup>も、合わせて調査を行った。

## 2 調査の経過

### a 調査経過の概要

調査前の段階では、事業地内だけでは排土置場が確保できないと想定されたため、建設省管轄の中勢道路地内も借用する手筈となつたが、未買収地もあり考慮した以上に土量が少なく用地内におさまつた。調査にあたっては、調査区北西部で遺構検出面と遺構埋土が同色系であるため遺構検出が困難であった。また降雨のため作業に支障を来たしたが、地元の方々の温かいご支援により調査を無事に終了することができた。ここにご芳名を記して心からの御礼を申し上げます。（敬称略、順不同）

館 正志・田中正次・河合章一・池村 治・黒川勘一・本堂志げ子・内藤みつ・河合花子・前川恵子・黒川定子・森谷光子・杉田百合子・森谷みち子・矢代せつ子・芳村洋子・真弓百合子・伊藤敏子・黒川

幸・伊東悦子・池村美智子・池村久寿子・池村昭子・田中正子・伊東誠子

### b 調査日誌（抄）

#### F 地区

##### 【1999年】

- 10月6日 津建設部と現地協議。  
10月13日 雑木伐採の作業を開始する。  
10月14日 伐採作業を終了。  
10月18日 調査区西側から重機にて表土掘削を開始する。  
10月19日 昨日に続き重機にて表土掘削する。地区杭を設定する。  
10月20日 道具搬入。ベルトコンベアーを調査区内に設定。基準杭測量。  
10月21日 表土掘削を終了。包含層掘削を開始する。溝、土坑などの遺構を検出する。  
10月25日 S D 615・616の溝2条を検出する。  
10月26日 調査区北部で流路を検出する。  
10月28日 流路にトレーナーを設定する。  
11月2日 流路を掘削する。  
11月4日 調査区南部と東部にかけて溝、土坑、ピットなどを多数検出する。  
11月8日 柱穴Pit12の柱痕を撮影する。  
11月9日 S E 627を検出する。上層から陶器碗片が出土する。時期は鎌倉時代か。  
11月11日 S E 627の平面図を作成する。写真を撮影をする。  
11月16日 S E 627の東半部を掘削する。陶器碗が出土する。  
11月17日 調査区の東側部分を表土掘削する。  
11月19日 S E 611から鉄分沈着層を検出する。柱穴Pit11の柱痕を写真撮影する。南からPit4の土器を撮影する。  
11月22日 S K 632の出土状況図を作成する。  
11月24日 S E 611の平面図を作成する。  
11月25日 調査区東部の残りを表土除去する。S K 632の土器取り上げ、出土状況図の

- 補足をする。
- 11月26日 昨日に続き、SK632の土器を取り上げ。Pit4の出土状況図を作成する。
- 12月1日 SE611の断面図を作成する。
- 12月6日 流路部の畦畔を取り、全体を下げる。Pitなどを検出する。
- 12月7日 SE611の断ち割りを開始する。灰釉陶器碗が出土する。
- 12月8日 SE611から井戸枠と思われる縦板の並びを検出する。
- 12月9日 SR630の遺物出土状況の撮影を行い、図面を作成する。
- 12月10日 SK632の土層断面図を作成する。
- 12月11日 SE627の東半部を掘削する。
- 12月17日 SE627の掘形から手捏ね土器と曲物底板が出土する。
- 12月20日 挖立柱建物SB621・622の写真撮影を行う。SE627で曲物底板が出土する。下段の曲物も見つかる。掘立柱建物SB624の写真撮影を行う。
- 12月22日 柱列SA631および、掘立柱建物SB612・613の写真撮影を行う。
- 12月24日 遺構実測を実施し、遺構平面図の作成を行う。
- 12月28日 出土遺物を埋蔵文化財センターに搬出する。

#### 【2001年】

- 1月5日 SE611の断ち割りを行う。井戸枠を取り上げ、平面図などを補足する。
- 1月11日 Pit11・12の断ち割りを実施し、断面図を作成する。SE627の断ち割りを行い、下段の曲物を取り上げる。
- 1月13日 発掘調査を終了する。

#### G地区

#### 【2000年】

- 11月11日 調査区南側から表土除去を開始する。包含層から石築・弥生土器など出土。
- 11月16日 表土除去を終了。地区杭を設定。
- 11月22日 調査区北側で道路部分SD716から統くSD715などの溝2条を検出する。

- 11月24日 SK703の平面図を作成する。
- 11月29日 南壁面の土層断面図を作成する。
- 12月2日 西壁面の土層断面図を作成する。
- 12月8日 SK703の底部から土師器杯と曲物側板が出土する。
- 12月11日 調査区南側から平板測量を行う。
- 12月14日 SK703の曲物側板の下からロクロ土師小皿が出土し、図面に補足する。
- 12月22日 全体写真撮影。

#### 3 調査の方法

##### a 調査区の設定

今回の調査では、小地区を設定して調査を行った。調査区内を4m四方の升目で区切り、西から東にアルファベットのA～Zを、北から南に数字の1～31を付けた。なお、この小地区の設定は、国土座標軸とは無関係である。

##### b 掘削について

表土掘削については、重機を使用した。また包含層掘削については基本的に人力によったが、遺物の包含が希薄な部分については重機を使用した。

##### c 遺構図面について

調査区の遺構平面図は、道路部分および道路部分に沿う南の排水路部分西半については1/20の実測図を作成した。また排水路部分東半および南北方向の排水路部分については平板測量により1/100で作成した。井戸・土坑については個別に1/10または1/20の実測図を作成した。土層断面図は1/20の実測図を作成している。

##### d 遺跡の名称について

替田遺跡は、中勢バイパス建設にともなって平成8・9年の2か年にわたり第1次および第2次調査として安濃川右岸の堤防跡から南側を、A～D地区に分けて調査が行われている。また平成11年度のかんがい排水路事業にともなう揚水塔建設部分の調査として遺跡内、三泗川沿いに第3次調査が行われている。そのため今回の国道163号国補道路特殊改良事業および県営ほ場整備事業間にともなう調査を第4次調査とした。

## II 位置と歴史的環境

### 1 位置と地形

鈴鹿山脈の錫杖ヶ岳付近に源を発する安濃川は、津市北河路町、南河路付近で、大きく北東から東に向きを変え、沖積平野をさらに蛇行しながら島崎町付近で伊勢湾に注ぎ込む。替田遺跡(1)は、その安濃川が大きく屈曲する南河路集落の南西に位置する。

替田遺跡は、第2図の遺跡地形図から安濃川下流域右岸の自然堤防から南側に張り出した標高6.4～6.9mの方形状の微高地に位置していることがよみと

れる。この微高地とその周囲との比高差は、復元した等高線によると40cmほどである。また遺跡の規模は、東西360m、南北260mにわたるものである。替田遺跡は、中勢バイパスによる調査によって弥生時代中期の堅穴住居や平安時代の掘立柱建物などが見つかり、今のところ弥生時代以降の集落遺跡と考えられている。

地形については、北を流れる安濃川をはじめ、西を流れる三泗川の河成堆積によって形成されたもの



第1図 遺跡位置図 (1: 50,000) (国土地理院 1: 25,000 津東部・津西部)

と考えられる。一般的に自然堤防や微高地には、居住域として集落がつくられ、その背後の後背湿地（バックマーシュ）には、生産域としての水田がつくられたと考えられる。

今回の調査区は、南河路集落の南西150mに位置し、行政上は津市南河路字又口にあたる。標高は約6.9mである。

## 2 歴史的環境

替田遺跡周辺の歴史を、安濃川下流域の沖積地を中心にして概要を述べることにする。

縄文時代には、安濃川左岸の松ノ木遺跡(2)で、晚期の河道と共に同じ時期の竪穴住居が確認されている。また宮ノ前遺跡(3)では中期後半の土坑などが見つかっている。

弥生時代になると、安濃川下流左岸の沖積地に納所遺跡(4)が前期に出現する。伊勢湾西岸への弥生文化の伝播は、一志郡三雲町の中ノ庄遺跡に始まり、安濃川下流域の拠点的集落である納所遺跡に伝播したとされる。<sup>5</sup> 納所遺跡からは前期の鍬や鋤などの木製農具が多数出土しており、すでに安濃川下流域で農耕文化が定着していたことが知られる。また南の半田丘陵北裾部に位置する上村遺跡(5)では、鉄塔建設にともない弥生土器が出土し、昭和46年の鉄塔移設に際しての調査では、鎌倉時代の壇状遺構などを見つかり、複合遺跡であることが判明した。殊に前期の弥生土器が出土して前期新段階に遡る遺跡として著名になった。また同遺跡からは市道の整備にともなう調査で、前期から中期の弥生土器や石器のほかに木製農具の鍬も出土している。<sup>6</sup>

中期の集落としては、安濃川左岸の沖積地に立地する蔵田遺跡(6)で、中期前半の掘立柱建物が見つかっている。またこの時期の遺跡には、右岸の沖積地で、中勢道路建設に伴って調査された替田遺跡の方形の竪穴住居と共に円形の焼失家屋が確認されている。さらにその南の式ノ坪遺跡(7)からも焼失家屋が確認されている。中期後半には、安濃川の沖積地から離れて北の見当山丘陵上に集落が現れる。丘陵上の長遺跡(8)やその関連の遺跡と考えられる山籠遺跡(9)では斜面に計画性をもつ200棟余の大規模な竪穴住居群が見つかっている。長遺跡では、丘陵斜面を

階段状に削平し、各段は竪穴住居2~4棟を単位とする住居支群を構成している。<sup>10</sup>

後期の遺跡としては、南の半田丘陵で住宅団地の造成や近畿自動車道の建設が行われ、それにともなって調査された柳谷遺跡(10)や大ヶ瀬B遺跡(11)の丘陵上の遺跡や丘陵斜面の平栄遺跡(12)では、後期前半の竪穴住居が見つかり、重複を考えると3棟~4棟を単位として構成される小集団が丘陵上に存在していたと考えられている。また近隣には後期の方形台状墓として確認された大ヶ瀬弥生墳墓(13)がある。<sup>11</sup> さらに同じ丘陵東部の高松遺跡群(14)では、後期から古墳時代前期にかけて32棟の竪穴住居や方形周溝墓を検出した高松C遺跡がある。<sup>12</sup> その南の丘陵頂部には後期の方形台状墓として高松弥生墳墓が確認されている。竪穴住居群は東斜面に階段状に作られ、祭祀的な性格をもつとされる大型住居の周間に小型住居が取り巻く特徴をもっている。高松C遺跡の北西に隣接する尺目遺跡(15)では、後期前半の切り合う竪穴住居が確認されている。これらのことから半田丘陵での弥生集落の様相が明らかにされつつある。

半田丘陵から北側に延びた支脈にあたる神戸集落南東の木の根地区には、神戸銅鐸出土地(16)がある。この地からは大正6年(1917)に磨き砂の採掘に関連して全面が銹化した流水文鐸が出土している。この神戸銅鐸は、近畿式で外縁鉢2式である。また、野田集落付近からも銅鐸が出土している。この野田銅鐸は江戸時代に出土したとされ、銅鐸は身に斜格文や綾文などを施す横帯文がみられる。三河や遠江地方に多い三連式で突線鉢3式にあたる。

安濃川流域での前期古墳には、片田志袋町に所在する坂本山古墳群(17)がある。古墳群は方墳と円墳で構成される。坂本山6号墳の埴輪から出土した古式土師器から4世紀末~5世紀初頭とされ、安濃川流域で最古の古墳群とされている。<sup>18</sup>

中期の古墳には、中流域の首長墓とされる明合古墳がある。この古墳は南北に造り出しをもった二段築成による一辺約60mの大規模な方墳である。一方、半田丘陵の東端部に所在する池の谷古墳(18)は、全長約80mの前方後圓墳で下流域での首長墓とされ、中勢地方で最大級の前方後圓墳である。その頂きか

らは伊勢湾を一望できる。

神戸集落南西の半田丘陵には、前方後円墳や群集墳が集まっている。この中で最大の規模をもつ前方後円墳の鎌切1号墳(19)は、全長50mほどで5世紀代の築造とされる。またその南西には全長29mほどの前方後円墳であるおこし古墳(20)がある。古墳からは6世紀前半の須恵器が表現されている。またその南東の丘陵には全長30mほどの前方後円墳である西垣内古墳(21)が存在する。これら前方後円墳の周辺には神戸古墳(22)をはじめ、名塚古墳群(23)、にんごう古墳群(24)などの群集墳が散在する。

集落としては、半田丘陵の新畠遺跡(24)から前期の堅穴住居が見つかり、安濃川流域の沖積地では藏田遺跡で中期の掘立柱建物が確認されている。

古代には、安濃川地域の大部分は安濃郡に属していた。安濃郡には『和名抄』によると建部・英太・

長屋・跡部郷など九郷があったが、南河路や野田集落のあたりは岩田郷に属していたと推定される。

飛鳥から奈良時代の集落には、見当山丘陵南の宮ノ前遺跡で飛鳥時代の掘立柱建物が、沖積地中央の藏田遺跡で飛鳥時代の掘立柱建物と奈良時代の掘立柱建物や井戸などが確認されている。安濃川右岸の替田遺跡では中勢道路の建設によりA～D地区に分けて2か年の調査が行われ、替田遺跡D-2区で奈良時代後期の井戸が確認されている。

平安時代になると、安濃郡は天孫4(973年)に円融天皇の寄進により神郡になる。国衙がもつような行政権や警察権などの権限も伊勢神宮の掌握するところとなる。また後期ごろには安濃郡は安東郡と安西郡の二郡に分れる。今の南河路集落付近は安東郡の西辺部にあたる。また10・11世紀には神宮の御園や御厨が拡大するが、『神鳳抄』などによると長岡御



厨、野田御厨、跨部御厨などの御厨が見られる。

平安時代の集落には、安濃川左岸の自然堤防上に位置する位田遺跡(25)で、綠釉陶器や碁石が出土しており、中央と深い結びつきをもつ後期の富豪層の館跡が見つかっている。また対岸の替田遺跡では、安濃川の河川にもっとも近いD地区で、後期から鎌倉時代初期の総柱建物が15棟見つかっている。またB地区からもこの時代の掘立柱建物や井戸のほか、河道から石帶が出土しており特筆される。

安濃川を少し上游に遡った右岸の安濃町津寺寺南遺跡では、後期の規格性をもった掘立柱建物が見つかっており、綠釉陶器や円面鏡などの遺物や井戸の形態から地方官衙的な建物とされている。

安濃川流域ではほ場整備事業が行われるまで、条里の名残りが確認できた。右岸の沖積地にある式ノ坪遺跡では、条里方向に棟を描える規格性をもった前期から中期の建物群が見つかっている。その東に位置する神戸遺跡(26)の調査では、時期は不明ながら「坪」を区画する平行する溝が見つかっている。また左岸の藏田遺跡では、末期から鎌倉時代初頭の1棟から2棟の建物に井戸がともない、条里方向に沿う溝によって区画された屋敷地が散在していることが確認されている。

平安時代の官道は、東海道を閔(古城)で分岐して伊勢・志摩に向う伊勢道が通っていた。この伊勢道には三駅がみられ、その中で市村駅は、津市の殿村付近がその可能性が高いとされている。岩田川右岸の梁瀬遺跡(27)では半田丘陵の北側を通ると考えられる東西方向の道路状遺構が検出されている。

中世では、安濃郡の東に位置する港湾都市である安濃津がある。安濃津は日本三津の一つにあげられ、15世紀末の明応の大地震によって壊滅的な状況となつた。近年の調査から安濃津遺跡群(28)は、安濃津の想定地とされ、安濃津柳山遺跡(29)では13世紀中頃の尾張型の陶器椀の出土から、伊勢湾での海運が盛んに行われていたことを物語っている。また遺構は一時期途絶えるものの15世紀後半以降に再び集落の営みが見られ、出土した大半を占める南伊勢系土師器から伊勢神宮領の安濃津御厨との関連性も考えられる。

岩田川左岸の里前遺跡(30)では、鎌倉時代中葉か

ら後葉の多量の陶器椀が出土し、その中で尾張型が多数を占め安濃津との関連性も考えられる。また墨書きされた陶器椀が多種類におよぶのが特徴であり、このことから岩田川を通じて内陸への荷揚地としての可能性も考えられている。

中世の文献には、元徳元(1329年)の「安東都専当沙法文」がある。この文献は、安東都内の常供田の場所と納稅の責任者である丁部の所在地と名前が記されている。常供田とは神宮領の一つで神都内から優れた良田を選び、神宮での祭祀の経費にあてる糲や餅などを納稅するもので、その耕作は丁部が行い、管理は神宮から派遣された安東都の専当があつた。常供田の分布については、津市西方の納所、刑部、中跡部、渋見付近とされ、安濃川下流域の神積地一帯に分布していたものと考えられる。

また前述した文献の中で、安濃津から伊勢神宮への運搬について次の記載がある。

一 (前略) 丁部等面々馬一疋。口付一人宛出之。御糲俵餅俵等。津湊度々員下之間。湊漕丁部請取之。御船奉積之。

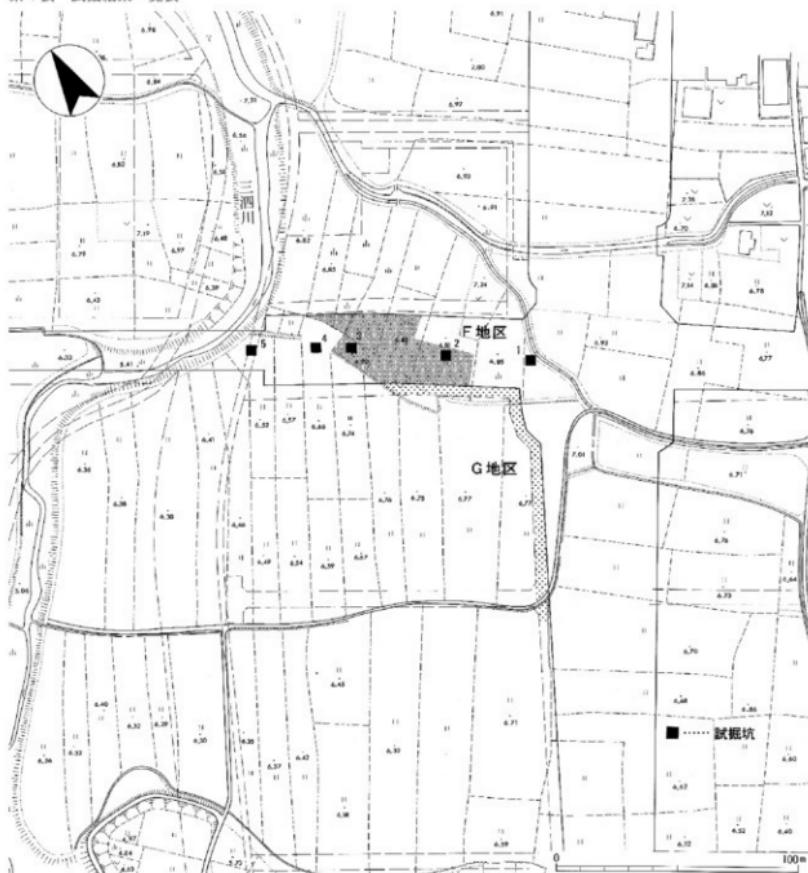
この文から、常供田からの糲や餅などの税は津市西方の農村地帯から、一度、納所町の神宮寺に集荷され、そこから丁部によって丁部一人毎に馬一疋を出して、馬荷により安濃津の港に運ばれた。安濃津からは港の漕丁部により船積みされて伊勢神宮へ運搬されたことがわかる。

また、この文献には「丁部河路宮内」や「丁部河路石若四郎」の丁部の名が見え、「河路」とは現在の北河路または南河路の地名との関連性も考えられるが、詳細は不明である。

江戸時代には、南河路は慶長13(1603)年に津藩領となる。藤堂高虎が津城主になった際に、津城下を洪水から守るために安濃川右岸の南河路、一色、殿村の字界にある堤防を改修し、三酒川からの溢水を南の岩田川に流れるようにしたと言う。現在も堤防は一段低くなつておらず、地元の人々はこの付近をさんしと呼んでいる。三酒とは安濃川とその支流の穴倉川、南の岩田川を指すのであろう。(宮田勝功)

試掘坑 No.	遺物包含層 上面の深さ	遺構上面 の深さ	遺構	遺構	備考
1	— cm	— cm	—	—	—
2	—	—	—	—	—
3	35	45	土坑・ピット	須恵器、土師器壺 陶器枕	
4	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—

第1表 試掘結果一覧表



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

[註]

- ④ 道跡範囲は、平成10年度および平成11年度の春季が現場監査事業の試験調査による。地形の因襲にあたっては、津市教育委員会の米山弘之氏の御協力を得た。

⑤ 池端道、水橋公也ほか「野川道跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財調査報告書』X・Y・Z 三重県埋蔵文化財センター 1997・1998年

⑥ 竹内昭彦「木ノ道跡・森山東道跡・太田道跡」三重県埋蔵文化財センター 1993年

⑦ 飯田利純は小「宮ノ道跡」『大古曾道跡・山籠道跡・宮ノ前道跡』三重県埋蔵文化財センター 1995年

⑧ 伊藤久嗣は小「所ノ道跡—遺構と遺物—」三重県教育委員会 1980年

⑨ 吉村正男「上「所道跡発掘調査報告書」津市教育委員会 1972年

⑩ 津市教育委員会の御教訓による。

⑪ 采田ひさし・宮田勝功「錦糸道跡発掘調査報告書」三重県埋蔵文化財センター 1999年

⑫ 前掲記②

⑬ 池端道にはか「足ノ坪道跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査報告書』X 三重県埋蔵文化財センター 1998年

⑭ 池端道「長坂道跡発掘調査報告書」三重県埋蔵文化財センター 2000年 宮室重義「長坂道跡発掘調査報告書」津市教育委員会 1987年

a 浅生悦生「野川道跡発掘調査報告書」津市教育委員会 1974年

b 伊藤久嗣「木ノ道跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告書』三重県教育委員会 1973年

⑯ 伊藤久嗣「大ヶ瀬道跡」前掲記a

⑰ a 采田康光は「高松ノ道跡発掘調査報告書」『市原市埋蔵文化財センター』年報3・4 1999年

b 長谷川博「高松C遭難児掘調査中間報告」『津市民文化』3 1976年  
c 三重大学古代歴史支部会「津市高松露生遭難について」『古代学研究』  
337号 1964年

- 番 谷本聰次「高松孙生堀安斎発掘調査報告」津市教育委員会 1970年

室 宮康元「日置道跡発掘調査報告」津市教育委員会 1975年

小 玉道明「吉山古墳群・坂本古墳から中世墓群」津市教育委員会 1970年

古 村利男「新燃道堀安斎発掘調査報告」津市教育委員会 1973年

西 町美幸は「吉田道跡（第2次）D-2地区」前掲注②

安 安藤は、以降、古代の安濃部を指すものとする。安濃部の名は、古代、近世、明治から昭和31年まで称されていた。安濃部は平安時代後期頃に東安・西安兩郡に分立し、中世には兩郡の名が見られ、近世になつて豪族体制により変遷にされ、再び安濃部になった。

○米山弘之「吉田道跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1993年

水橋千恵「持田道跡（第1次）D地区」前掲注③

前掲註④

中村邦裕「淨寺寺南遺跡」昭和55年度黒岩園整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告書 三重県教育委員会 1981年

中川一「神乃谷道跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1999年

前掲註⑤

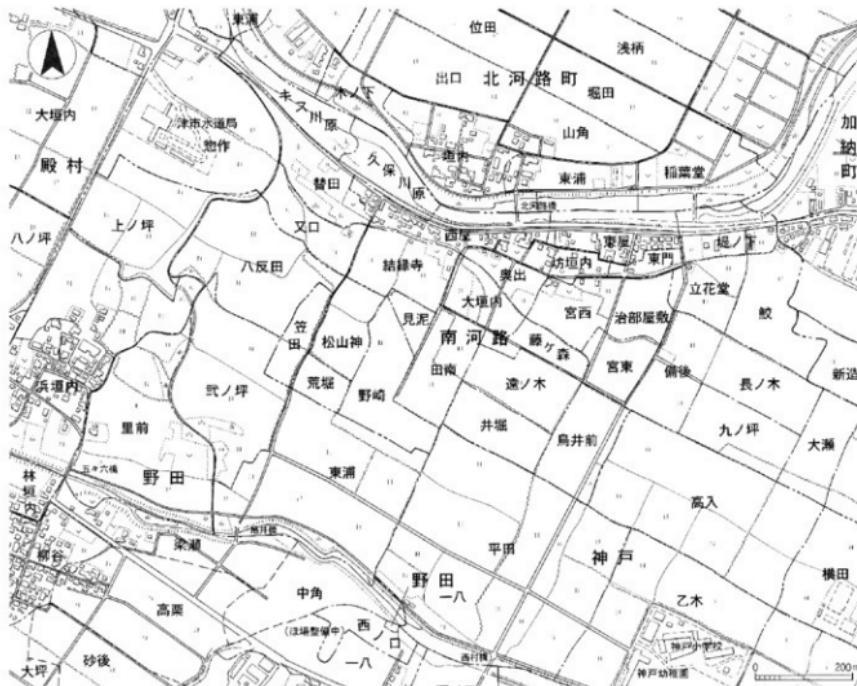
林木一郎・宮田勝功「栗原道跡」一般社団法人23号区中勢道路埋蔵文化財発掘調査報 告X-1」三重県埋蔵文化財センター 1997年

伊佐裕信「宇賀野、綱括」「安濃道」三重県埋蔵文化財センター 1999年

山口裕一・西町美幸「里前道跡」前掲注

○「郡書類類纂」巻五百一 一體部五十九

○小阪弘「安濃部碑文」「ふよと」第40号 1983年



第4図 遺跡付近字切図 (1: 10,000)

### III 替田遺跡（F地区）の成果

#### 1 層序

調査地の現状は、荒地および水田である。また南側には空地となっている高まりが見られた。遺物包含層は調査区西側には見られたが、東側の水田にはなく耕作土および床土の下がほぼ検出面であった。最も厚く包含層が見られたのは南側の高まりであつた。包含層は第3層の褐色系および第4層の灰色系の砂質土で、飛鳥～平安時代を中心に弥生時代から鎌倉時代の遺物を含んでいた。

基本的な遺構検出面となるのは、第5層の灰色砂質土（鉄分を含む）の上面である。この層は調査区南部と東部に見られたが、調査区の北西部（S R 601より北側）では、灰色砂質土（鉄分を含む）と同じレベルで褐色系の砂質土を検出した。褐色系土を掘削すると、その下は灰黄色砂であった。またトレンチを設定し、基本検出面となる灰色系が下にもぐり込んでいることがわかった（第5図）。そのため流路 S R 601より北は、旧河道または氾濫による堆積と考えられた。遺構は褐色系土上面で検出できると考えられたが、遺構埋土が同色系であるため検出が困難であった。これらの検出面で弥生時代中期以降の遺構を検出した。

基本的層序は、上から順に次のとおりである。

- 第1層：オリーブ灰色砂質土（耕作土）
- 第2層：橙色砂質土（床土）
- 第3層：褐色砂質土
- 第4層：灰色砂質土
- 第5層：灰色砂質土（鉄分を含む）

#### 2 遺構

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代の流路・土坑・溝、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・土坑・溝、平安時代の掘立柱建物・柱列・井戸・土坑・溝、鎌倉時代以降の土坑・溝などである。また調査区の南側はG地区と隣合わせのため、遺構が分かれるS E 627については、本稿で扱った。以下に主な遺構について述べる。

##### （1）弥生時代の遺構

#### A 流路

S R 601（第5図） e 3から14グリッドで検出した東西方向の流路である。幅は最大で約5.9m、検出面からの深さ約80cmである。流路に入れたトレンチ断面からS D 608が流路の第12層にあたることがわかり、S D 608から出土した弥生時代中期の蓋(4)や甕などはS R 601のものと考えられ、流路は中期に形成されたものである。

S R 630（第13図） o 7・o 8 グリッドで検出した流路である。長さ約2.0m、幅約2.0m、北西から南に弓なりに湾曲する。検出面からの深さ1～12cmで、南西側が浅く、湾曲する北東側にむかって次第に深く掘り込んでいる。その掘り込んだところに約50cm×約25cmの範囲に炭化物が集中していた。埋土は炭化物を含む灰色細砂である。流路からは、体部の上半部と下半部とが半壊した状態で出土した受口状口縁の細頸甕(1)や底部を中心にして散乱するように出土した大型の甕(2)がある。このほかに口縁部に刻み目をもつ甕などがある。これらの遺物から時期は、弥生時代中期である。

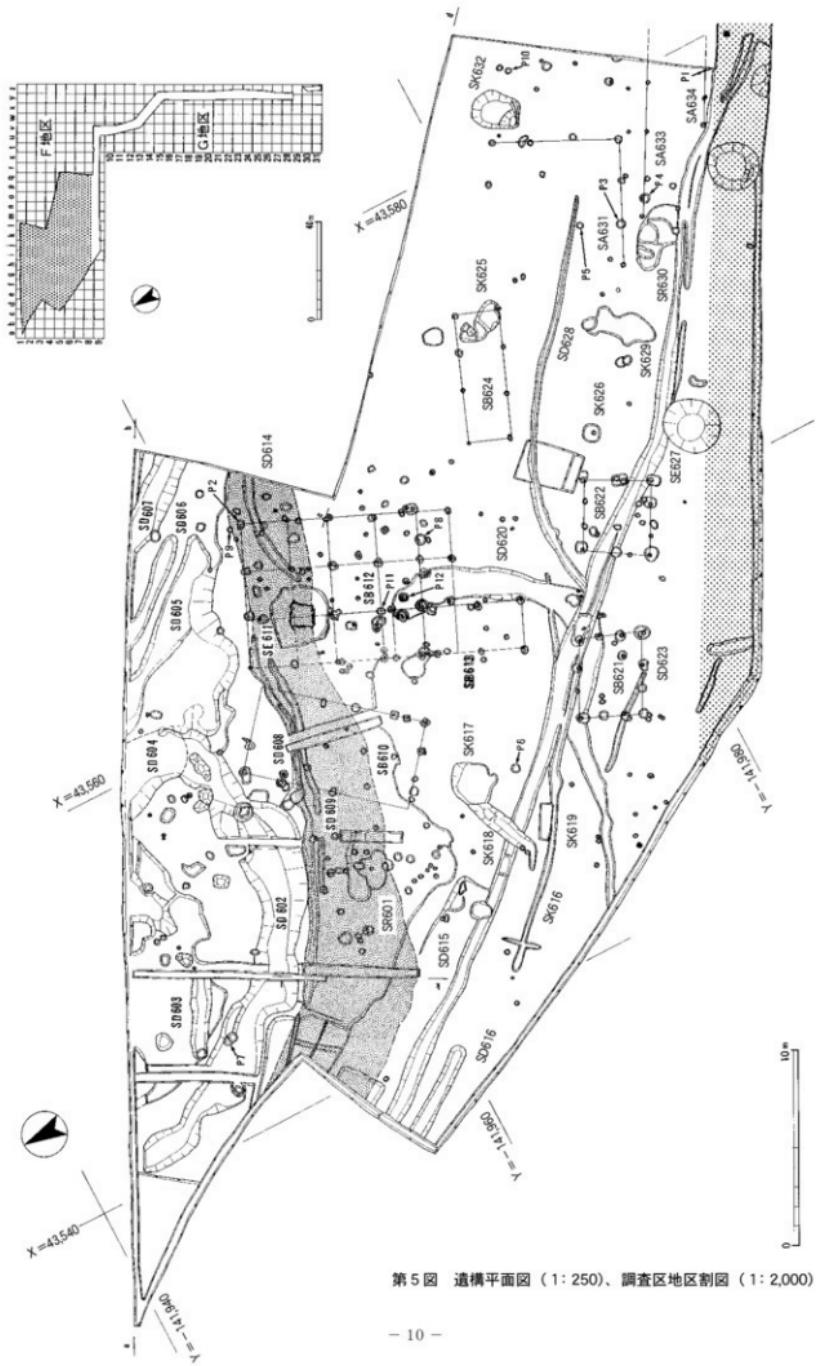
#### B 土坑

S K 618 g 6からh 5 グリッドで検出した土坑である。長さ約3.8m、幅約0.9mで、南端部は西にまがる。検出面からの深さ約50cmで、埋土は紫黒色粘質土である。出土遺物には細片であるが後期の高杯(3)がある。

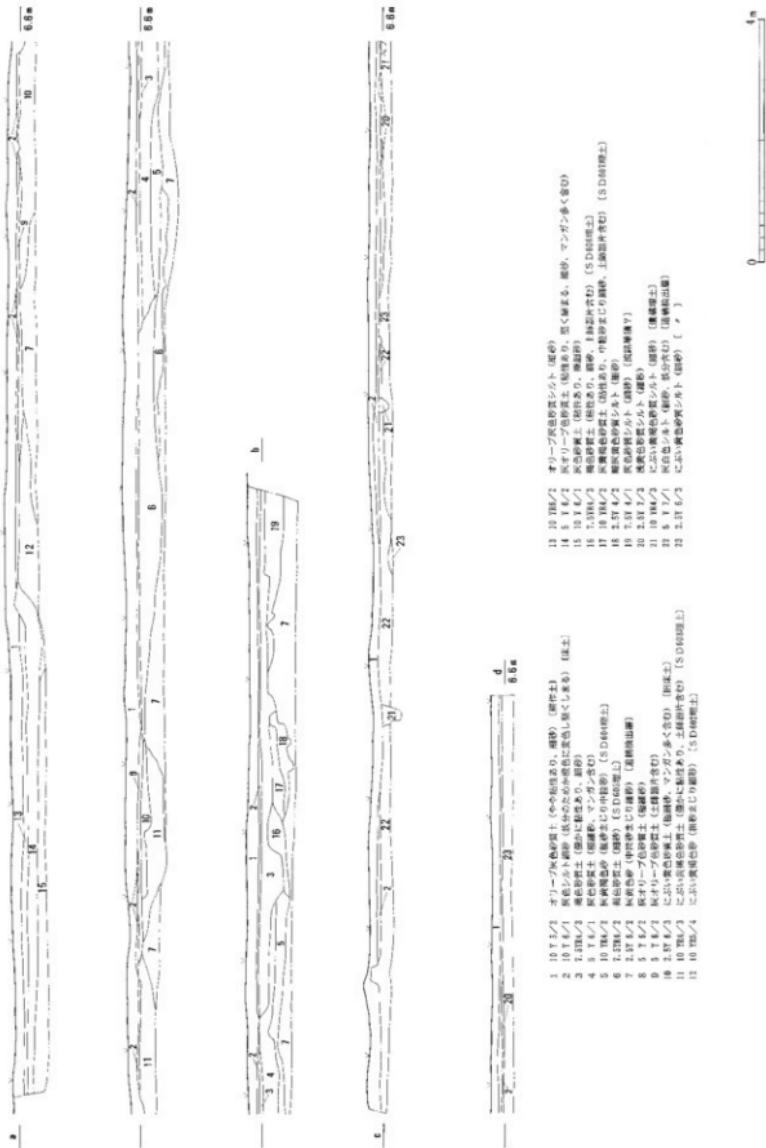
S K 626 l 7・m 7 グリッドで検出した一辺約90cmの隅が丸い方形状を呈する土坑である。検出面からの深さは約8cmと浅い。出土遺物には中期の弥生土器甕やサスカイト片がある。これらの遺物から時期は弥生時代中期と考える。

#### C 溝

S D 608 e 3からj 3 グリッドで検出した東西溝である。幅約24～50cmで、検出面からの深さは6～49cmである。検出時に弥生土器が出土しており、前述したようにトレンチ土壠断面から流路 S R 601の溝であると考えられる。出土遺物には弥生時代中期の蓋(4)や甕などがある。



第5図 遺構平面図(1:250)、調査区地区割図(1:2,000)



**S D 609** g 3からj 3グリッドで検出した東西溝である。幅約30cmで、検出面からの深さは4~33cmである。出土遺物はないがS R 601内の溝である。

**S D 620** j 4からg 7グリッドで検出した南北溝である。幅約0.4~1.9mで、検出面からの深さは3~10cmで浅く、北に向かうほど幅が広くなる。埋土はS K 618と同じ黒色粘質土で、出土遺物には、細片があるが底体部片(5)や表底部(6)などの弥生土器がある。時期は弥生時代中期である。

#### D 小穴

**Pit 4** (第15図) p 7グリッドで検出した径約40cm、深さ約34cmの小穴である。小穴からは中期の弥生土器壺の底体部片(52)がその内面を上にむけて出土した。

#### (2) 飛鳥から平安時代の遺構

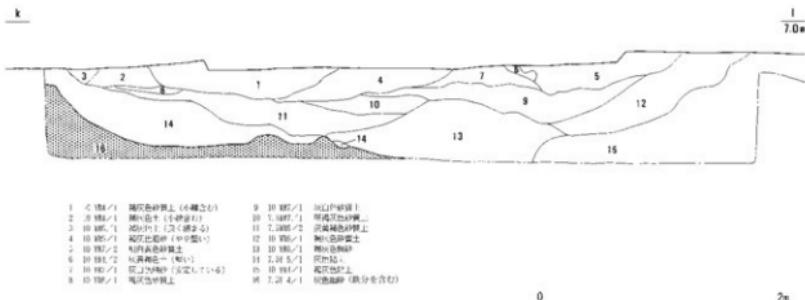
##### A 堀立柱建物

**S B 612** (第9図) j 3からl 5グリッドで検出した南面扉が付く堀立柱建物である。5間(桁行10.65m)×3間(梁行7.35m)の南北棟で、棟方向はN23°Eである。柱掘形は径約20~50cmの円形または方形で、柱穴には径16~20cmの柱痕跡をもつものもある。柱穴の深さは、検出面から7~26cmである。またPit 11(第16図)の柱穴で柱痕(164)を検出した。柱穴Pit 2からは土師器小皿(10)をはじめ、黒色土器碗(11)、灰釉陶器碗(12)、白磁皿(13)のほか、ロクロ土師器皿や畿内からの搬入品と思われる「て」の字状口縁皿などがまとめて出土している。出土遺物から平安時代後期である。

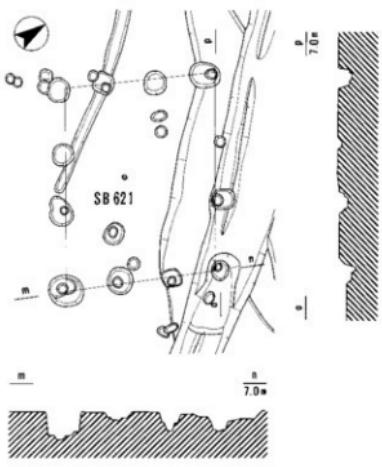
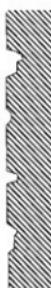
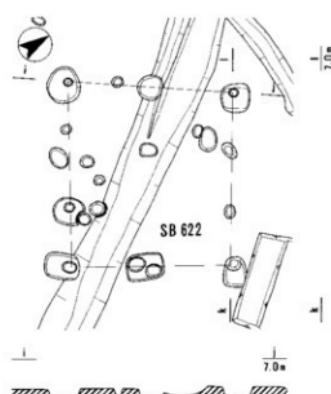
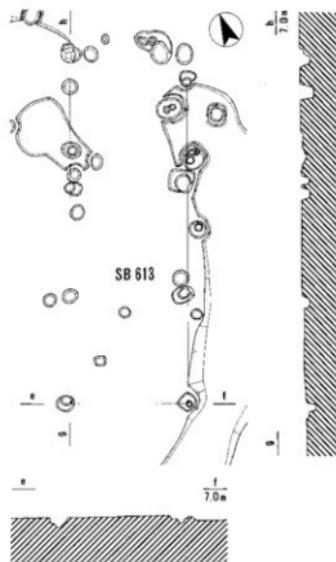
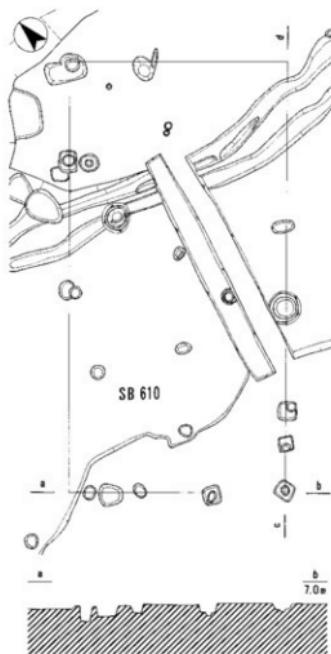
**S B 613** (第8図) j 4からj 6グリッドで検出したS B 612と重複する側柱建物である。3間(6.3m)×1間(2.4m)の南北棟である。棟方向はN23°Eを示す。柱掘形は径約25~45cmの方形または円形で、柱穴の深さは検出面から11~32cmである。柱穴からは土師器や須恵器の細片しか出土していないが、柱掘形や棟方向からこの時期とした。

**S B 621** (第8図) i 8からj 7グリッドで検出した側柱建物である。3間(北桁行4.05m、南桁行4.20m)×3間(梁行3.15m)の東西棟である。棟方向はE28.5°~33°Sである。桁行は北側と南側で一致せず、梁行と桁行の柱筋とは直交しない。柱掘形は径約20~70cmの隅丸方形または梢円形で、柱穴には径16~20cmの柱痕跡をもつものもある。柱穴の深さは検出面から7~64cmである。柱穴からの出土遺物は細片のみであるが、S B 621の北側の桁行柱穴は、飛鳥時代以降の溝SD 615・616によって切られていた。のことからS D 615・616より古い建物と考えられ、飛鳥時代と想定される。

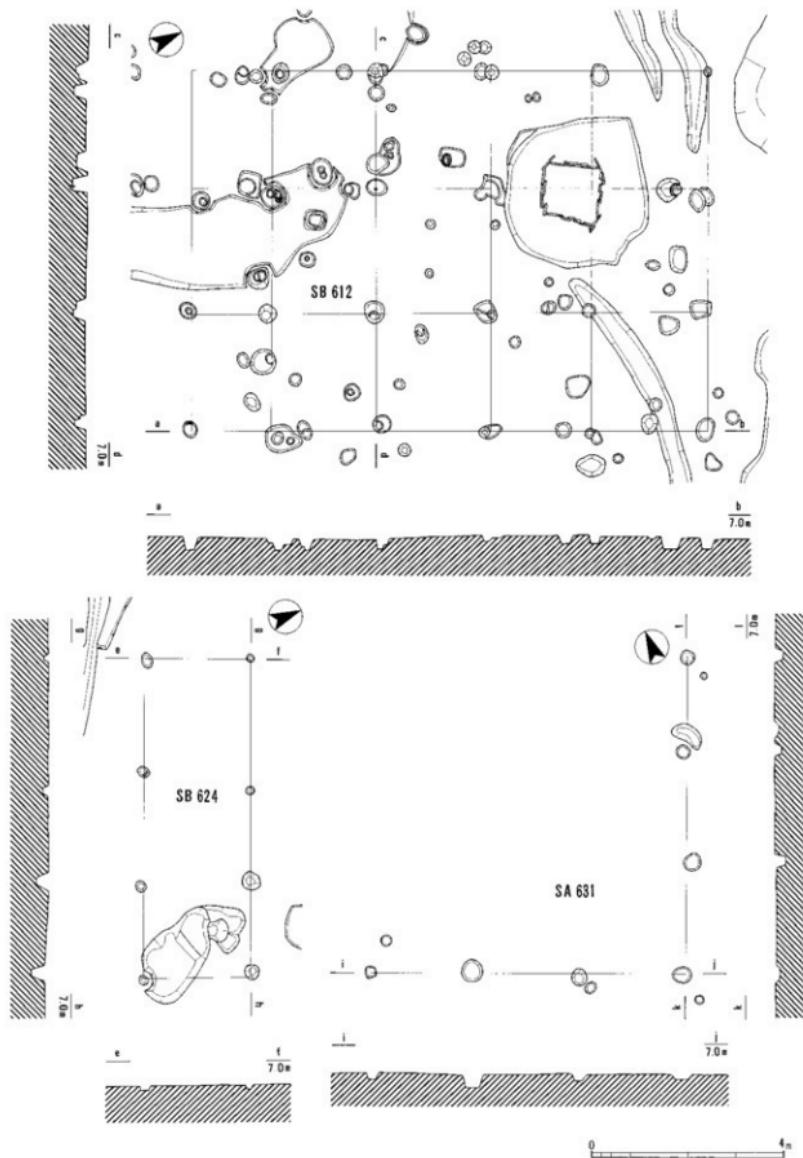
**S B 622** (第8図) k 7からl 8グリッドで検出したS B 621の東隣に位置する側柱建物である。3間(北桁行3.6m、南桁行3.9m)×2間(東桁行3.3m、西桁行3.4m)の東西棟である。梁間および桁間は不揃いである。棟方向はE28.5°Sである。柱掘形は径約50~75cmの隅丸長方形または梢円形で、柱穴には径18~30cmの柱痕跡をもつものもある。柱穴の深さは検出面から10~32cmである。柱穴からの出土遺物は細片のみである。柱穴の埋土はS B 621と同じ黒色粘質土の埋土で、S B 622の東と西



第7図 S R 601トレント土層図 (1:40)



第8図 SB 610・613・621・622平面図・断面図 (1: 100)



第9図 SB 612・624、SA 631平面図・断面図 (1: 100)

の梁行の柱穴は、SD 615・616によって切られていた。のことからSB 621と同時期と考える。

#### B 柱列

**S A 631** (第9図) p 5 から p 7・o 7 グリッドで検出したL字状の柱列である。南北3間(6.6m)、東西3間(6.6m)である。方位はN25°Eを示す。柱掘形は径約20~30cmの円形で、柱穴の深さは検出面から10~28cmである。柱穴Pit 3から出土した土師器皿(14)から平安時代後期である。

**S A 633** (第10図) o 7 から q 7 グリッドにかけて検出した東西方向の柱列である。柱間は3間以上(6.45m)で、柱列の東側は調査区外になり、未掘り部分である。方位はE 30°Sを示す。柱掘形は径約20cmの円形でほぼ揃っている。柱穴の深さは検出面から7~11cmである。埋土は灰色砂質土である。柱穴からの遺物はなく時期決定は困難であるが、SA 634に平行しており、同じ時期と考えられる。

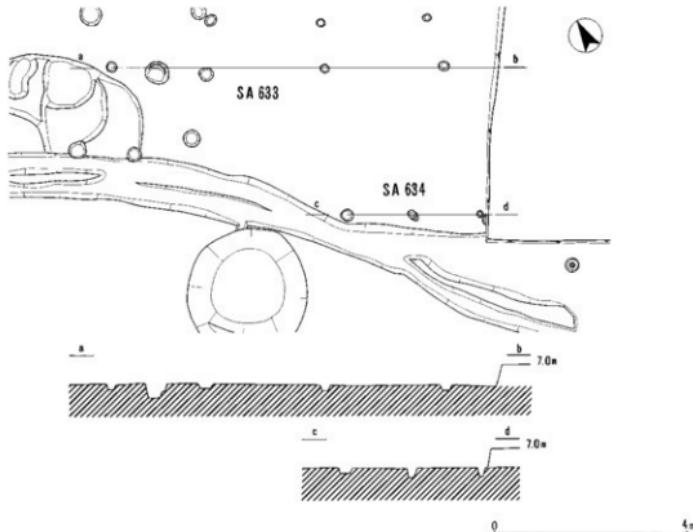
**S A 634** (第10図) q 8 グリッドで検出した北のSA 633に平行する東西方向の柱列である。柱間は2間以上(2.7m)で、柱列の東側は調査区外になり、未掘り部分である。方位はE 30°Sを示す。東側は

調査区外である。柱掘形は径約10~20cmの円形で、柱穴の深さは検出面から約10~30cmである。埋土は灰色砂質土である。柱穴Pit 1から須恵器杯身(7)が出土している。飛鳥時代前半である。

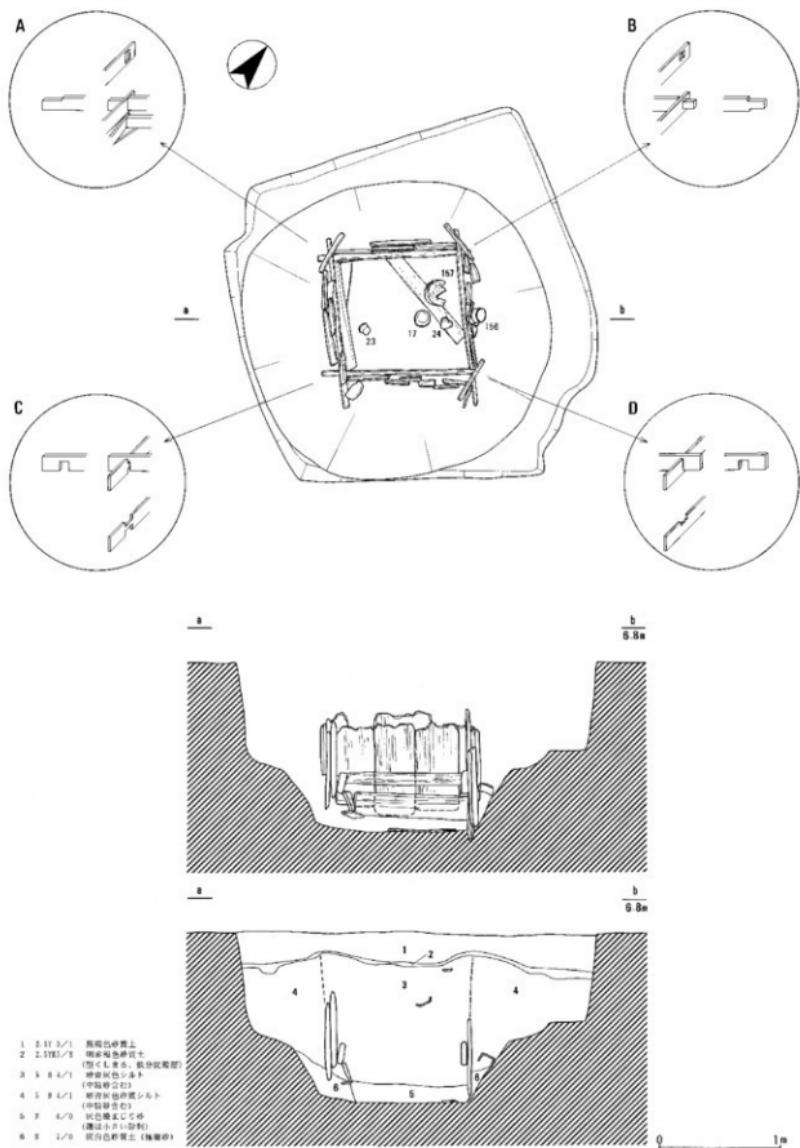
なお、SA 633とSA 634は柱列としたが、この2つの造構の間は、幅約3.0mで平行している。

#### C 井戸

**S E 611** (第11図) j 3 グリッドで検出した井戸である。平面形は四角い一辺約2.6~2.9mの方形形状を呈している。その中に径約2.5~2.6mの円形の掘形を穿ち、その底に木組みの井戸枠を据えていた。湧水層は検出面からの深さ約1.4mで、灰色疊混じりの砂層である。井戸枠は縦板、隅板と二段の横板で組まれており、井戸枠の底には砂利や円礫が見られた。井戸埋土の灰褐色砂質土には、多量の土器細片を含んでおり、この埋土を除去すると、検出面からの深さ約16~28cmほどで暗赤褐色砂質土の中央部がやや窪む円錐状の高まりを検出した。この層は厚さ2~4cmほどで硬くしまっていた。当初は焼土かと思われたが、周辺の壁やこの埋土中にも炭化物が見られず鉄分が沈殿した層である。またこの内部



第10図 SA 633・634平面図・断面図 (1: 100)



第11図 SE 611平面図・断面図・土層図 (1:40)

は暗青灰色系シルトであった。

井戸枠の作り方は、まず上段の横板を組み合わせる。西側横板の両木口につくった出柄に南北の横板の西木口につくった角柄を組み合わせる(第11図A・B)。その後、東側横板の両端の切り込みに南北の横板の東木口に入れた切り込みを組み合わせる(同図C・D)。横板を組んだ後に幅約15~50cmの縦板をその尖った部分をすべて内側にして打ち込む。次に下段の横板を組む。下段は枘や切り込みをつくらず切断したままのものを組んでいる。北側の横板は井戸枠内にはずれた状態で出土した。また南西隅の横板の下には下板が充てがわっていた。横板を組んだ後、最後に四隅の横板の上に隅板を据える。四隅から土が流れ込まないと考えられる。

出土遺物には、井戸枠内部から底部外面に墨書きをもつ土器器杯(20)、灰釉陶器碗(23)や曲物(181)などが出土した。また井戸掘形からは曲物底板(156)や底部を上にした状態で曲物(157)が出土した。この他に縁輪陶器片も出土している。井戸の時期は平安時代前期と考えられる。

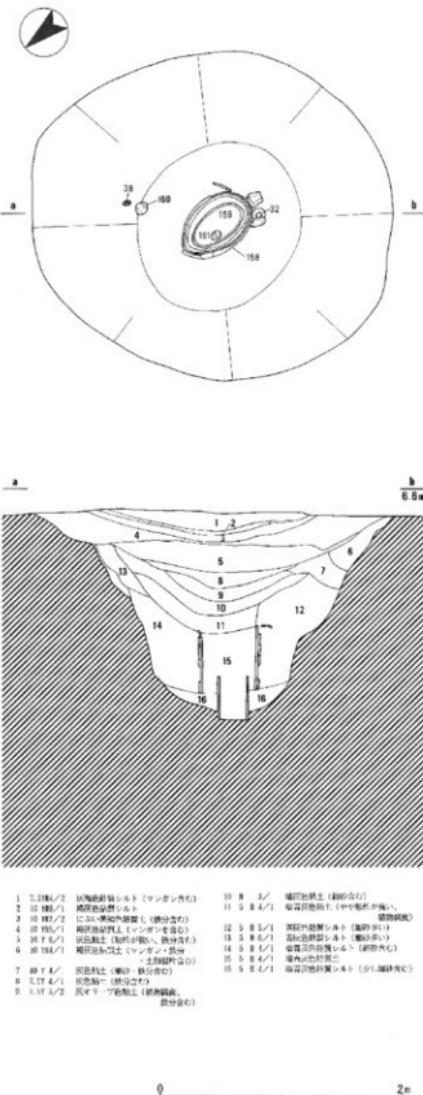
S E 627(第12図) 18からm 8グリッドで検出した径約2.7~3.0mで、南北にやや長い梢円形を呈する素掘りの井戸である。検出面からの深さ約1.6mである。埋土はにぶい黄橙色系の層を挟んで、灰褐色系と青灰色系の上下2層に分けた。井戸中央には井筒として使用された曲物が上下2段に組まれていた。共に曲物は歪んで梢円形を呈していた。

出土遺物は、ほとんどが細片であるが、埋土下層から「て」の字状口縁皿や北東壁面に張りつくように曲物底板(160)などが出土し、井戸掘形から土器器杯やロクロ土器器の台付小皿(32)、井戸枠内からは陶器碗(以後、いわゆる山茶碗のこと)をこのように表記する)や土器器皿などの細片をはじめ、手捏ね土器(38)や曲物底板(161)などが出土した。

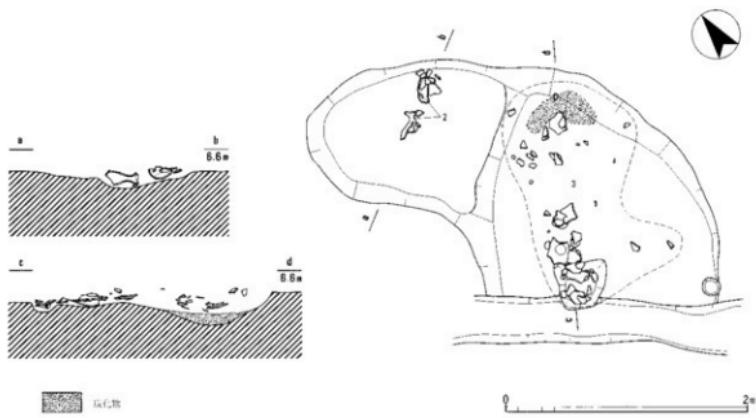
土層断面から遺構面に似る黄橙色系の層が見られ、一度整地されたものと考えられる。井戸の時期は平安時代後期とされる。

#### D 土坑

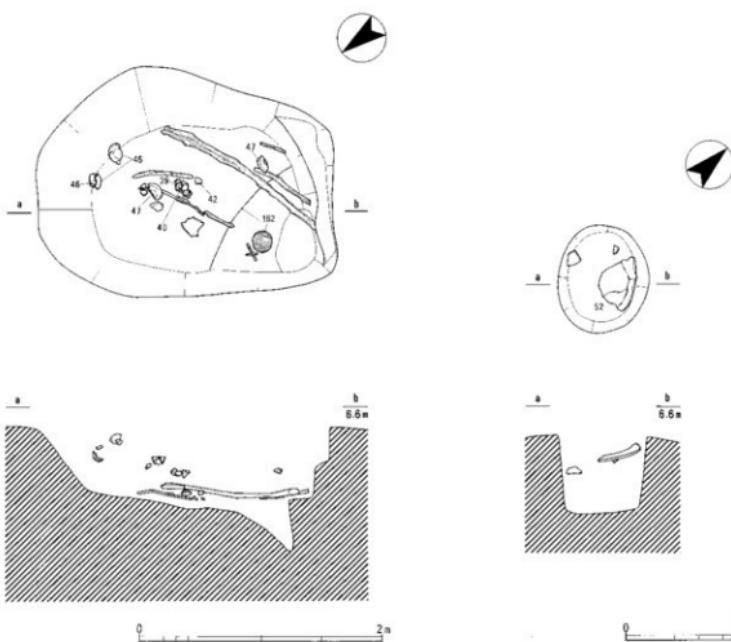
S K 619 g 6・h 6グリッドで検出した長方形を呈する土坑である。長さ約1.9m、幅約53~65cm、検出面からの深さ13~19cmのSD 16に平行するよ



第12図 S E 627平面図・土層図 (1:40)



第13図 SR 630土器出土状況図 (1: 40)



第14図 SK 632遺物出土状況図 (1: 40)

第15図 Pit 4 土器出土状況図 (1: 20)

うに検出した東西に細長い土坑で、底面は平坦である。また墓坑の可能性もあるが、棺痕跡や鉄釘などは見られなかった。出土遺物には、製塙土器片や土師器杯片などがあり、時期は平安時代前期である。

S K632 (第14図) p 5からq 6グリッドにかけて検出した土坑で、長さ約2.4m、幅約1.9mの北側がやや丸い長方形を呈する。検出面からの深さ48~108cmである。埋土は灰褐色系砂質土の上層と青灰色系粘土の下層に分けることができる。上層からは黒色土器柵(45)、灰釉陶器柵(46・47)などが出土し、下層から土師器小皿(39・40・42)や須恵器甕の体部片などの土器のほか、曲物底板(162)や自然木が出土した。時期は平安時代後期である。

#### E 溝

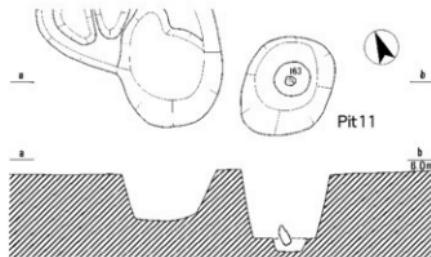
S D615 d 4からr 9グリッドで検出した北西から南東方向にはぼ直線的に流れる東西溝である。調査区内で検出した長さは、G地区部分を含めると約64mになる。幅約35~90cm、検出面からの深さ2~18cmである。跡跡が立地する微高地を直線的に流れている。出土遺物には須恵器杯蓋(8)や高台付杯(9)、土師器高杯(71)などのほか、縄文土器(59)も出土している。遺構の時期は飛鳥時代と考えられる。

S D616 d 5からt 9グリッドで検出した溝で、西侧ではS D615に平行して南東方向に流れ、東側でS D615を切る溝である。幅約30~80cm、検出面からの深さ3~13cmである。出土遺物には須恵器杯蓋・甕片、平安時代の土師器杯・甕片などがある。時期は飛鳥時代から平安時代である。

#### (3) 鎌倉時代以降の遺構

##### A 土坑

S K617 h 5・h 6グリッドで検出した土坑で、



一辺約2.2~2.3mの北東部がやや出る方形状の土坑である。検出面からの深さ7~18cmである。土坑の南西部は弥生時代中期のS K618を切っている。出土遺物は僅かながら陶器柵(49)などがあり、鎌倉時代以降である。

#### (4) 時期不明・その他の遺構

##### A 捩立柱建物

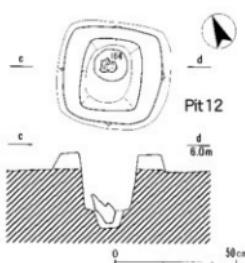
S B610 (第8図) h 3からi 5グリッドで検出した南北棟の側柱建物である。桁行・梁行とともに柱穴を一部検出できなかったが、規模は4間(桁行8.85m)×3間(梁行4.5m)と推定される。棟方向はN 39°Eを示す。柱掘形は径約30~50cmの方形または円形で、柱穴の深さは検出面から12~27cmである。柱穴からは土師器細片しか出土していない。

S B624 (第9図) l 5からn 6グリッドにかけて検出した側柱建物である。3間(桁行6.6m)×1間(梁行2.25m)の東西棟である。建物の方位はN 22°Eである。柱掘形は径約16~30cmの円形である。柱穴の深さは検出面から9~29cmである。柱穴からは土師器甕体部片しか出土していないため時期不明としたが、S B613とは規模が類似し、棟方向の振りがほぼ90°であることから、S B613と同時期の可能性が高い。

##### B 土坑

S K625 n 5・n 6グリッドで検出した不整形な土坑である。長さ約1.2~2.1m、検出面からの深さ21~34cmで、出土遺物には土師器や須恵器の細片などがある。

S K629 n 6・n 7グリッドで検出した不整形な土坑である。長さ約3.5m、幅約0.9~1.5m、検出面からの深さ3~4cmで浅く南北に長い。出土遺



第16図 S B612のPit11・Pit12柱根出土状況図 (1: 20)

物は土師器などの細片にとどまる。

### C 溝

S D 602 c 1 から h 3 グリッドで検出した流路である。幅約1.0~3.7mで、南側に大きく湾曲する。検出面からの深さ約20~50cmである。埋土は褐色粗砂である。S D 604から続く溝と考えられたが出土遺物はなく、自然堆積の可能性もある。

S D 603 d 1 から g 1 グリッドで検出した溝である。調査区南側に約5mほど張り出す。落ち込みと考えられる。幅約0.5~2.5mで、検出面からの深さ7~20cmである。西側底が最も深く約35~40cmである。出土遺物には常滑産の陶器壺(50)のほか、繩文土器(60)、土師器皿(77)・甕、土錐(119)、須恵器甕や陶器椀が出土している。

S D 604 h 1 グリッドで検出した溝である。落ち込みと考えられる。長さ約2.5m、幅約4.6mで、検出面からの深さ20~34cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

S D 605 i 1 から k 1 · k 2 グリッドにかけて S D 606に平行するように検出した塊状の擾乱土を埋土にする東西溝で、幅約0.7~2.0mで、検出面か

らの深さ18~25cmである。出土遺物には、土師器杯、陶器椀、瀬戸・美濃産すり鉢片のほか、緑釉陶器片も出土している。

S D 606 j 1 · k 1 グリッドで検出したプロック状の擾乱土を埋土にする東西溝で、幅約0.6~0.9mで、検出面からの深さ12~19cmである。出土遺物には土師器高杯、陶器丸碗(51)のほか、ロクロ土師器、陶器椀、近世陶器片などがある。

S D 607 k 1 から l 2 グリッドで検出した東西溝で、S D 605 · 606に同様にプロック状の擾乱土を埋土にする東西溝である。落ち込みとも考えられる。南側に約5mほど張り出している。長さ約2.5m、幅約4.6mで、検出面からの深さ20~34cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

S D 614 k 3 から l 2 グリッドで検出した北東壁際から南にまがる東西溝である。幅約0.5mで、検出面からの深さ4~7cmである。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物はなく時期は不明である。

S D 623 h 7 · i 7 グリッドで検出した東西溝である。幅約0.5mで、検出面からの深さ5~7cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

重 構 番 号	規 模	方 向	柱 間 (m)				柱 幅 形	柱 筋 跡	時 代	備 考
			桁 間		梁 間					
S B 610	4間×3間 側柱建物 N39° E	南北棟	8.85	北から 1.95+2.7 + (西) 3.45+1.65+2.1 + 1.65 (東)	4.5	1.5 等間	円形、楕円形 径 30cm~50cm 深 12cm~27cm	—	時差不明	
S B 612	5間×3間 側柱建物 N23° E	南北棟	10.65	北から 2.4 + 2.1 + 2.4 + 2.1 + 1.65	7.35	2.4 + 2.55+2.4	円形、方形 径 20cm~50cm 深 7cm~26cm	16cm~ 20cm	平安後期	南面 柱根 (163)
S B 613	3間×1間 側柱建物 N23° E	南北棟	6.6	北から 2.1 + 2.25+2.25	2.4	2.4	円形、方形 径 25cm~45cm 深 11cm~32cm	—	平安後期	
S B 621	3間×3間 側柱建物 E 28.5~ 33° S	東西棟	4.05 4.20	西から 1.35+1.2 + 1.5 (北) 1.35+1.2 + 1.65 (南)	3.15	北から 1.05+1.05+0.9	楕円形、 内円形 径 20cm~70cm 深 7cm~20cm	16cm~ 20cm	飛鳥	軒行と梁行 は直交しない。
S B 622	3間×2間 側柱建物 E 28.5° S	東西棟	3.6 3.9	西から 1.2 等間 1.05+1.65+1.2 (北) (南)	3.3 3.4	北から 1.65 等間 (東) 1.7 等間 (西)	楕丸形、 椭円形？ 径 30cm~75cm 深 10cm~32cm	16cm~ 30cm	飛鳥	軒行と梁行 とも不規則。
S B 624	3間×1間 側柱建物 E 22° S	東西棟	6.6	西から 2.7 + 1.95+1.95 (北) 2.4 + 2.25+1.95 (南)	2.25	2.25	円形 16cm~30cm 深 9cm~29cm	—	時差不明	

第2表 堀立柱建物一覧表

重 構 番 号	規 模	方 向	柱 間 (m)				柱 幅 形	柱 筋 跡	時 代	備 考
			柱 間		梁 間					
S A 631	東西南北 3間×3間	N25° E	南北 6.6	北から (南北) 2.1 + 2.1 + 2.4	東西 6.6	西から (東西) 2.1 + 2.1 + 2.4	円形 径 20cm~30cm 深 10cm~28cm	—	平安後期	居住場を区 割する柱列 だ。
S A 633	3間以上	東西 E 30° S	(6.45)	西から 1.95+2.4 + 2.1 +			円形 径 20cm~26cm 深 7cm~11cm	—	飛鳥前半	S A 633 と S A 634とは平 行する。
S A 634	2間以上	東西 E 30° S	(2.7)	西から 1.35+1.35+			円形 径 12cm~24cm 深 10cm~30cm	—	飛鳥前半	

第3表 柱列一覧表

S R 630 k 7からo 6 グリッドで検出した東西溝である。幅約0.3mで、検出面からの深さ3～28cmである。出土遺物は土器器細片のみである。

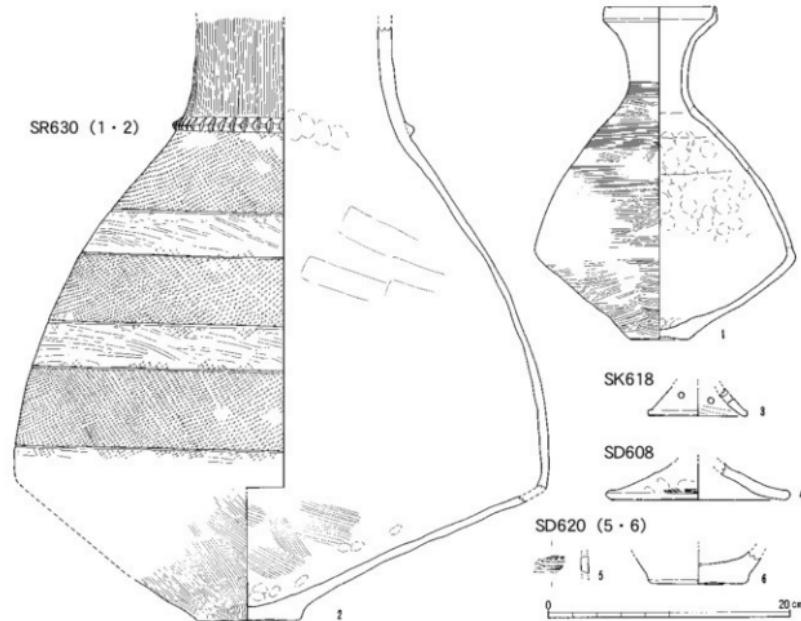
### 3 遺物

今回の調査で遺跡から出土した遺物は、コンテナバットで約40箱になる。掲載した遺物の時代は、縄文時代から明治時代まであるが、その中でも量的に多くを占めるのは弥生時代中期と平安時代中期および後期の遺物である。量的には少ないが古墳時代や飛鳥・奈良時代もある。以下、各個の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

#### (1) 縄文時代の遺物（第20図）

##### 包含層・その他出土の土器（59・60）

深鉢(59)は、晩期の五貫森式の体部である。沈線から上部はナデを行い、下部は横位にケズリで調整する。内面は二枚貝の条痕が見られる。S D 603出土で混入である。深鉢(60)は、晩期の馬見塚式の口縁部である。口縁部が外反して開き端部が肥厚する。



第17図 出出土器実測図(1) (1:4) [S R 630, S K 618, S D 608・620]

外面には素文の突帯がめぐる。S D 615出土で混入である。

#### (2) 弥生時代の遺物（第17・20・19図）

##### a S R 630出土の土器（1・2）

受口状細頭壺(1)は、体部最大径が中央より下にあり、外面は磨滅が著しいものの頸部から体部下半にかけてヘラミガキの後に複帯構成の横描直線文を施している。また内面には成形時の粘土紐のつなぎ目痕や指頭圧痕が見られる。壺(2)は、口縁部を欠くが残存器高が50cmほどの大型壺である。体部最大径が中央より下にあり、頸部外面に粘土紐を貼り付けた後に、ヘラ状具で刻み目をいれる。体部外面には擬似縄文を施した後に沈線で区画する文様帶を施している。

##### b S K 618出土の土器（3）

後期の高杯脚部である。脚部端部を外にまげて丸くする。脚部には透孔が2孔見られる。また内面には粗いハケメを施している。

c SD608出土の土器(4)

壺の蓋である。体部は厚く、外面は指頭によるオサエの後にナデ、その後細かいハケで調整されている。内面には黒斑が見られる。

d SD620出土の土器(5・6)

壺(5)は、細片であるが、外面にヘラ描き沈線が2条見られる。内面はナデ調整である。(6)は甕底部で、内外面ともナデで調整する。底径は7cm前後である。

e 小穴出土の土器(52~54)

壺(52)は、外面は磨滅が著しいが、内外面に斜位にハケメが残っている。また外面に黒斑が認められ、胎土に最大4cmほどの粗い砂粒を多く含んでいる。Pit4出土である。甕(53)は、緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部に櫛状具による刻み目を施している。外面は口縁端部は横位にハケメを施し、頭部は縦位にハケ調整した後に櫛描直線文をめぐらしている。Pit5出土である。(54)は器壁が薄い小型甕の底部である。外面に縦位にハケ調整が見られる。底部は完存している。Pit6出土である。

f 包含層・その他出土の遺物(61~70)

壺(61~65)には、外面を板状具による押圧によって段をつくる(61)がある。前期中段階であろう。(62~65)は壺の体部である。(62)は削り出し突帯を施している。(63)は2条のヘラ描き沈線を施している。(62・63)は前期新段階のものである。(64)は櫛描直線文を沈線で区画するもの。(65)は縄文を密に施している。中期前葉である。

甕(66~70)には、口縁部をゆるく外反させる甕(66)がある。口縁部には焼成前の孔が2孔一対見られる。(67)は口縁部をく字形に屈折させる甕で、口縁端部に櫛状具による刻み目を施し、内面は横位に、外面は縦位にハケ調整する。(68)は口縁部を短く外反させる甕で、口縁端部に刻み目を施している。(69)は受口状口縁の甕で、口縁端部と口縁部下端に刻み目を施している。調整は、外面は口縁端部は横位に、頭部は縦位のハケ調整の後に櫛描直線文を施文している。(70)は甕底部で、外面を縦位にハケ調整する。

(3) 古墳時代の遺物(第19~20図)

a 小穴出土の土器(55・56)

土師器(55・56)は、高杯である。(55)は丸い椀状の杯部がつき、脚端部は短く水平気味に開くものと考えられる。古墳時代中期の6世紀代の所産である。Pit7出土である。(56)は柱状の脚部で、外面は板ナデ、内面にはシボリメが見られる。Pit8出土である。

b 包含層・その他出土の遺物(71~75)

土師器(71~73)には、高杯の脚部(71・72)がある。(71)は脚部を外下方に開き、外面をヘラミガキする。透孔は3方向にある。元屋敷期のものである。(72)は、磨滅が著しく調整は不明である。透孔は3方向にある。台付甕(73)は、口縁部片で、弥生時代末から古墳時代に見られる「S字状口縁台付甕」の系譜上にあるもので、「字田型甕」と呼ばれる。山城編年でF2類に相当し、台付甕の終末段階のもので、6世紀中頃のものである。

須恵器(74・75)には、口径14cm前後の杯蓋(74)がある。天井部をロクロケズリで調整する。(75)は杯身で、口径13cm前後、底部はロクロケズリで調整する。ともに陶邑編年のTK43型式期に相当しよう。6世紀後半の所産である。

(4) 飛鳥から平安時代の遺物(第18~20図)

a SA634・Pit1出土の土器(7)

推定口径9.8cmの須恵器の杯身である。立ち上がりは短く内傾する。底部はヘラ切り未調整で、扁平である。陶邑編年のTK217型式期に相当する。7世紀前半の所産である。

b SD615出土の土器(8・9)

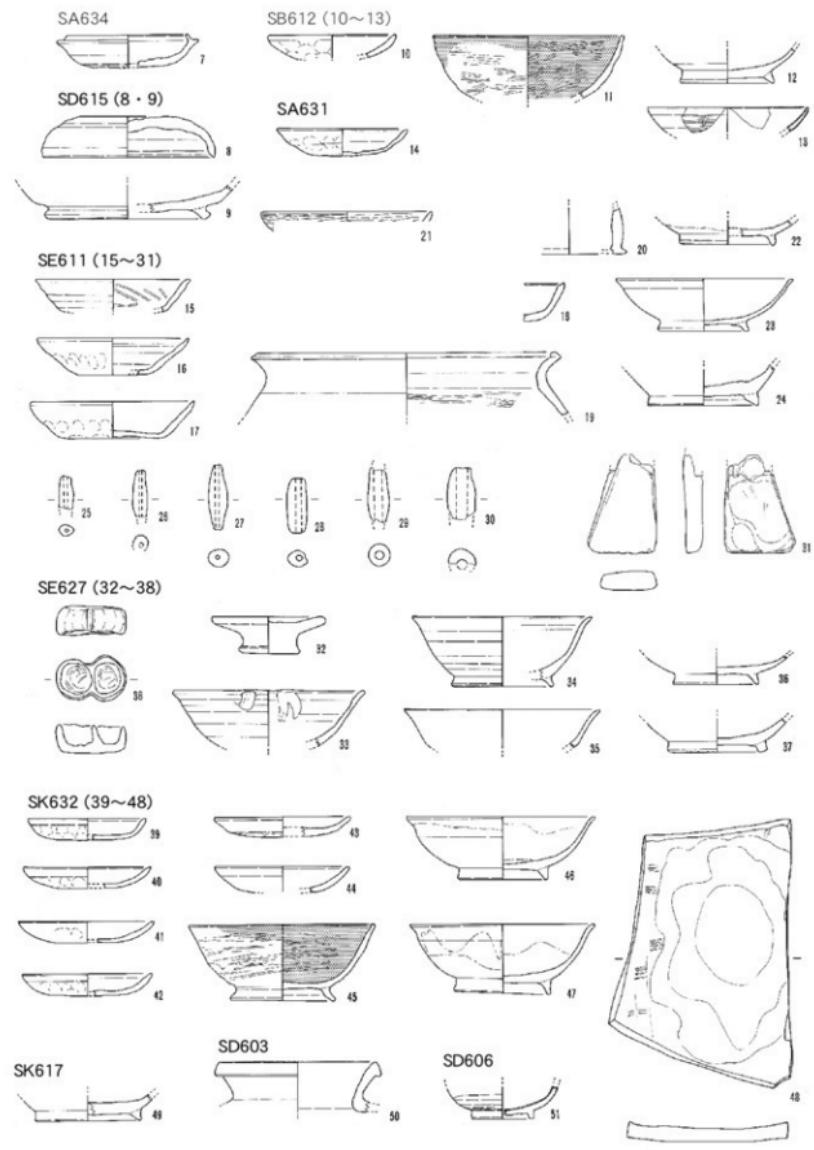
須恵器(8・9)には、口径14cm前後、天井部がヘラ切りのままの杯蓋(8)がある。陶邑編年のTK209型式期に相当する。6世紀末から7世紀初め頃のものである。混入遺物であろう。台付杯(9)は、高台が杯底部外面のやや内側につき、ハの字形に外下方にのびて、端部を外上方に上げ気味におわる。7世紀後半である。

c SB612・Pit2出土の土器(10~13)

(10~13)の土師器、黒色土器、灰釉陶器、白磁は、Pit2から出土した土器である。

土師器(10)は、口径10cm前後の小皿で、口縁部ヨコナデ、体部外面には指頭圧痕がのこる。

黒色土器(11)は、口縁部が残存しているもので、



第18図 出土土器実測図(2) (1 : 4) [S B612, S A631-634, S E611-627, S K617-632, S D603-606-615]

体部から高台付き椀と思われる。体部の器壁が厚く、緩やかに立ち上がる体部から口縁部を丸くおさめる。内外面は横位に幅が広いヘラミガキで調整する。内面のみを黒化するA類の椀である。11世紀後半頃に相当し平安時代後期にある。

灰釉陶器(12)は、底部に断面三角形状の高台がつく椀である。百代寺式窯併行期のものである。

白磁(13)は、小片であるが、器壁が薄く堅敏な小皿である。外面に輪花が見られる。

d S A631・Pit 3出土の土器(14)

土師器(14)は、口径10cm前後の小皿で、口縁部の歪みは大きい。体部外面に指頭圧痕が明瞭に残り、底部はいびつである。

e S E611出土の遺物(15~31)

土師器(15~19)には、杯(15~18)がある。口縁端部が短く外反する(15)である。(16・17)は平坦な底部から真っ直ぐのびる口縁部をもち、体部外面に明瞭に指頭圧痕が見られる。(18)はやや厚い器壁をもち口縁端部内面に沈線がめぐる。内面には螺旋状暗文がのこる。体部外面には「井」の墨書が見られる。甕(19)は、口縁端部を内側に折り返して端部外面に面をもつもので、体部内面に横位にハケメが見られる。

製塩土器(20)は細片であるが、志摩式の鉢の体部片である。

黒色土器(21)は、丸みをおびた底部から口縁部が内湾気味にのびる杯である。口縁部はヨコナデ、外面にミガキが見られる。在地産の土師器杯を黒色化したもので、非常に地域色が強い土器である。大川氏の分類の杯C類にあたる。底部外面には墨書きが見られる。「瓣」の異体字ではないかと言ふことである。また外面に脂肪分が付着している。時期は9

世紀後半頃のものである。

灰釉陶器(22~24)には、椀(22・23)がある。(22)は断面三角形状の高台をもち、体部内外面に灰釉を漬け掛けする。(23)は薄手の体部から口縁部を外反させる。灰釉の範囲は剥離が著しいため不明である。長頸瓶(24)は、底部に外端部で立つ高台がつく。体部外面に透明な灰釉が見られる。

土製品(25~30)は、すべて土師質の土鍤である。(25・26)は直径1.2cmのやや小振りの土鍤で、(27)は最大径1.6cm、中央部が膨らみ端部がすぼまるものである。(28・29)は最大径1.6cmほど、断面が方形に近い土鍤である。(30)は最大径2.3cm、断面は方形に近いが中央が膨らむものである。

石製品(31)は、粘板岩製の砥石である。擦り面はよく使用され凹面状になっている。

f S E627出土の遺物(32~38)

土師器(32)は、ロクロ成形による台付小皿で、口径9cm前後、底径4cm前後のほぼ完形品である。底部には回転糸切り痕が見られる。

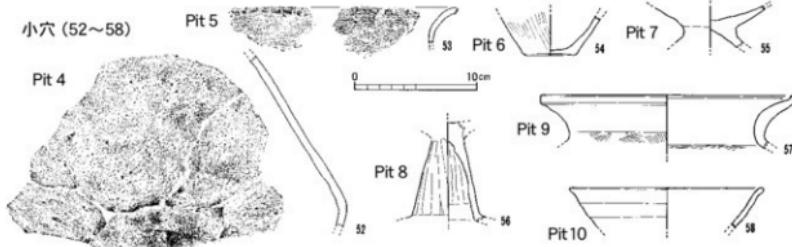
陶器(33~37)は、すべて椀である。口縁部には指頭による輪花を施す(33)をはじめ、口径に対して器高が高い深椀の形態を示す(34)などがある。これらは、藤澤編年の3型式から4型式のもので、11世紀後半から12世紀初頭頃のものである。

土製品(38)は、2つの壺部をもつミニチュア土器で、外面を丁寧にナデて仕上げる。墨壺と思われる。

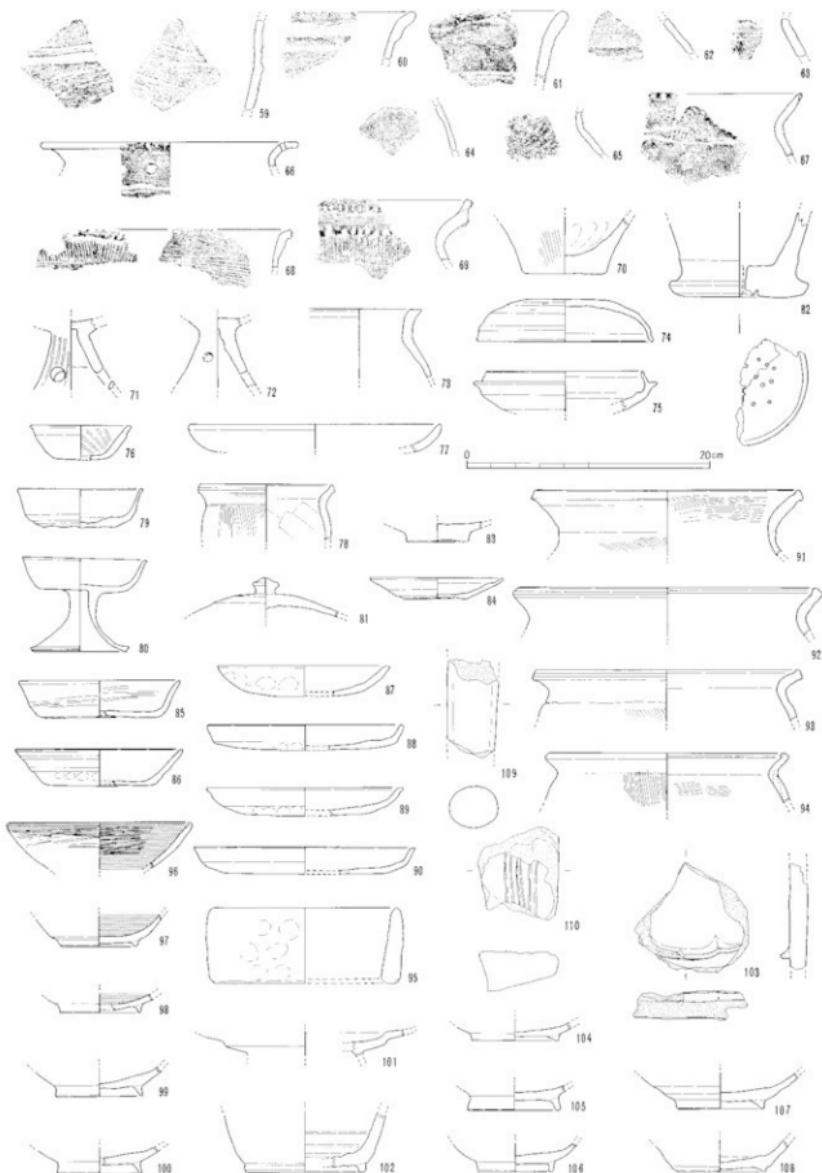
g S K632出土の遺物(39~48)

土師器(39~44)は、口径11cm前後、器高1.7cm前後の法量の似かよった小皿である。口縁部ヨコナデで、底部外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

黒色土器(45)は、口縁部の内面に沈線をもち、内



第19図 出土土器実測図(3) (1:4) [小穴]



第20図 出土土器実測図(4) (1 : 4) [包含層・その他] ①

外面を細かなミガキで調整する椀で、丸みをもった深い体部に、外方に開く腰高の高台を貼り付ける。内面のみを黒化するA類の椀である。11世紀後半頃に比定されよう。

灰釉陶器(46・47)には、口縁部を一部欠くがほぼ完形の椀(46)がある。胎土は陶器椀に似ている。口縁部に灰釉を漬け掛けする。百代寺窯式期のもので、11世紀後半頃である。(47)は深い体部をもつ椀で、体部内外面には漬け掛けられた灰釉が見られる。胎土が灰黄色で、東濃系の椀である。包含層出土の小片と接合した。

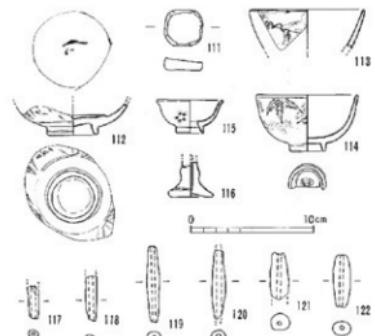
転用硯(48)は、須恵器甕の体部内面を観面として利用したもので、硯面全体に墨痕が見られる。中央部のやや右上を中心にして横円形状の使用痕が認められる。

#### h 小穴出土の土器(57)

土師器(57)は、口縁端部を上方につまみ上げて口縁部外面に面をもつ甕である。体部外面は斜位に、内面は横位にハケメを施す。Pt9出土である。

#### i 包含層・その他出土の土器(76~104)

飛鳥から奈良時代の土師器(76~78)には、口径8cm前後、色調はぶい黄橙色ないし橙色を呈する飛鳥時代の杯(76)がある。内面にヘラミガキを施す。皿(77)は、器壁が厚く内溝して立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。甕(78)は、口径11cm前後の小型甕で、口縁端部を外方につまみ上げる。体部外面は縦位にハケ調整し、内面は斜位に板状具で削



第21図 出土器実測図(5) (1 : 4)  
[包含層・その他] ②

る。また、飛鳥から奈良時代の須恵器(79~82)には、口径10cm前後で、底部はハラ切りのままの杯(79)がある。口縁部に歪みがある。高杯(80)は、口径10cm前後、脚部は緩やかに外下方にのび、脚部の裾端部外面がヨコナデにより凹状になっている。蓋(81)は、天井部をロクロケズリした後に宝珠つまみをナデで貼り付ける。鉢(82)は、いわゆるすり鉢型土器と呼ばれるもので、やや丸みおびた逆台形状の台部から、体部が外上方にのびる。底部外面には多くの小孔が見られる。

平安時代の土師器(83~96)には、ロクロ成形による小皿(83・84)がある。(83)は底部が柱状の台部をもつ台付小皿である。底部径5cm前後である。(84)は口径11cm前後で、体部が外上方にのびて、ヨコナデにより口縁部内面が窪む。ともに底部外面に回転糸切り痕をのこす。

杯(85~87)には、平らな底部から外上方に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する(85)、平らな底部から外上方に直線的に立ち上がる(86)、丸い底部から緩やかに外上方に立ち上がり、口縁端部が外に向く(87)がある。皿(88~90)には、平らな底部から稜をもって立ち上がり口縁端部を丸くおさめる(88)がある。(89)は平らな底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部が外方にとがり気味におわらせる。(90)は平らな底部から稜をもって立ち上がり、口縁端部上面に面をもつ。甕(91~94)は、口縁部の強いヨコナデにより端部の内外面が窪むもの(91)、口縁部を内上方に肥厚させて端部を丸くおさめ、端部外面が窪むもの(92・93)、内側に折り返して肥厚させるもの(94)がある。

製塙土器(95)は、志摩式の鉢である。口径15cm前後、体部外面に指頭圧痕をとどめる。

黒色土器(96~98)には、口縁部内面に沈線もち、体部内外面をヘラミガキする杯(96)がある。内面のみを黒化する黒色土器A類である。大川氏の分類の杯Aである。椀(97・98)は、底部のみである。(97)は断面三角形の低い高台を、(98)は腰高の高台を、貼り付ける。

灰釉陶器(99~103)には、椀(99・100)がある。(99・100)の高台は外下方にのび、(101)は断面の体部細片である。長瓶(102)は断面方形の高台をもつ。

硯(103)は、八花硯の硯面部片である。陶硯の分類によると形象硯に属する。外縁に花弁状の割りこみがあり、形が花弁状を呈していることから八花硯と呼ばれる。時期は9世紀頃であろう。

縁釉陶器(104)は、椀の底部片で、胎土は土師質である。濃い縁釉が内外面に掛かる。近江産で10世紀代である。

(5) 鎌倉時代以降の遺物（第18・20・21図）

a S K 617出土の土器(49)

陶器椀の底部である。底部糸切りの後に逆台形状の高台を貼り付ける。藤澤編年の5型式で12世紀後葉から13世紀初頭頃であろう。

b S D 603出土の土器(50)

口縁部を折り返す常滑産の陶器壺である。口縁部から体部外面にかけて自然釉が見られる。

c S D 606出土の土器(51)

施釉陶器の丸椀で、体部内外面に鉛釉が見られる。高台は削り出しだけである。時期は大窯期である。

d 小穴出土の土器(58)

陶器椀の口縁部片である。体部が直線的にのび口縁端部が外反する。藤澤編年の5型式に相当する。12世紀後葉から13世紀初頭に比定されよう。Pit10出土である。

e 包含層出土の遺物(105～145)

陶器(105～108)は、すべて椀である。体部が丸みをおびて断面三角形の高い高台がつく(105・106)、体部が丸みをおびて断面三角形であるが低い高台をもつ(107)や体部が直線的で断面が逆台形状を呈する低い高台をもつ(108)がある。前者は藤澤編年の3型式から4型式に、後者は藤澤編年の5型式から6型式に相当しよう。

施釉陶器(111)は、内面に鉄釉が見られる。天目茶碗の体部を加工した円形加工陶磁製品である。

磁器(112～116)は、(112)は焼成が不良のため染付の発色が良くない。瀬戸産であろうか。(113)は、肥前の波佐見焼の染付碗である。いわゆる「くらわんか手」の碗で、外面は須彌で描かれている。(114)は型紙刷りの碗である。(115)は端反碗で、コバルト釉によって染め付ける。(116)は仏飯具で、外面に鉛釉が見られる。

(112・113)は18世紀末から19世紀にかけての江

戸時代後期頃、(114～116)は19世紀後半から20世紀初頭の明治時代である。

土製品(109、117～122)には、土製支脚の脚部と思われる断面径約4cmの棒状の(109)がある。また(117～122)は、すべて土師質の土錐である。(117・118)は直径0.9cmのもの、(119・120)は最大径1.1cmの細長い形のもの、(121・122)は最大径1.5cm前後で中央がやや膨れるものがある。

砥石(110)は、表面に3条の使用痕跡がある。古墳時代の菅玉を研磨したものとも考えられる。

(6) 木製品（第25～33図）

木製品の大半は、S E 611から出土した井戸部材である。井戸部材の中には転用材も使用されている。またS E 627やS K 632などからも曲物が出土している。この他に小穴から出土した柱根がある。

a S E 611出土の木製品(123・~154)

井戸枠の部材と掘形から出土した曲物がある。

〔1〕井戸枠

井戸枠の部材は、四辺に打ち込まれた縦板、二段の横板、四隅の隅板からなる。

縦板(123～142)は、横板の周囲に一部二重に打ち込まれた。枚数としては西側に4枚、南側に4枚、東側に6枚、北側に6枚である。幅は不揃いで、縦板の上部は全て腐食している。木取りは板目または追柾目である。縦板の大半は、下端部の両面または片面を手斧により斜めに尖らせる。横板に沿わせて縦板を打ち込むためと考えられる。また一部であるが、(126)のように切断したままのもの、(141)のように杭状に尖らせたものもある。また両面の調整は基本的に手斧によるハツリである。また(134・140)には、切り込みが見られ転用材と考えられる。現存長は、西側で50～75cm前後、南側で60～80cm前後、東側で45～80cm前後、北側で43～120cm前後である。

隅板(143～146)は、井戸枠の四隅に据えられ砂の流れ込みを押えていたと考えられる。縦板と同様に隅板の上部も腐食している。隅板には、下端部を切断したままのもの(146)、下端部の両面を斜めに削り端部を尖らせる(143)、片面のみを削る(144)などがある。(143・144)には手斧によるハツリ痕が見られる。木取りは板目または追柾目である。現存長は43

～51cm前後、幅24～38cm前後、厚さ4.2～4.5cmである。

横板(147～154)は、上段に組まれていた横板(147～150)と下段の横板(151～154)がある。上段の横板は、西側の横板(147)の両木口に出柄を、南側と北側の(148・150)には西木口に柄と東木口の上下の側面に、それぞれ切り込みを入れている。ただし下側面に入れた切り込みは、ともに浅い。また東側の横板(149)には両木口の下側面に切り込みを入れている。木取りは板目または追柾目である。

また下段の横板(151～154)は、木口に柄や切り込みは見られない。おそらく刀子のようなもので切り、その後折ったものと思われる。長さには112cm前後と115cm前後のものがある。幅15～18cm前後、厚さ1.6～2.2cmである。(153)は井戸底から、(154)は西側と南側の横板の下から出土した板材である。(154)の端部に約1.5cmの方形の孔がある。この4枚の横板は、同じ材を使用している。木取りは板目または追柾目である。

## 〔2〕曲物

曲物(155～157)には、井戸の掘形から出土した曲物の底板(155)がある。(156)は北側の掘形でうつ伏せの状態で出土したものである。径16cm前後、ほぼ完形である。(157)は、井戸枠内で出土したもので、径20cm前後、表面には黒漆が塗られている。残存は2／3ほどである。

### b S E 627出土の木製品(158～161)

出土木製品には、井筒として使用されていた曲物をはじめ、掘形や井筒内から出土した曲物の底板がある。

曲物(158～161)には、2段に組まれていた曲物の側板(158・159)がある。上段の(158)は、本体は径53～55cm前後、高さ44cmで、本体の周囲には箇が4帯めぐり、本体と箇の間には、ほぼ本体を四分した均等方向にヘギ板4枚が挟まっていた。下段の(159)は、径41～53cmほどで上段より一回り小さい。本体には2帯の箇がめぐる。下部には22か所に径0.9～1.2cmの小孔が穿たれている。この小孔は湧水を曲物内に引き入れ、曲物内部の砂礫により水をろ過するためと考える。(160・161)は曲物の底板である。(160)は径約14cm。木釘の痕跡が3か所に認め

られ、うち1か所に木釘が残る。木取りは柾目である。(161)は径12～13cm前後。木釘の痕跡が5か所に認められ、木取りは追柾目である。

### c S K 632出土の木製品(162)

曲物(162)は、径約15cmほどの底板で、3か所に木釘の痕跡が認められる。木取りは柾目である。

### d 小穴出土の木製品(163・164)

柱根(163・164)は、ともに腐食が著しい。(163)はS B 11の柱根。木取りは柾目、材質はサワラである。Pit11出土である。(164)は木取りは芯材、材質はカヤである。Pit12出土である。

## 4 小結

今回の調査で、飛鳥時代から平安時代の集落が存在したことが確認された。以下に若干の考察をしてまとめとする。

### 遺構について

建物は、掘立柱建物6棟を検出した。S B 621・622の2棟は、柱穴からの出土遺物は細片しかないが、本文でも記したように建物の柱穴と北を流れるS D 615・616の切り合い関係から、2棟の建物の方が先行すると考えられ、飛鳥時代と想定される。またS A 633・634は柱間が不揃いで柱穴が小さい。その間は幅3mで平行しており、通路の可能性がある。

平安時代のS B 612・613の2棟は、S B 612の出土遺物から後期の建物である。ともに棟方向はN 23°Eである。S B 612は4間×3間に南庇をもつ建物で、その南西隅で重複して位置する3間×1間のS B 613は、①S B 612と桁行の柱筋を揃えること、②柱穴の大きさや形態がS B 612と同じこと、からあまり隔たりをもたない時期に建て替えたものと思われる。また、これらの建物に伴う遺構は、調査区東の柱列S A 631と土坑S K 632がある。S A 631の方位はN 25°Eで、S B 612・613と2°ほど方位が振れるが、出土遺物から同時期であり、S B 612・613を含めた屋敷地の南東を区画したものと考えられる。

条里との関係では、安濃川南岸に広がる沖積地一帯には、条里の名残りとされる畦畔が見られた。検出した平安時代後期の建物2棟と柱列は、安濃川流域の条里方向であるN-約30°-Eとは、少し西に

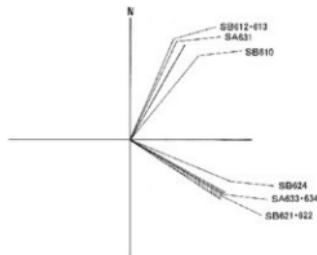
振れている。また飛鳥時代と考えるSB621・622はE28.5°～33°S、SA633・634がともにE30°S、時期不明のSB610はN39°E、SB624はE22°Sである（第22図）。調査区南の飛鳥時代のSB621・622およびSA633・634を除き平安時代の建物等は、条里に関連づけるのは難しいと考えられる。また飛鳥時代の建物等の方向に見出せるとすると、この時代まで遡る可能性があることを示している。地形的には調査区が安濃川の自然堤防上に立地しており、河川から離れた冲積地やその微高地に立地する条里に関係する遺構が見つかった神戸遺跡やエノ坪遺跡と異にするのであろう。

#### 墨書き土器について

SE611から出土した墨書き土器(21)は、在地で生産された土器師杯を黒色処理した土器と考えられ、畿内を中心に出土する都城的な黒色土器ではなく、地域的な色彩が濃い土器である。

#### 【註】

- ① 山田猛「4結語」「山城道路・北瀬古遺跡」三重県埋蔵文化財センター1994　また宇田聖実については「鍋と甕ーそのデザイン」 第4回東海考古学フォーラム1996による。
- ② 田辺昭三「須恵器大成」角川書店1981
- ③ 大川勝宏「洛宮の黒色土器」「洛宮歴史博物館研究 紀要二」洛宮歴史博物館1993
- ④ 洛宮歴史博物館の桜村寛之氏の御教示による。また平安時代の黒色土器に墨書きされた土器は珍しいと言うことである。
- ⑤ 陶器焼についての、以下の文献による。
  - ・藤澤良輔「山戸古窯址群1」「山戸市歴史民俗資料館研究紀要1」山戸市歴史民俗資料館 1982
  - ・藤澤良輔「山茶碗の現状と課題」「研究紀要3」1994
- ⑥ 註⑤同じ。
- ⑦ 「陶器開発文献」目録『埋蔵文化財ニュース41』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 1983



第22図 掘立柱建物・柱列等方位図

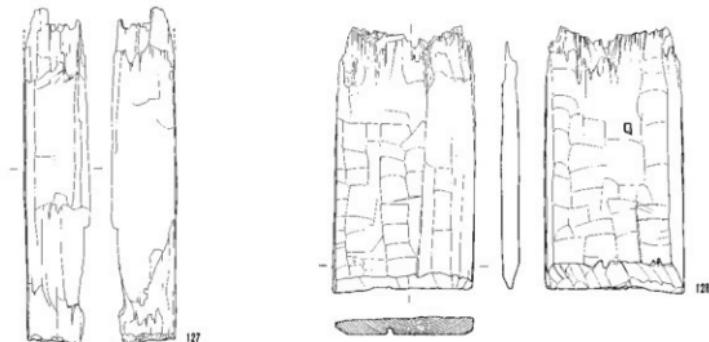
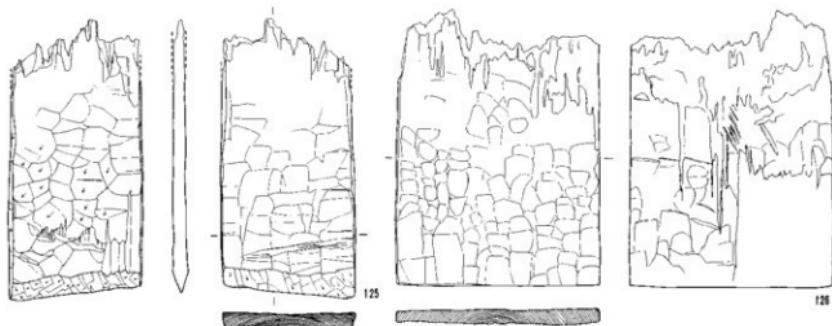
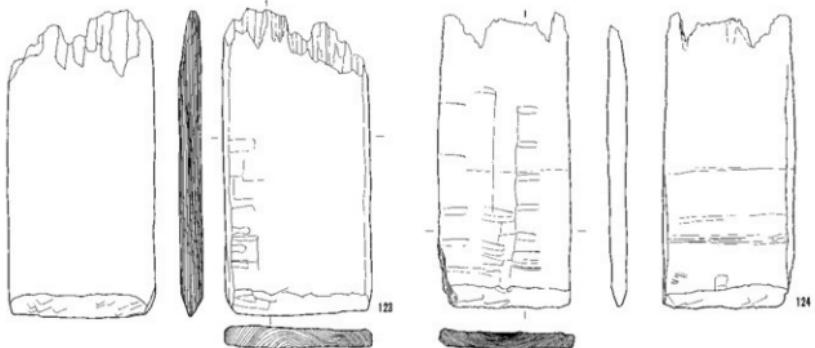
また底部に書かれた墨書きは、欠損する部分があるが「饗」ということである。この文字には来客者(客人)に酒宴を設けて持て成しをする意味がある。この文字は、津市大里庄田町の大垣内遺跡から出土している。大垣内遺跡の土器は、墨書きされた文字ではなく、土器師杯の内面にヘラで線刻されたものである(写真、下)。また内面には意図的にか穿孔がみられる。土器の年代は当遺跡出土の土器と同じと考えられる。底部に墨書きされた土器は、刻書きされた土器よりも消費地で使用された意味合いが強いと考えられ、このことから当地で持て成しを行い、饗宴を行った際に祭祀的行為、または儀礼的行為に使われたことが窺われる。

遺跡からは、須恵器を転用した硯や八花瓶をはじめ、灰釉陶器や僅かではあるが綠釉陶器も出土しており、平安時代に有識者が居たと考えられる。今後、更なる発掘調査の成果が期待される。(宮田勝功)

- ⑧ 磁器については本堂弘之氏の御教示による。
- ⑨ 中川明「神戸遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター1999
- ⑩ 池端清行ほか「式ノ坪遺跡」「一般国道23号中勢道　調査概要X」三重県埋蔵文化財センター1998
- ⑪ 洛宮歴史博物館の桜村寛之氏の御教示による。
- ⑫ 刻書き土器については、服部芳人氏の御教示並びに御協力を得た。また、以下の文献を参考にした。
  - ・「大垣内遺跡」「三重県埋蔵文化財センター年報5」1994
  - ・「第3回三重県埋蔵文化財発掘調査発表会'93発掘三重」三重県埋蔵文化財センター1994
  - ・「企画展　眠りから目覚めた文字たち－洛宮跡の墨書き土器－」洛宮歴史博物館 1997

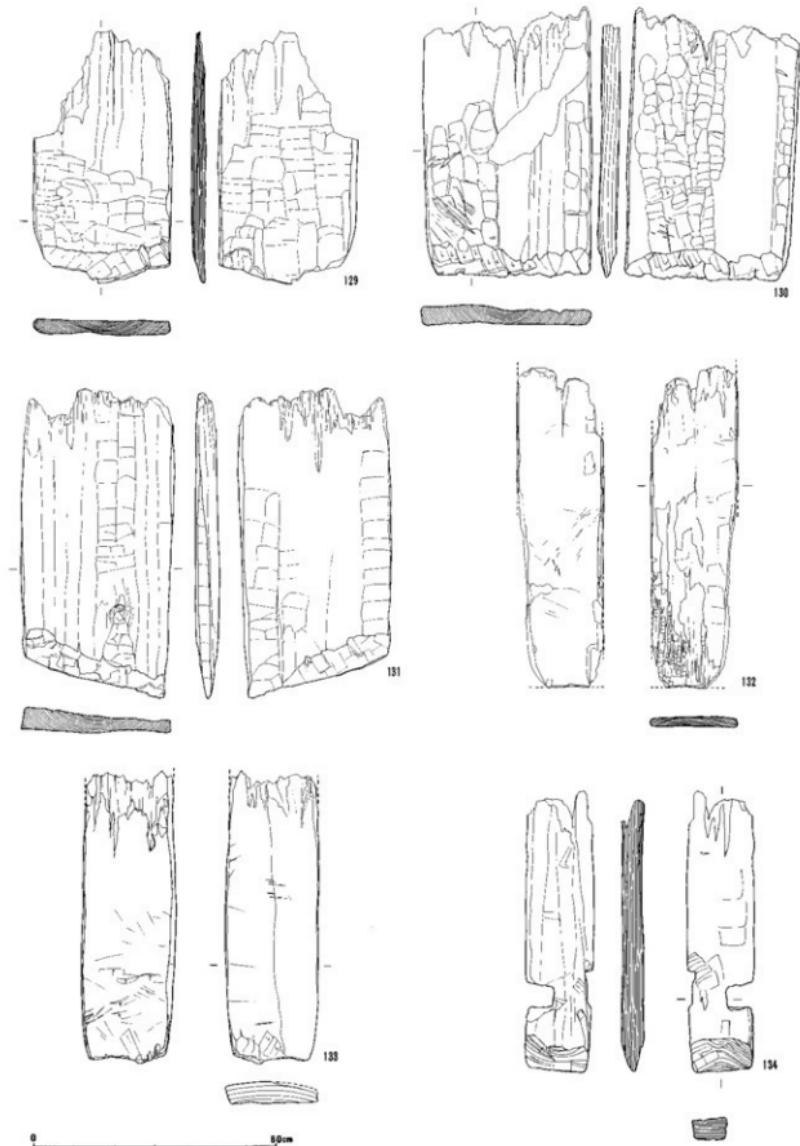


大垣内遺跡出土の刻書き土器「饗」

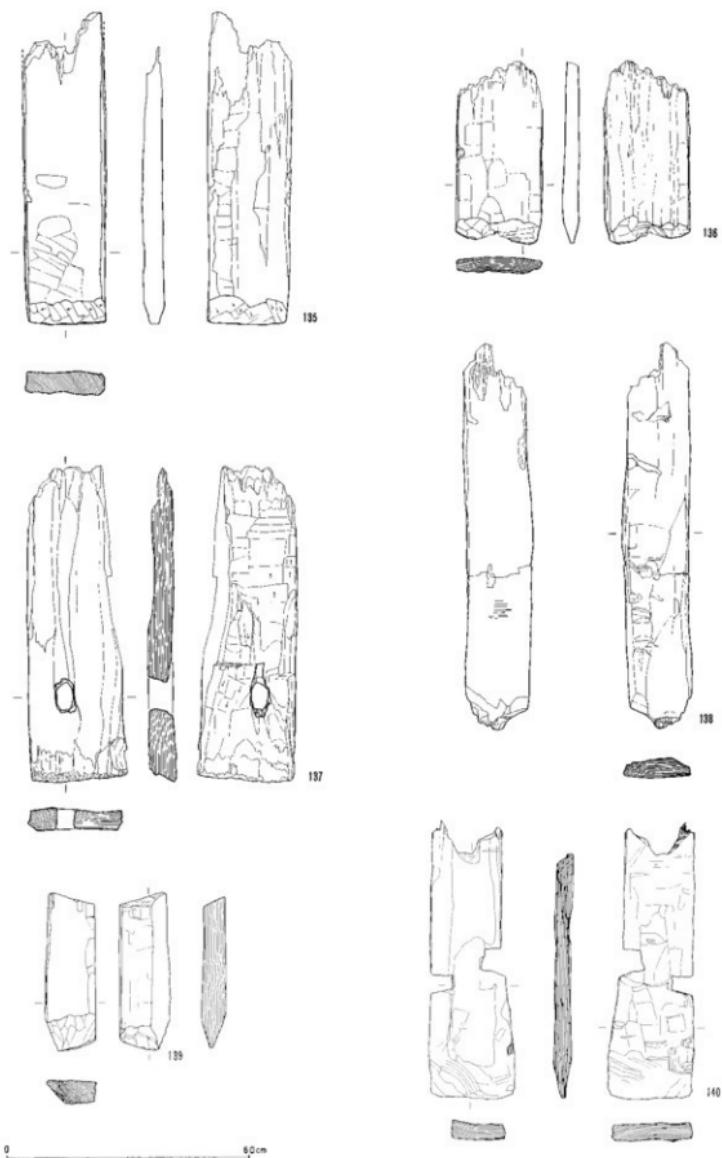


0 50cm

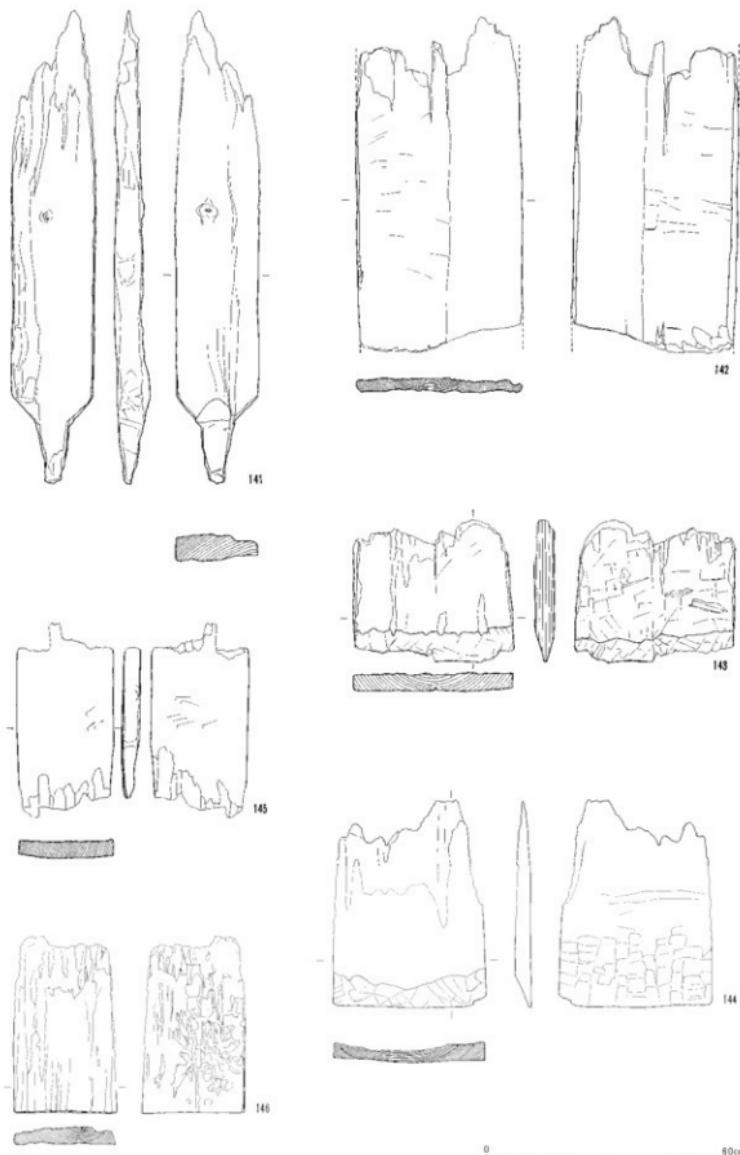
第23図 出土木製品実測図(1) (1:12) [SE611井戸枠材西侧縦板・南側縦板]



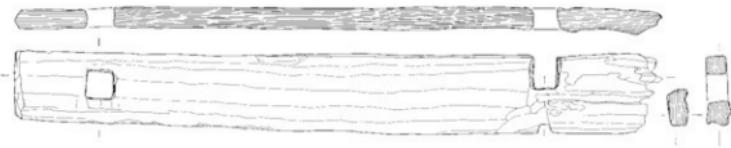
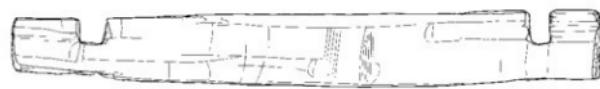
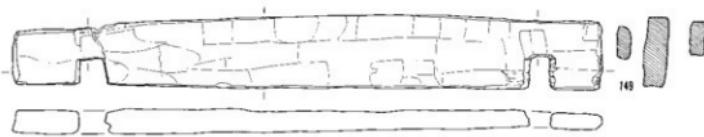
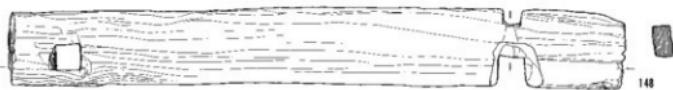
第24図 出土木製品実測図(2) (1:12) [SE 611井戸枠材南側縦板・東側縦板]



第25図 出土木製品実測図(3) (1:12) [SE 611井戸枠材東側縦板・北側縦板]

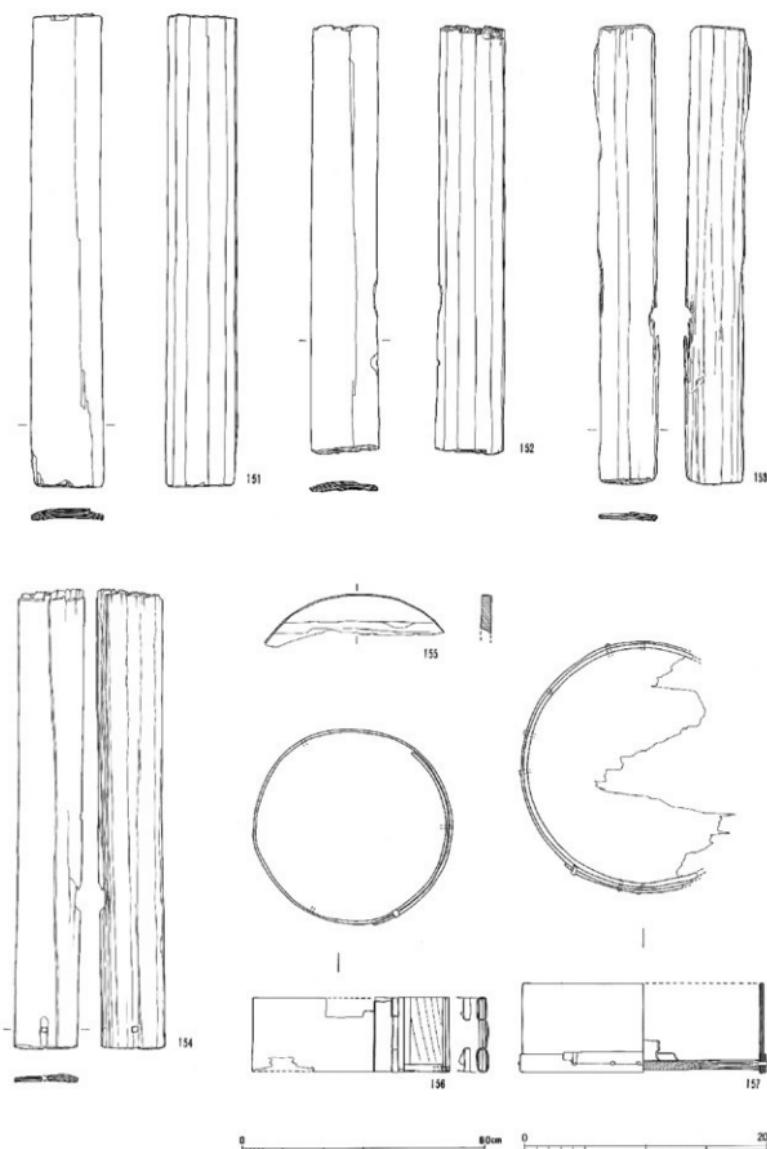


第26図 出土木製品実測図(4) (1:12) [S E611井戸枠材北側横板・隅板]

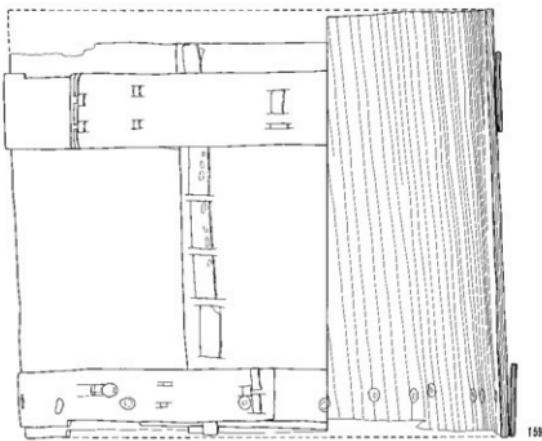
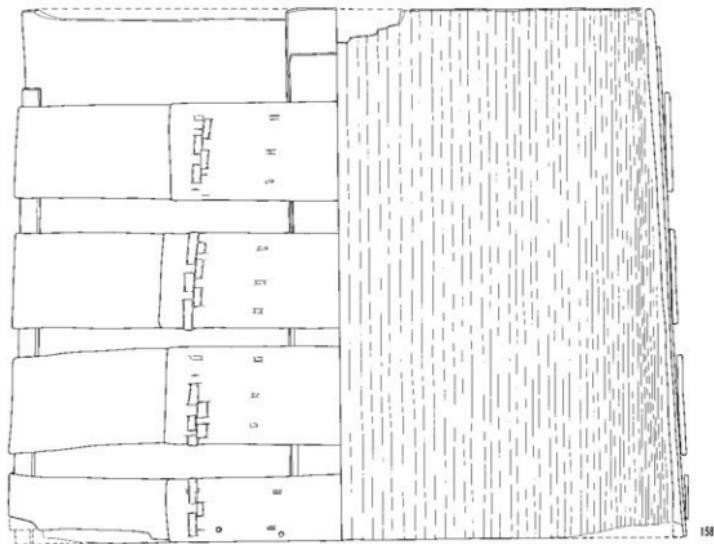


0 60cm

第27図 出土木製品実測図(5) (1:12) [SE611井戸枠材横板]

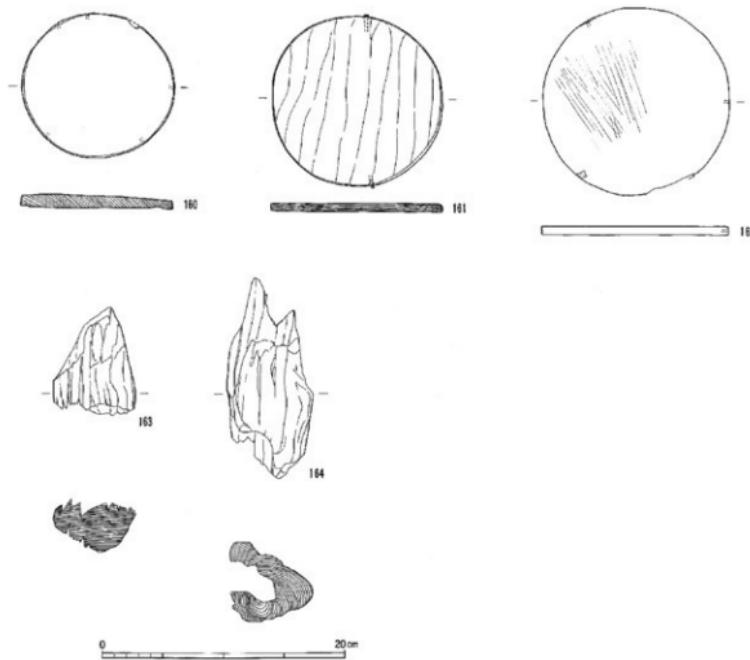


第28図 出土木製品実測図(6) (1:12、155~157は1:4) [S E 611井戸枠材横板・曲物]

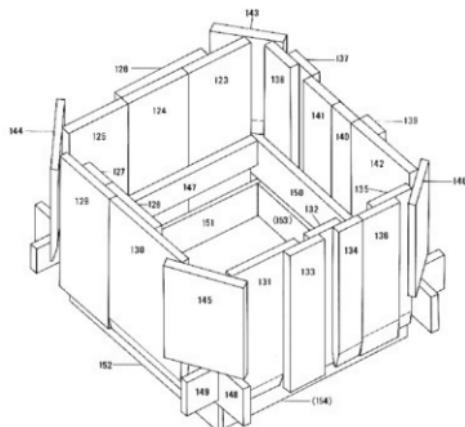


0 20cm

第29図 出土木製品実測図(7) (1 : 4) [S E 627曲物 158は上段、159は下段]



第30図 出土木製品実測図(8) (1 : 4) [S E 627, S K 632, 小穴]



第31図 S E 611井戸枠模式図

報告番号	登録番号	出土位置	置置構	器種	計測値 (cm)			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考		
					口径	器高	底径								
1	029 -01	o 7 SR632	弥生土器 蓋	8.9	27.3	4.6		外面ミガキ 麺脂直線文5帯 内面粘土紐張 オサエ	粗 ~6 mm	並	にぶい黄橙 灰白 4/0	10YR 7/4	ほぼ 完存	磨滅	
2	032 -01	o 7 SR632	弥生土器 蓋	最大径 43.6	7.3		(7.9)	外面ハケメ 繩文施文のち沈継 で区画3帯 実縁に削目	やや密 ~2 mm	並	にぶい黄褐 にぶい褐色 2.5 YR 5/4	10YR 5/3	体部～ 底部		
3	011 -04	h 5 SK618	弥生土器 高杯					外面部ナデ、透孔 内面ナデ、ハケメ	やや密 1 ~2 mm	並	にぶい黄褐 灰白 2.5 Y 8/2	10YR 7/2	脚部片 1/8 残		
4	011 -03	g 3 SD608	弥生土器 蓋	(14.0)				口縁部ヨコナデ 外面オサエ、 ナデ、ハケメ 内面ハケメ	やや粗 1 ~2 mm	並	にぶい黄褐 灰白 10YR 8/2	10YR 7/2	口縁部 1/8 残	内面に黒斑	
5	013 -03	h 7 SD620	弥生土器 蓋					外面部ナラ状工具による沈継 内面ナデ	粗 1 ~2 mm	並	灰白 10YR 8/2 灰白 2.5 Y 8/2	10YR 8/2			
6	011 -05	k 6 SD620	弥生土器 甕			(7.4)		内外面ナデ	粗 2 ~3 mm	並	にぶい褐 明歩褐 2.5 YR 5/6	7/3	底部片 1/3 残		
7	015 -03	q 8 SA634 Pit 1	須恵器 杯身	(9.8)	(2.7)			ロクロナデ 底部木調整	やや密 ~1 mm	良	灰白 N 7/0			1/9 残	
8	012 -04	o 8 SD615	須恵器 杯蓋	(13.9)	(3.3)			ロクロナデ 天井部外面へク切 り未調整	やや粗 1 ~2 mm	並	灰白 N 7/0			1/6 残	
9	012 -01	d 5 SD615	須恵器 台付杯					高台様 (12.6)	ロクロナデ 底部糸切り 高台 貼り付け後ナデ	やや密	並	灰白 N 8/0 灰白 2.5 Y 7/1	8/0	底部 3/8 残	
10	014 -04	k 2 SB612 Pit 2	土師器 小皿	(10.3)				口縁部ヨコナデ 外面オサエ、 内面ナデ	やや密 ~1.5 mm	並	灰白 10YR 8/2			1/6 残	
11	014 -05	k 2 SB612 Pit 2	黒色土器 鉢	(15.4)				口縁部ヨコナデ 外面ミガキ 内面ミガキ	やや密 ~2 mm	並	にぶい褐 5 YR 7/4 浅黄褐 7.5 YR 8/3	口縁部 1/4 残			
12	014 -06	k 2 SB612 Pit 2	灰釉陶器 鉢			7.6		ロクロナデ 底部糸切り 高台 貼り付けの後ナデ	密	並	灰白 2.5 Y 7/1		底部 完存		
13	014 -03	k 2 SB612 Pit 2	磁器 白磁小皿	(13.1)				ロクロナデ 外面に輪花 内外面に釉薬	密	良	灰白 5 Y 8/2			1/12 残	
14	015 -04	o 7 SA631 Pit 3	土師器 小皿	10.4	2.7			口縁部ヨコナデ 外面オサエ、 ナデ 内面ナデ	やや密 ~1 mm	並	灰白 10YR 8/2			ほぼ 完形	
15	004 -07	j 3 SE611	土師器 杯	(12.4)				口縁部ヨコナデ 外面ナデ 内面ナデ 増文	やや粗 1 ~2 mm	並	浅黄褐 7.5 YR 8/6			1/7 残	
16	004 -06	j 3 SE611	土師器 杯	(12.2)	3.0			口縁部ヨコナデ 外面オサエ、 ナデ 内面ナデ	やや密	並	灰白 10YR 8/2			1/4 残	
17	004 -05	埋土 SE611	土師器 杯	13.4	3.0			口縁部ヨコナデ 外面オサエ ナデ 内面ナデ	やや粗 1 ~2 mm	並	褐色 10YR 5/1 浅黄褐 7.5 YR 8/3			ほぼ 完形	
18	004 -02	j 3 SE611	土師器 杯	(13.0)	3.2			口縁部ヨコナデ 外面オサエ、 ナデ 内面ナデ 增文	やや密	並	褐 2.5 YR 6/6 褐 2.5 YR 7/8			口縁部片 「井」墨書き	
19	004 -04	第2層 SE611	土師器 甕	(24.0)				口縁部ヨコナデ 外面ナデ 内 面ハケメ	やや密	並	灰白 7.5 YR 8/2			口縁部片 外面に煤付着	
20	004 -03	第2層 SE611	製塙土器 鉢					体部オサエ・ナデ	やや粗 1 ~2 mm	並	浅赤褐 2.5 YR 7/4 にぶい褐 5 YR 7/4	10YR 7/2	体部片	志摩式	
21	004 -01	埋土 SE611	黒色土器 杯	(13.8)	3.6			口縁部ヨコナデ 外面オサエ、 ミガキ 内面ミガキ	やや密	並	灰白 10YR 8/2 培灰 N 3/0	10YR 7/2		「匂」墨書き	
22	005 -02	j 3 SE611	灰釉陶器 鉢					ロクロナデ 底部糸切り 高台 貼り付け 内外面に灰釉	やや粗	並	にぶい黄褐 10YR 7/2			口縁部 1/5 残	
23	003	堆土直 S E611	灰釉陶器 鉢	(14.5)	4.3	7.0		ロクロナデ 底部糸切り 高台 貼り付け	やや密 ~1.5 mm	並	にぶい黄褐 10YR 7/2 灰白 10YR 8/1	10YR 7/2	1/3 残		
24	005 -08	j 3 SE611	土製品 土錘	残存長 (2.7)	種類 1.2			ナデ 六穴 0.3 cm	やや密 1 mm	並	褐 5 YR 6/6			底部 完存	
25	005 -08	j 3 SE611	土製品 土錘									1/2 残	残重量 2.9 g		

第4表 出土土器観察表(1)

報告番号	登録番号	出土位置	土質構造	計測値 (cm)			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
26	005 -07	j 3 S E611	土製品 土鍾	残存長 (3.8)	径 1.2		ナガ穴径 0.25cm	やや密	並	灰 5 YR 6/6	2/3 残	黒斑 残重量 4.0g
27	005 -05	第2層 S E611	土製品 土鍾	長さ 5.3	径 1.6		ナガ穴径 0.3 cm	やや密	並	灰 5 YR 6/6	完形	重量 10.8g
28	005 -06	j 3 S E611	土製品 土鍾	長さ 4.4	径 1.6		ナガ穴径 0.5 cm	やや密	並	灰白 2.5 YR 7/1	ほぼ 完形	残重量 9.5g
29	005 -04	埋土 S E611	土製品 土鍾	残存長 (4.5)	径 1.7		ナガ穴径 0.7 cm	やや密	並	灰 N 6/0	ほぼ 完形	残重量 12.5g
30	005 -03	j 3 S E611	土製品 土鍾	残存長 (4.2)	径 2.3		ナガ穴径 0.8 cm	やや密	並	暗灰 N 3/0	1/2 残	残重量 10.5g
31	006 -03	埋土 S E611	石製品 砾石	残存長 (8.0)	幅 5.6	厚さ 1.6	擦り面が明面に瘤む					粘板切削 残重量 106g
32	001 -05	m 8 S E627	手鉢 台付皿	9.3	3.1	4.3	ロクロナガ 底部赤切り	やや密 ~1.5 mm	並	にぶい橙 7.5 YR 7/3 灰白 2.5 Y 7/1	ほぼ 完形	外側に黒斑
33	015 -05	m 8 S E627	陶器 碗	(15.4)			ロクロナガ 外側にヒビによる輪花	密	良	灰白 N 7/0		口縁部 1/8 残
34	015 -06	m 8 S E627	陶器 碗	(14.6)	5.7	(8.2)	ロクロナガ 底部赤切り 高台貼り付け	やや密 ~2 mm	良	灰白 5 Y 8/1	1/4 残	
35	001 -03	m 8 S E627	陶器 碗	(15.9)			ロクロナガ	やや密	並	灰白 5 Y 7/1	口縁部 1/5 残	
36	001 -01	m 9 S E627	陶器 碗				ロクロナガ 底部赤切り 高台貼り付け	密	良	灰白 5 Y 7/1 灰白 N 8/	4/5 残	
37	001 -02	m 8 S E627	陶器 碗				ロクロナガ 底部赤切り 高台貼り付け 利脚圧痕	やや密	並	灰白 N 8/	1/3 残	
38	001 -04	m 8 S E627	土器類 手捏ね土器	長さ 5.8	高さ 2.4	最大幅 3.7	左内径 2.3 cm 深さ 1.8 cm 右内径 2.6 cm 深さ 1.5 cm	やや密	並	灰白 5 Y 7/1 灰 5 Y 5/1	完形	
39	008 -04	p 5 S K632	土器類 小皿	(9.5)	1.8		口縁部ロコナガ 外側オサエ 内面ナガ	やや密	並	浅黄橙 10 YR 8/3 灰白 10 YR 8/2	1/4 残	外側に黒斑
40	008 -01	q 5 S K632	土器類 小皿	(10.3)	1.7		口縁部ロコナガ 外側オサエ 内面ナガ	やや密	並	浅黄橙 10 YR 8/3	1/3 残	
41	008 -05	q 5 S K632	土器類 小皿	(11.0)	1.7		口縁部ロコナガ 外側オサエ 内面ナガ	やや密	並	灰白 10 YR 8/2 浅黄橙 10 YR 8/3	1/8 残	
42	008 -03	q 5 S K632	土器類 小皿	(10.4)	1.8		口縁部ロコナガ 外側オサエ・ ナガ 内面ナガ	やや粗	並	にぶい黄橙 10 YR 7/2 灰白 10 YR 8/2	1/5 残	
43	010 -02	q 5 S K632	土器類 小皿	(10.8)	1.6		口縁部ロコナガ 外側オサエ・ ナガ 内面ナガ	やや密	並	灰 N 5/0 灰白 10 YR 8/2	1/12 残	外側に黒斑
44	008 -02	q 5 S K632	土器類 小皿	(10.9)			口縁部ロコナガ 外側オサエ・ ナガ 内面ナガ	やや密	並	浅黄橙 7.5 YR 8/3	1/4 残	
45	007 -04	q 5 S K632	黒色土器 小皿	14.9	6.3	8.5	口縁部ロコナガ 内外面ミガキ 高台貼り付け 底部赤切り	やや密	並	にぶい黄橙 10 YR 7/3 暗灰 N 3/	ほぼ 完形	
46	007 -02	q 5 S K632	灰釉陶器 碗	(14.9)	5.7	7.9	ロクロナガ 高台貼り付け 底部赤切り 滲け推け	やや密	並	灰白 5 Y 7/1	3/4 残	019-01と接合
47	007 -02	q 5 S K632	灰釉陶器 碗	15.3	5.1	7.3	ロクロナガ 高台貼り付け 底部赤切り 滲け推け	やや密 ~1 mm	並	黄灰 2.5 Y 6/1 黄灰 2.5 Y 6/2	7/8 残	
48	002 -01	q 5 S K632	須恵器 軽用鏡	長さ 22.0	幅 15.0	厚1.1 ~1.3	裏体部内面を鏡に使用	やや密	並	灰 N 4/ 暗灰 N 3/	22×15cm	内面全体に墨 痕
49	007 -03	h 5 S K617	陶器 壺				ロクロナガ 底部赤切り 高台貼り付け	やや密	並	灰白 5 Y 7/1	底部 1/3 残	
50	012 -05	e 2 SD603	陶器 壺	(12.7)			ロクロナガ 外側に自然釉	密	並	灰白 2.5 Y 8/1	口縁部 1/6 残	
51	012 -07	j 1 SD606	施釉陶器 瓦罐				ロクロナガ 高台貼り出し 外側面に結晶釉	やや密	並	灰白 5 Y 8/1	底部 1/4 残	
52	029 -02	p 7 Pit 4	微生物土器 壺			9	内外面ハケメ	粗 ~4 mm	並	根 5 YR 6/6 にぶい根 5 YR 6/4	体部片	外側に黒斑 発達が顕著

第5表 出土土器観察表(2)

報告番号	登録番号	出土位置	土質構造	器種	計測値 (cm)			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
					口径	器高	底径						
53	028 -04	p 6 Pit5	弥生土器 甕					口縁部に刻目 口縁部内外面にハケメ 外面に櫻描直線文	やや粗 ~3 mm	並	灰褐色 7.5 YR 4/2 灰白 10YR 8/1	口縁部片	
54	014 -02	h 6 Pit6	弥生土器 甕		(3.9)			外面ハケメ 内面ナデ	粗 ~2.5 mm	並	褐色 5 YR 4/1 灰白 10YR 8/1	底部 完存	
55	014 -01	e 2 Pit7	土師器 高杯					外面オサエ・ナデ 内面ナデ	やや密 ~1 mm	並	にぶい褐色 7.5 YR 6/3 灰白 10YR 8/2	受部~ 脚部片	
56	015 -01	k 5 Pit8	土師器 高杯					外面板ナデ 内面シボリメ	やや密 ~2 mm	並	にぶい褐色 5 YR 6/4	脚部一部 欠	
57	014 -07	k 2 Pit9	土師器 甕		(20.4)			口縁部ヨコナデ 体部外面ハケメ	やや密 ~2 mm	並	にぶい黄褐色 10YR 7/3	口縁部片 1/10 残	
58	015 -02	q 5 Pit10	陶器 碗		(15.6)			ロクロナデ	やや密 ~1 mm	良	灰白色 N 8/0	底部 1/7 残	
59	013 -01	e 2 SD603	绳文土器 深鉢					外面沈線よりナデ 下ケズリ 内面ナデ 二枚貝による条痕	粗 1~2 mm	並	褐色 10YR 4/1	体部片	
60	013 -02	g 6 SD615	绳文土器 深鉢					外面ナデ 素文突巻 内面ナデ	粗 1~2 mm	並	灰白色 2.5 Y 8/2 灰白色 2.5 Y 7/1	口縁部片	
61	022 -03	j 5 包含層	弥生土器 蓋					外面に板状工具による段 内面ナデ	粗 ~3 mm	並	にぶい黄褐色 10YR 7/3 黄褐色 2.5 Y 5/1	口縁部片	
62	021- 04	i 5 包含層	弥生土器 蓋					外面に削り出し突巻 内面ナデ	やや粗 ~3.5 mm	並	褐色 5 YR 6/6 にぶい黄褐色 10YR 7/2	体部片	
63	016 -03	g 3 包含層	弥生土器 蓋					外面に比線 2 条 内面ナデ	やや粗 ~1.5 mm	並	にぶい黄褐色 10YR 7/3 灰黄色 2.5 YR 7/2	体部片	
64	006 -01	j 3 SE611	弥生土器 蓋					外面櫻描直線文を縦線で区画 内面オサエ・ナデ	やや粗 ~1 mm	並	褐色 7.5 YR 6/1 灰褐色 10 YR 5/1	体部片	
65	006 -02	第2層 SE611	弥生土器 蓋					外面彫状具による刺突文 内面ナデ	粗 ~1.5 mm	並	灰白色 2.5 Y 8/1	体部片	
66	001 -06	m 8 SE629	弥生土器 甕		(20.8)			外面ナデ 櫻描直線文 内面ナデ ハケメ 織成前の円孔 2 個	やや粗 ~2 mm	並	灰黄色 2.5 Y 6/2 1/10 残	口縁部片	
67	025 -03	o 7 包含層	弥生土器 甕					口縁部間に刻目 外面にハケメ 口縁部内面にナデ ハケメ	粗 ~4 mm	並	灰褐色 7.5 YR 5/2 にぶい褐色 5 YR 6/4	口縁部片	
68	024 -06	m 6 包含層	弥生土器 甕					口縁部間に刻目 口縁部外面 にハケメ 外面に櫻描直線文	粗 ~1.2 mm	並	褐色 7.5 YR 4/3 にぶい褐色 7.5 YR 6/4	口縁部片	
69	025 -05	o 7 包含層	弥生土器 甕					口縁部及び下部間に刻目 外 面に櫻描直線文	粗 ~2 mm	並	灰褐色 7.5 YR 6/2 浅黄褐色 7.5 YR 6/3	口縁部片	外面上黒斑
70	024 -03	l 2 包含層	弥生土器 甕		(6.4)			底部外面ハケメ 内面オサエ・ ナデ	粗 ~1.5 mm	並	褐色 5 YR 6/6 にぶい褐色 7.5 YR 6/4	底部 2/3 残	
71	011 -06	g 6 SD615	土師器 高杯					外面ミガキ 内面ナデ 透孔は3方	やや密 ~2 mm	並	褐色 5 YR 7/6 にぶい褐色 5 YR 7/4	脚部片	
72	023 -04	k 6 包含層	土師器 高杯					透孔は3方	やや粗 ~1.5 mm	並	褐色 7.5 YR 7/6	脚部片	磨滅が著しい
73	018 -06	h 7 包含層	土師器 台付甕					口縁部ヨコナデ 内面ナデ	やや粗 ~2.5 mm	並	浅黄褐色 7.5 YR 8/3	口縁部片	黒斑 磨滅が著しい
74	025 -01	n 7 SK634	須恵器 杯蓋		(14.2)	3.4		ロクロナデ 天井部ロクロケズ リ	やや密 ~3 mm	良	灰白色 N 6/0		1/7 残
75	020 -02	i 7 包含層	須恵器 杯身		(12.7)			ロクロナデ 底部ロクロケズリ	やや粗 ~3 mm	並	灰白色 7.5 YR 5/1	口縁部~ 体部片	
76	018 -05	h 6 包含層	土師器 杯		(8.0)	2.8		口縁部ヨコナデ 外面ナデ 内 面ミガキ	やや粗 ~3 mm	並	にぶい黄褐色 10YR 7/4 褐色 5 YR 7/6	1/3 残	
77	011 -01	e 2 SD603	土師器 皿		(20.2)			口縁部ヨコナデ	やや密	並	浅黄褐色 10YR 8/3	口縁部 1/6 残	磨滅が著しい
78	022 -01	j 7 包含層	土師器 甕		(10.8)			口縁部ヨコナデ 体部外面ハケ メ 内面ケズリ	やや粗 ~2 mm	並	にぶい褐色 7.5 YR 5/3 灰褐色 7.5 YR 4/2	1/4 残	
79	020 -03	i 6 包含層	須恵器 杯		10.0	3.2		ロクロナデ 底部ヘラ切り未調 整	やや粗 ~3 mm	並	灰白色 10YR 6/1		2/3 残

第6表 出土土器観察表(3)

報告 番号	登録 番号	出 土 位 置 遺 構	器 種	計測値 (cm)			成形・技法の特徴	胎 士	焼 成	色 調	残存度	備 考
				口径	器高	底径						
80	009	f 4 -03 (SK7)	須恵器 高杯	10.0	7.7	7.7	ロクロナデ 脚端部外面に沈継 脚部足り付け	やや密	良	灰 N 6/ 灰 N 4/	杯部 1/2 欠	取り上げ時 SK7
81	018	h 6 -04 包含層	須恵器 杯蓋				天井部ロクロケズリ 宝珠つま み貼り付け後ナデ	やや密 ~1 mm	並	灰白 5 Y 7/1 黄白 2.5 Y 6/1	天井部 完存	
82	020	i 6 -01 包含層	土師器 鉢	残存長 7.0		7.5	ロクロナデ 底部外面工具に上 るナデ 棒状工具による刺突	やや密	並	灰白 5 Y 7/1 浅黄橙 10 YR 8/3	底部 1/3 残	
83	020	i 8 -05 包含層	?? 土師器 台付小皿			(4.9)	ロクロナデ 底部糸切り	やや密 ~1 mm	並	浅黄橙 7.5 YR 8/4	底部 1/2 残	
84	025	o 6 -02 包含層	土師器 小皿	(10.8)			ロクロナデ 底部糸切り	やや密 ~1 mm	並	橙 5 YR 6/6 にぶい橙 5 YR 7/4	1/2 残	黒斑
85	017	g 6 -01 包含層	土師器 杯	(12.8)	3.0		口縁部ヨコナデ 内外面ミガキ	やや密	並	橙 5 Y 6/6 橙 5 Y 7/6	1/3 残	
86	022	j 7 -05 包含層	土師器 皿	(13.5)	3.0		口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	粗 ~2.2 mm	並	淡黄橙 7.5 YR 8/4	3/4 残	022-4・022-6 と接合
87	016	g 6 -06 包含層	土師器 杯	(13.9)			口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙 10 YR 7/3	1/5 残	
88	018	h 6 -02 包含層	土師器 皿	(15.8)			口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	やや密	並	橙 5 YR 6/6 にぶい褐 7.5 YR 5/3	1/6 残	
89	018	h 6 -01 包含層	土師器 皿	(15.8)			口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	やや密	並	灰 5 Y 5/1 橙 5 YR 6/6	1/5 残	
90	018	h 6 -03 包含層	土師器 皿	(17.9)	(2.2)		口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	やや密	並	橙 5 YR 6/6 橙 5 YR 7/6	1/4 残	
91	028	h 7 -01 包含層	土師器 甕	(21.6)			口縁部ヨコナデ 口縁部内外面ハ ケメ 体部外面ハケメ	やや粗 ~2 mm	並	にぶい橙 7.5 YR 7/4	口縁部 1/3 残	
92	017	g 6 -02 包含層	土師器 甕	(21.6)			口縁部ヨコナデ 体部外面ハケ メ 内面ナデ	やや密 ~1.5 mm	並	橙 5 YR 7/6 浅黄橙 10 YR 8/3	口縁部 1/6 残	
93	022	j 7 -02 包含層	土師器 甕	(24.2)			口縁部ヨコナデ 内外面ナデ	やや粗 ~3 mm	並	浅黄橙 7.5 YR 8/3 橙 5 YR 6/6	口縁部 1/10 残	
94	017	h 6 -06 包含層	土師器 甕	(19.2)			口縁部ヨコナデ 体部内外面ハ ケメ	やや粗 ~1.5 mm	並	にぶい橙 7.5 YR 7/4	口縁部 1/8 残	
95	017	g 6 -04 包含層	製塗土器 鉢	(14.8)	6.2	(14.6)	ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外外面オサエ・ナデ	粗 ~5 mm	並	明赤鶏 2.5 YR 5/6 橙 2.5 Y 6/6	1/9 残	志摩式
96	017	g 6 -03 包含層	黒色土器 杯	(14.8)			口縁部ヨコナデ 体部内外面ミ ガキ	やや密	並	褐灰 7.5 YR 4/1 褐灰 10 YR 4/1	口縁部 ~体部	
97	021	i 7 -01 包含層	黒色土器 碗			(5.9)	ロクロナデ 高台貼り付け	やや密	並	浅黄橙 10 YR 8/3 灰 5 Y 4/1	底部 1/3 残	
98	020	i 7 -06 包含層	黒色土器 碗			(6.3)	ロクロナデ 高台貼り付け	やや密 ~1 mm	並	灰白 10 YR 8/2	底部 1/5 残	
99	019	i 8 -02 包含層	灰釉陶器 碗		6.8		ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け	やや密 ~1.5 mm	並	灰白 2.5 Y 7/1	底部 1/3 残	
100	019	i 7 -03 包含層	灰釉陶器 碗		6.6		ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け	やや密 ~3 mm	並	灰白 5 Y 7/1	底部 1/4 残	
101	019	i 8 -07 包含層	灰釉陶器 段皿				ロクロナデ 高台貼り付け	やや密 ~1.5 mm	並	灰白 5 Y 8/1	体部片	
102	022	j 7 -07 包含層	灰釉陶器 長瓶瓶		(9.4)		ロクロナデ 高台貼り付け	密 ~1.2 mm	並	灰白 N 8/ 灰白 N 7/	底部 1/2 残	
103	023	i 7 -02 包含層	灰釉陶器 八花鏡		厚さ 2.4		陣部上部の楕に断面台形状の 内堀	密	並	褐灰 10 YR 5/1 灰白 7.5 YR 8/1	8.9 × 9.4 cm	
104	020	i 7 -04 包含層	綠釉陶器 碗			(6.6)	ロクロナデ 体部外外面削り 底部内面・体部外面に緑釉	やや密 ~1 mm	並	浅黄橙 10 YR 8/3	底部 1/4 残	
105	019	i 8 -04 包含層	陶器 碗		7.0		ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け	やや密 ~1.5 mm	並	灰黄 2.5 Y 7/2	底部 1/3 残	
106	019	i 8 -05 包含層	陶器 碗			(6.1)	ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け	やや粗 ~3 mm	並	灰白 2.5 Y 8/1	底部 1/5 残	

第7表 出土土器観察表(4)

報告番号	登録番号	出位置遺構	器種	計測値 (cm)			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
107	023 -07	k 8 包含層	陶器 碗		7.6		クロナダ 底部糸切り 高台貼り付け	やや粗 ~1 mm	良	灰白 N 8/	底部 1/4 残	024-02と接合
108	024 -04	l 8 包含層	陶器 碗		7.0		クロナダ 底部糸切り 高台貼り付け	やや粗 ~3 mm	並	灰白 N 8/	底部 完存	
109	021 -05	i 8 包含層	土製品 土製支脚?		径3.9 ~4.2		ナダ	やや密 ~8 mm	並	灰黄褐 10YR 5/2		
110	010 -03	q 5 SK632	石製品 砾石		厚さ 3.2		圓状の使用痕				7.6 × 6.6 cm	砂岩質 重量 170 g
111	016 -04	g 5 包含層	陶器 加工円盤		厚さ 0.9		天目系窓在円形加工円盤として 利用	やや密	並	黒 10YR 2/1 灰黄 2.5 Y 7/2	2.9 × 3.0 cm	
112	016 -05	g 5 包含層	磁器 染付碗		3.8		クロナダ 外面にコバルト釉	やや密	不良	灰白 2.5 Y 8/1	高台部 完存	染付の発色不 良 瀬戸産?
113	017 -05	h 5 包含層	磁器 染付碗	(10.2)			クロナダ 外面に兵衛による筆書き	密	良	明緑灰 7.5 GY 8/1 灰白 2.5 GY 8/1	口縁部 1/4 残	被削仕見焼 くらわんか手 窯戸・美濃産
114	024 -05	k 7 包含層	磁器 染付碗	8.3	5.6	2.8	クロナダ 外面にコバルト釉で型紙刷り	密	良	灰白 N 8/		1/2 残
115	023 -05	k 7 包含層	磁器 染付碗	5.2	2.7	2.2	クロナダ 外面にコバルト釉で型紙刷り	密	並	灰白 N 8/		1/4 残
116	023 -06	k 7 包含層	磁器 仏壇具			3.2	クロナダ 外面に輪輪	密	並	灰白 N 8/		脚部 完存
117	016 -02	j 1 包含層	土製品 土鍤	残存長 (2.7)	径 0.8		ナダ 穴径 0.3 cm	やや密	並	にぶい橙 7.5 YR 6/4	1/2 残	複重量 1.4 g
118	016 -01	j 1 包含層	土製品 土鍤	残存長 (3.7)	径 0.9		ナダ 穴径 0.3 cm	やや密	並	浅黄褐 7.5 YR 8/4 にぶい橙 7.5 YR 7/4	1/2 残 完形	複重量 2.2 g
119	017 -07	h 6 包含層	土製品 土鍤	長さ 6.2	径 1.1		ナダ 穴径 0.3 cm	やや密	並	灰黄褐 10YR 4/2	完形	重量 5.5 g
120	012 -06	g 1 SD603	土製品 土鍤	長さ 5.7	径 1.1		ナダ 穴径 0.4 cm	やや密	並	淡黄 2.5 Y 8/3	完形	黒斑 重量 5.0 g
121	021 -06	i 7 包含層	土製品 土鍤	残存長 (3.8)	径 1.5		ナダ 穴径 0.3 cm	やや粗 ~3 mm	並	にぶい橙 7.5 YR 5/4	1/2 残	複重量 8.2 g
122	021 -06	j 7 包含層	土製品 土鍤	長さ 4.3	径 1.4		ナダ 穴径 0.35cm	やや密 ~1 mm	並	にぶい黄褐 10YR 7/2	完形	重量 7.8 g

第8表 出土土器観察表(5)

報告番号	登録番号	出位置遺構	名稱	最大計測値 (cm)			調整技法	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ			
123	047 -01	m 8 SE611	厭板 西1 No. 7	(74.7)	35.7	5.5	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	板目	
124	050 -01	m 8 SE611	厭板 西2 No. 8	(72.0)	32.4	4.3	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 裏面に中央から木口に向かい手斧痕。上部は腐食。	板目	
125	043 -01	m 8 SE611	厭板 西3 No. 9	(66.5)	33.0	4.0	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	板目	
126	048 -01	m 8 SE611	厭板 西4 No. 6	(50.2)	67.4	4.0	表面に中央から木口に向かい手斧痕。 木口を切削。切削の工具は不明。上部は腐食。	板目	
127	067 -01	m 8 SE611	厭板 南1 No. 13	(81.7)	15.9	2.1	木口を切削。切削の工具は不明。上部は腐食。	板目	
128	044 -01	m 8 SE611	厭板 南2 No. 14	(64.5)	34.4	4.4	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	板目	
129	046 -01	m 8 SE611	厭板 南3 No. 11	(61.3)	34.0	3.5	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	板目	
130	069 -01	m 8 SE611	厭板 南4 No. 12	(65.3)	40.9	4.7	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に工具痕か。上部は腐食。	板目	

第9表 出土木製品観察表(1)

報告番号	登録番号	出土位置	名稱	計測値 (cm)			調整技法	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ			
131	049-01	m 8 S E611	縦板 東 1 No. 16	(73.0)	37.2	4.5	木口を斜めに切断の後、両面を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面および側面に手斧のハツリ痕。上部は腐食。	板目	
132	072-01	m 8 S E611	縦板 東 2 No. 18	(77.8)	21.3	2.6	一方の木口を切削。裏に工具痕。上部は腐食。	板目	
133	055-01	m 8 S E611	縦板 東 3 No. 17	(69.9)	22.9	5.3	木口に手斧のハツリ痕。上部は腐食。	板目	
134	071-01	m 8 S E611	縦板 東 4 No. 19	(69.1)	16.6	5.4	中央や木口に切り込み。 表面に手斧痕。上部は腐食。	板目	転用材か。
135	051-01	m 8 S E611	縦板 東 5 No. 21	(76.1)	20.2	5.0	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	追板目	
136	057-01	m 8 S E611	縦板 東 6 No. 20	(44.4)	20.9	3.9	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	板目	
137	066-01	m 8 S E611	縦板 北 2 No. 3	(76.8)	23.3	6.7	片面に中央部から木口にむかい手斧によるハツリ痕。 上部腐食欠損。	板目	約 8 cm × 約 4 cm の孔
138	064-01	m 8 S E611	縦板 北 1 No. 4	(94.0)	16.2	4.5	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 先端部は欠損。上部腐食欠損。	板目	
139	066-01	m 8 S E611	縦板 北 6 No. 33	(38.4)	12.5	5.8	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 上部は腐食。	追板目	
140	056-01	m 8 S E611	縦板 北 4 No. 1	(66.8)	21.1	4.8	表面に手斧によるハツリ痕。両側面中央に切り込み。 上部は腐食。	板目	転用材か。
141	074-01	m 8 S E611	縦板 北 3 No. 2	(115.5)	20.5	8.7	木口に手斧によって尖らせる。片面に手斧によるハツリ痕。 上部は腐食。	板目	
142	062-01	m 8 S E611	縦板 北 5 No. 24	(82.0)	40.5	3.5	上部は腐食。	追板目	
143	058-01	m 8 S E611	縦板 北西 1 No. 5	(34.8)	39.5	4.7	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表面に手斧痕。上部は腐食。	追板目	
144	045-01	m 8 S E611	縦板 南西 4 No. 10	(50.5)	37.6	4.3	木口の手斧により断面斜めにハツリ痕。 片面は手斧による調整痕。上部は腐食。	板目	
145	053-01	m 8 S E611	縦板 南東 3 No. 15	(43.7)	23.7	4.5	両面に手斧痕。上部と下部は腐食。	追板目	
146	054-01	m 8 S E611	縦板 北東 2 No. 23	(43.1)	24.9	4.2	木口を切断。腐食が著しい。	板目	
147	073-01	m 8 S E611	横板 西 2 No. 26	130.0	11.9	5.7	両木口に角鉋。	板目	
148	077-01	m 8 S E611	横板 南 3 No. 28	(151.2)	19.3	5.9	片木口を切断。熱穴と側面上下 2か所に切り込み。	板目	
149	075-01	m 8 S E611	横板 東 4 No. 31	(144.6)	17.7	6.2	木口近くに同じ側面に切り込み。 表面に手斧痕。	追板目	
150	076-01	m 8 S E611	横板 北 1 No. 25	(158.5)	19.2	6.0	下端部の両面を手斧によるハツリにより尖らせる。 熱穴と 2か所に切り込み。	板目	
151	061-01	m 8 S E611	横板 西 6 No. 27	(115.3)	17.5	2.2	片木口はオレ。	板目	
152	068-01	m 8 S E611	横板 南 7 No. 29	(115.1)	16.2	1.9	両木口はオレ。	板目	
153	065-01	m 8 S E611	横板 北 5 No. 32	(112.3)	14.7	1.6	剥離痕をそのまま残すか。？ 片木口はオレ。	板目	
154	070-01	m 8 S E611	横板 南西 8 No. 30	(112.2)	15.8	1.9	片木口はオレ。	板目	木口近くに約 1.5 cm 四方の孔。

第10表 出土木製品観察表(2)

報告番号	登録番号	出土位置	土質構造	名 称	計測値 ( cm )			調整技法	木取り	備 考
					長さ	幅	厚さ			
155	039 -01	j 3 S611	曲物底板			0.8			追査日	
156	040 -01	j 3 S6111	曲物 No. 34	16.1	6.1	側 0.3 底 0.6	側板を檻縫で1か所結合する。 底板を側板に木釘3か所で固定する。			
157	039 -02	j 3 S E611	曲物	20.2	7.2	側 0.3 ~0.4 底 0.7	雁が口設めぐる。 側板に木釘7か所。		底板は板目 ~追査日	完形。 雁縫 1.5 ~1.7 cm, 厚さ 0.2 cm, 1/3 次損
158	033 -01	m 8 S E627	曲物側板	52.5~ 55.0	44.0	0.6 ~ 0.7	本体は檻縫による結合。本体に雁が4設めぐる。 本体と柵との間にヘギ板を四方に4枚挿む。			上段から雁縫 7.5 ~8.0 cm, 厚さ 0.4 cm。 雁縫 7.8 ~8.0 cm, 厚さ 0.4 cm, 雁縫 7.8 ~8.0 cm, 厚さ 0.4 cm, 雁縫 4.9 ~ 5.2 cm, 厚さ 0.3 cm,
159	042 -01	m 8 S E627	曲物側板	41~ 53?	35.3	0.6	上段の柵は本体と4か所で結合する。 下段の柵は本体と1か所および木釘1か所で結合する。			上段の雁縫 5.8 ~6.2 cm, 厚さ 0.4 cm。 下段の雁縫 4.0 ~4.5 cm, 厚さ 0.4 cm, 下段の雁縫には本体と共に径 0.9 ~ 1.2 cm の孔が 22 か所認められる。
160	036 -02	m 8 S E627	曲物底板	11.5~ 12.9		0.65~ 10.1	木釘の痕跡が5か所に見られる。	追査日		
161	036 -01	m 8 S E627	曲物底板	13.9		0.7	木釘が3か所に、痕跡が1か所に見られる。	査日		
162	040 -02	p 5 S K632	曲物底板	15.3		0.6	木釘の痕跡が3か所に見られる。	査日		

第11表 出土木製品観察表(3)

報告番号	登録番号	出土位置	名 称	最大計測値 ( cm )			調整技法	木取り	備 考
				長さ	幅	厚さ			
163	041 -01	j 4 S B612 Pit11	柱根	(9.0)	(6.7)		調整技法は不明。	査日	腐食が著しい。サワラ材 S B12 の柱材
164	041 -02	j 4 Pit12	柱根	(16.5)	(6.8)		調整技法は不明。	芯材	腐食が著しい。カヤ材

第12表 出土木製品観察表(4)

## [遺物観察表および木製品観察表の凡例]

- 報告番号は、遺物番号および回収番号と同一である。
- 登録番号は、遺物実測図番号を示す。
- 出土位置は、上段に出土した調査区、下段に出土した遺構等を表す。
- 遺種の上段は種別、下段は形態である。なお、形態は見た目である。また木製品は、名称に取り上げ時の番号も記した。
- 計測値で、( ) は反転復元による推定値である。欠損部があるものは、現存部の長さを残存長として記した。なお、木製品は最大計測値を記した。
- 調整技法は、主な事柄を記した。
- 脱士は、密、やや密、やや粗、粗の四段階で記した。下段の数値は、砂粒の大きさを表す。
- 佛成は、良、差、不良の三段階で記した。
- 色調は、『新版標準土色粘』に準拠した。上段は外面、下段は内面を表す。
- 残存度は、表せるものは分数で記した。分数で表せないものは言葉で記した。
- 備考は、その他の特徴を記した。柱根の樹種鑑定については(財)元興寺文化財研究所 保存科学センターの分析による。

## IV 替田遺跡（G地区）の成果

### 1 層序

基本的な層序は、第1層：耕作土・盛土、第2層：褐色砂質土、第3層：灰色砂質土および灰白色シルトである。遺構検出は、第3層の灰色及び灰白色土の上面である。遺物包含層は第2層の褐色土層である。以下に主な遺構について述べる。

### 2 遺構

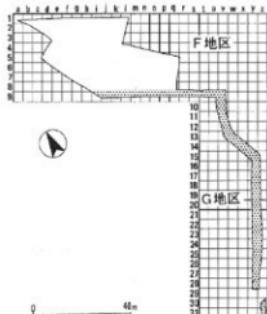
#### (1) 古墳時代の遺構（第33図）

##### 溝

S D 708 u 11からw 13グリッドで検出した東西溝である。幅約6.8~9.0mで、検出面からの深さ4~23cmである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物には土師器高杯、須恵器杯蓋などの細片がある。古墳時代後期である。

S K 709 x 13・x 14グリッドで検出した土坑で、長さ約1.8m、幅約0.7~1.5m、検出面からの深さ22~29cmの土坑である。出土遺物には土師器高杯や赤褐色を帯びた須恵器杯身などの細片がある。時期は古墳時代後期である。

S D 711 y 15からy 18グリッドで検出した南北溝である。残念ながら南半部分のみである。幅約0.2~0.4mで、検出面からの深さ5~9cmである。出



第32図 調査区地区割図（1:2,000）

土遺物は土師器細片のみであるが、層位から古墳時代後期頃である。

S D 713 y 19・z 19グリッドで、古墳時代後期のS D 714の下から検出した東西溝である。幅約2.4~3.6m、検出面からの深さは11~26cmである。埋土は灰白色粗砂で、僅かな自然木を除き出土した遺物はない。層位から古墳時代より古い時代の溝と考えられ、弥生時代の溝の可能性もある。

S D 714 z 17からy 22グリッドで検出した東西溝である。幅約1.5~16mの大きな溝で、検出面からの深さは45~55cmである。溝底は平坦である。埋土は褐色粘土である。出土遺物には、須恵器杯蓋・杯身片などのほか、台付甕片などがある。時期は古墳時代後期である。

S K 715 z 21・z 22グリッドで検出した土坑で、長さ約2.0m、幅約1.2mの不定形な土坑で、検出面からの深さ約8cmである。出土遺物には須恵器杯身片などの細片がある。古墳時代後期であろう。

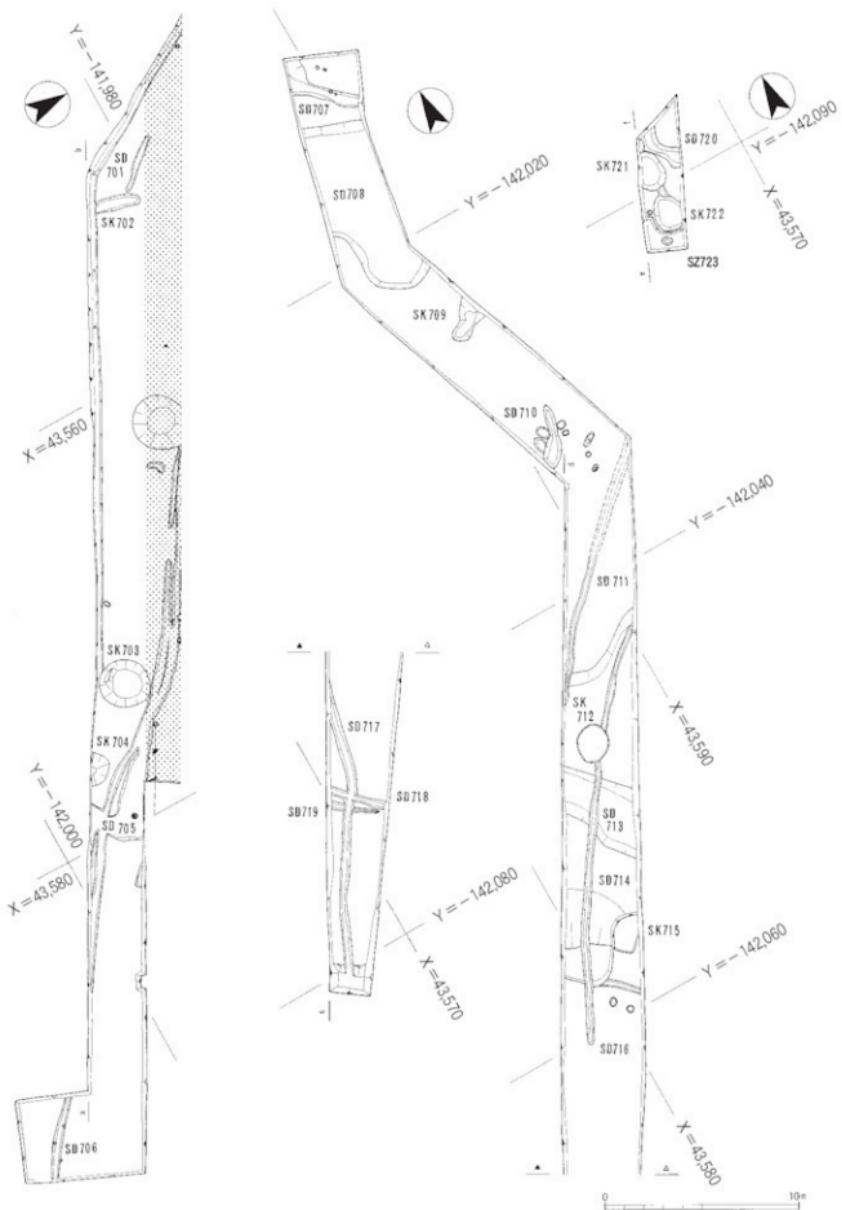
#### (2) 飛鳥から平安時代の遺構（第33・36図）

##### A 土坑

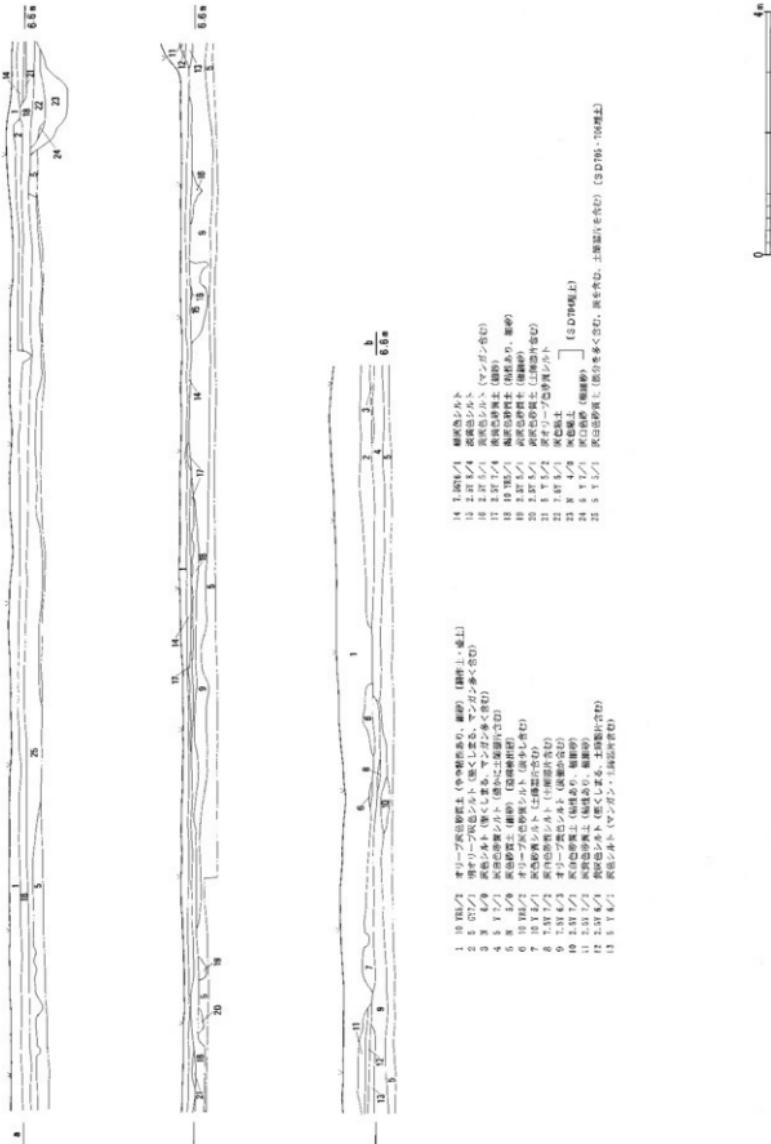
S K 703 p 7・p 8グリッドで検出した径約2.4~2.6mの南北に少し長い円形を呈する土坑である。検出面からの深さ約0.8mである。深さが浅いことから土坑としたが、水汲み場かもしれない。埋土は、灰褐色系および灰色系の砂質シルトと暗青灰褐色系粘質土に分けられる。出土遺物は、土坑の中央部底から、約18cmほど浮いた状態で小型の曲物(22)と土師器杯(3)が出土した。また曲物の下からは、ロクロ土師器小皿(2)が完形で出土した。土坑の西壁際でも曲物(23・24)が出土している。この他にも黒色土器(4)、土鍾(5)などが出土している。出土遺物から平安時代後期である。

##### B 溝

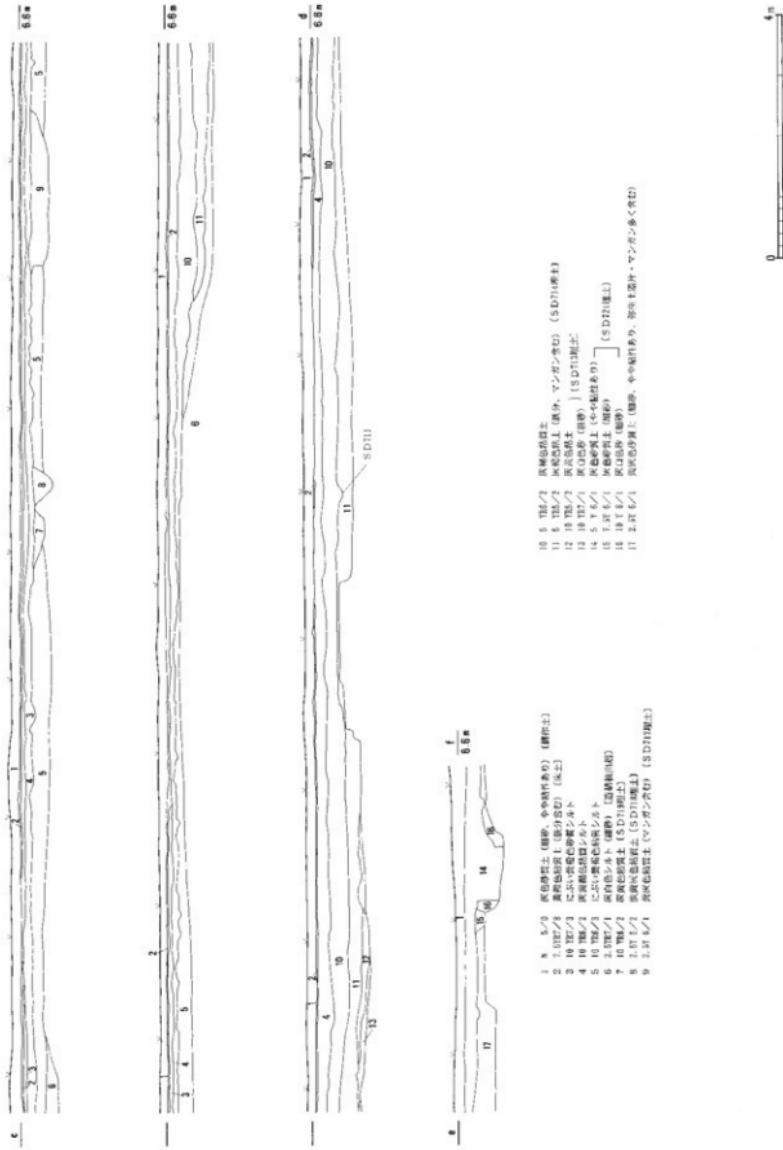
S D 705 q 8からr 9で検出した、西から南にまがり、東に方向を変える溝である。F地区のS D 616から続く溝と考えられる。溝幅は最も狭いところで0.9m、調査区の南壁際で3.2mと広がる。検出面からの深さは5~13cmと浅い。出土遺物には須



第33図 造構平面図 (1:250)



第34図 調査区南壁土層図 (1:80)



第35図 調査区西壁土層図 (1:80)

恵器杯身・高杯などのほか、混入遺物と考えられる弥生土器甕(10)がある。F地区のSD716との遺構の切り会い関係から、飛鳥時代から平安時代と考えられる。

**S D 706** p 8 から v 9 で検出した東西溝である。溝幅約30~40 cmでほぼ均一である。道路部分調査区のSD15から続く溝で、東に向う溝である。検出面からの深さは3~11 cmである。出土遺物には須恵器高杯などがある。またF地区SD615から高台付杯などが出土しており、飛鳥時代である。

### (3) 鎌倉時代以降の遺構（第33図）

#### A 土坑

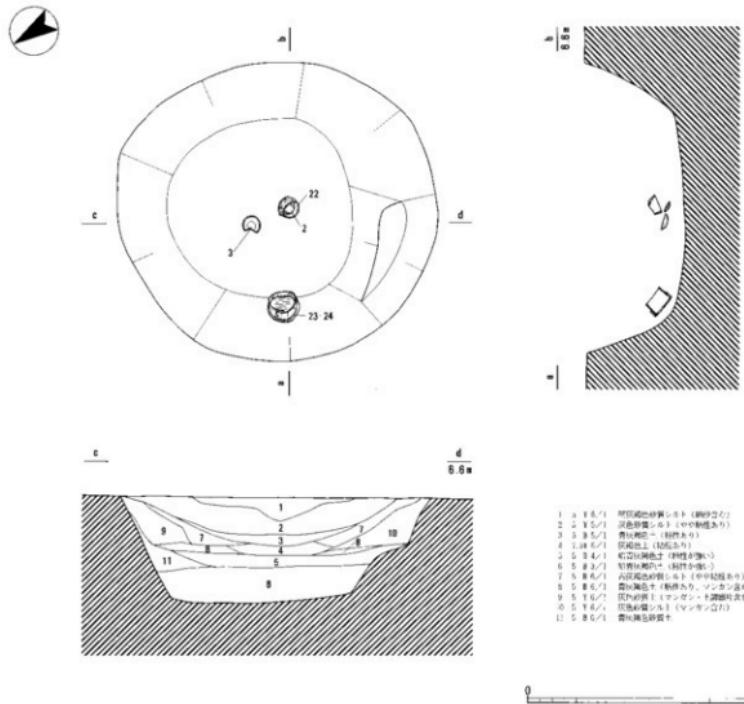
**S K 712** z 20グリッドで検出した径約1.6~1.8 mの楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは、未完掘のため推定ではあるが、約55cm程度と

思われる。出土遺物は見られなかったが、SK712の中央を横切り、同じ時期と考えられるSD716から鎌倉時代の陶器碗などが出土していることから、時期は鎌倉時代と考える。

**S K 721** z 30グリッドで検出した径約2.0mの円形を呈する土坑である。埋土は灰色砂質土で、検出面からの深さは約26cmである。出土遺物には小片ではあるが南伊勢系土師器皿や陶器碗などがある。時期は室町時代である。

**S K 722** z 31グリッドで検出した径約1.9mの円形を呈する土坑で、埋土はSK721と同じ灰色砂質土である。検出面からの深さは約33cmである。出土遺物には土師器皿、陶器碗や中世陶器がある。時期は室町時代である。

形態や埋土などから北に隣り合うSK721と同じ



第36図 SK 703平面図・遺物出土状況図・土層図 (1:40)

性格の遺構と考えられる。また、SK721とSK722の間には幅約30cmの溝が見られるが、これらの土坑と関係するのかは不明である。

#### B 溝

SD716 z17からy22グリッドにかけて検出した南北溝である。幅約0.3~0.4mで、検出面からの深さ4~9cmである。出土遺物には土師器小皿、陶器碗などがある。時期は鎌倉時代である。

SD717 y25からy28グリッドにかけて検出した南北溝である。溝の両側面は縦に切り込んでおり、遺構の残りは良い。溝断面はU字形を呈する。幅約0.3~0.5mで、検出面からの深さ8~17cmである。出土遺物には土師器小皿などの細片がある。

SD718 y26・y27グリッドで検出した東西溝である。溝幅約0.3~0.4mで、検出面からの深さ12~19cmである。埋土は淡灰黄色粘質土である。出土遺物はないが、切り合うSD716や埋土から、SD716と同時期と考える。

SD719 z30グリッドで検出した北から東にまがる溝である。幅約0.6~1.05mで、検出面からの深さ約22cmである。埋土は灰白色砂である。SD717から続く溝であろう。出土遺物には土師器皿、陶器碗などの細片がある。

#### (4) 時期不明・その他の遺構（第33図）

##### A 土坑

SK702 j8・j9グリッドで検出した土坑である。長さ約2.3m、幅約72cmで、検出面からの深さ3~6cmでかなり浅い。埋土は灰色砂質土である。出土遺物は土師器皿などで時期は不明である。

SK704 q9グリッドで検出した土坑で、南側半分は調査区外になるが、円形を呈すると考えられる。南壁際で検出長約1.7m、南北長約0.9mで、検出面からの深さ約50cmである。埋土は灰色粘土および灰白色砂で、出土遺物には器台と思われる弥生土器（13）があるが、混入遺物と考えられる。

##### C 溝

SD701 i8・j8グリッドで検出した東西溝で、幅約0.2~0.3m、検出面からの深さ1~5cmである。埋土は灰色粘質土である。出土遺物には土師器甕などがあるが、時期は不明である。

SD707 u10からv11グリッドで検出した東西溝

である。幅約0.5~1.3m、検出面からの深さ11~12cmである。出土遺物にはなく時期不明であるが、おそらくSD705から続く溝であろう。

SD710 x15・y15グリッドで検出した東西溝である。幅約0.3~0.85mで、検出面からの深さ12~28cmである。埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物には土師器甕の細片などがある。

SD719 y26・z26グリッドで検出した東西溝である。幅約30~40cmで、検出面からの深さ3~9cmである。南北溝SD717に切られる。出土遺物には須恵器細片などしかなく、時期は不明である。

SZ723 z30・z31グリッドの黄灰色砂質土（マンガンを含む）から壺（8）や甕（9・11・12）などの中期前半の弥生土器が多数出土した。調査区の幅が狭いためその性格を確認できなかったが、竪穴住居または土坑などの遺構の可能性がある。

#### 3 遺物

##### (1) 弥生時代の遺物（第38図）

###### a 包含層・その他の遺物（6~21）

壺（6~8）には、頸部が緩やかに外反して口縁端部を丸くおさめる広口壺（6）がある。口縁端部外面に櫛歯による刺突文を、口縁部から頸部外面と体部外面上半に櫛描直線文を施している。また内面には指頭圧痕が見られる。（7）は受口状細頸壺で、口縁部端部外面に櫛歯による刺突文を施している。また体部外面には縦位にハケで調整した後に縄文を施し、沈線で区画した文様帶を施している。広口壺の口縁部片（8）は、口縁端部の下端に刻み目を施している。（6・7）は調査区z22で遺構検出をしている時に出土したものであるが、土器の周囲には掘形は見られなかった。下層の可能性もある。

甕（9~12）には、口縁部を外反させる甕（9・11・12）がある。（9・12）は口縁端部に櫛状具による刻み目を施している。（10）は受口状口縁の甕で、口縁端部の下端に刻み目を施している。外面は口縁端部を横位に、頸部には縦位のハケ調整の後に櫛描直線文を施している。SD705から出土したもので混入したものである。（11）は、口径約21cmの小型甕である。（12）は口縁部内面を横位に体部外面を斜位にハケ調整する。時期は中期後半である。

(13)は、口縁部の端部を折り返すもので、器台と考へたが器形は確かでない。口縁部外面には右上がりの、頸部外面には左上がりのハケメを施している。SK704からの出土で混入であろう。

土製品(18)は、土師質の土錘である。高さ3.8cm、幅4.0cmでやや偏平である。残存重量48g。

石製品(21)は、サヌカイト製の石鎌である。頂部を一部欠損するが、ほぼ完形である。

#### (2) 古墳時代の遺物（第38図）

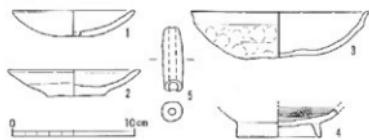
##### 包含層・その他の遺物(19)

土製品(19)は、断面は台形状を呈する紡錘車である。I d類に属しよう。高さ3.2cm、幅3.3cm。

#### (3) 飛鳥から平安時代の遺物（第37・38図）

##### a SK703出土の遺物(1～5)

土師器(1～3)には、口径10cm前後、底径約2cm



第37図 出土土器実測図 (1 : 4) [SK703]

の小皿(1)がある。口縁部はヨコナデ、体部内外面ナデである。(2)は、ロクロ成形の小皿である。内面の中央部がやや膨み、底部外面に回転糸切り痕が見られる。(3)は口径14cm前後、口縁端部が外反する杯である。内面はナデで、外面上には指項圧痕が明瞭に見られる。11世紀代後半である。

黒色土器(4)は、底径7cm前後、腰高の貼り付け高台をもつ椀で、内面には平行暗文を施している。内面のみを黒化する黒色土器A類である。

土製品(5)は、土師質の土錘である。断面は方形に近い。残存長5.3cm、径1.6cm。

##### b 包含層・その他の遺物(14・15)

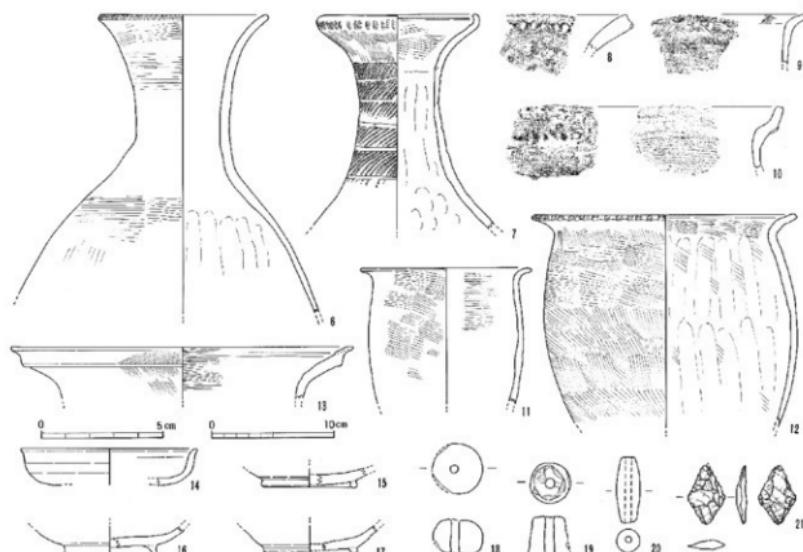
土師器には、平らな底部から腰部が丸みをもつ杯(14)がある。体部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部が短く外反する。

灰釉陶器には、平らな底部に短く端部が丸い高台が付く椀(15)がある。

#### (3) 鎌倉時代以降・その他の土器（第38図）

##### 包含層・その他の遺物(16・17・20)

陶器(16・17)は、椀である。丸い体部に断面三角形の高い高台がつく(16)と直線的な体部に断面逆台



第38図 出土土器・石器実測図 (1 : 4, 21は1 : 2) [包含層・その他]

形の低い高台をもつ(17)がある。前者が藤澤編年  
3・4型式、後者は5型式に相当しよう。

(20)は土師質の土鍤である。中央部が膨らんで両  
端部が窄んでいる。長さ5.4cm。径2.0cm。

#### (5) 木製品 (第39図)

##### S K 703出土の木製品(22~24)

すべて曲物である。(22)は径約17cmの側板で、  
桿組で1か所で結合する。腐食が著しい。(23)は径  
約25cm、外面には幅約3cmの縦が1帶めぐる。また、  
(24)は(23)の底板で、側板と四か所で木釘によ  
り結合する。径約22~23cm。

#### 4. 小結

今回の調査で、東西部分では平安時代後期の土坑  
S K 703を確認した。また道路部分で検出した S D  
615・616が、 S D 705と S D 706に続くことが考  
えられ、 S D 705は、F地区で検出した直線的に延び  
る S D 615と合わせると延長は約61mになる。また、  
調査区の最も南では、遺構として確認できなかっ  
たが、弥生時代中期前半の土器が多量に出土し、中勢  
バイパスの式ノ坪遺跡で検出された同時期の遺構と  
の関連性も考えられる。

#### 【註】

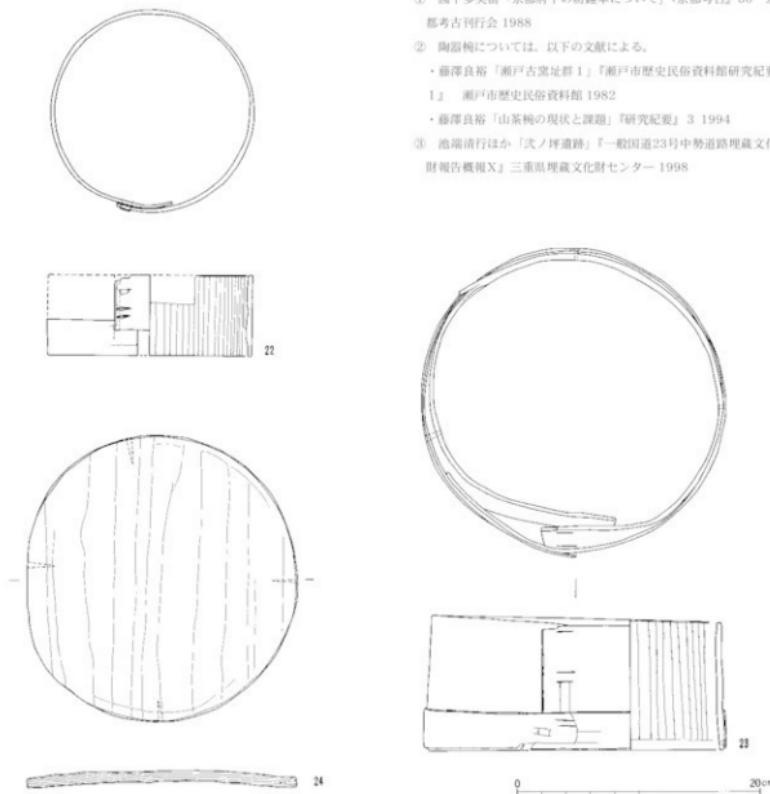
① 國下多美樹「京都府下の劫鉢車について」『京都考古』50 京  
都考古刊行会 1988

② 陶器柄については、以下の文献による。

・藤澤良裕「瀬戸古窯址群1」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要  
1』瀬戸市歴史民俗資料館 1982

・藤澤良裕「山茶柄の現状と課題」『研究紀要』3 1994

③ 池端清行ほか「式ノ坪遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化  
財報告概報X』三重県埋蔵文化財センター 1998



第39図 出土木製品実測図 (1 : 4) [SK 703]

報告番号	登録番号	出土位置	土質構	器種	計測値 (cm)			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
					口径	器高	底径						
1	002 -06	p 9 SK703	土師器 小皿	(9.9)	2.1			口縁部ココナデ 内外面ナデ	やや粗	並	灰白 10YR 8/2	1/5 残	
2	002 -03	p 9 SK703	±± 土師器 小皿	10.8	2.2	4.7		ロクロナデ 底部糸切り	やや密	並	灰白 2.5 Y 8/2	ほぼ 完形	
3	002 -02	p 9 SK703	土師器 杯	14.4	3.8			口縁部ココナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	やや粗 ~2mm	並	灰白 2.5 Y 8/1	ほぼ 完形	
4	002 -04	p 9 SK703	黑色土器 椀			(7.3)		ロクロナデ 高台貼り付け 底部糸切り 内面ミガキ	やや密	並	灰白 2.5 Y 8/2 暗灰 N 3/	底部 1/2 残	
5	002 -05	p 9 SK703	土製品 土鍋	残存長 (5.3)	幅 1.6			ナデ 穴径 0.5cm	やや密 ~1mm	並	灰黄 2.5 Y 7/2 黄灰 2.5 Y 4/1	一部欠	残重量 10.9g
6	031 -01	z 22 黄灰色	弥生土器 壺	13.5				口縁部に刺突文 外面彫描直 線文 内面オサエ・ナデ	粗 ~4.5mm	並	橙 7.5 YR 6/4	口縁～体 部 1/2 残	磨滅が顯著
7	028 -03	z 22 黄灰色	弥生土器 壺	12.3				口縁部に刺突文 外面ハケメ 縞文のうち沈継による区画	やや粗 ~2mm	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	口縁～体 部 1/2 残	
8	026 -03	z 31 S Z723	弥生土器 壺					口縁部に彫描刺突文	粗 ~3.5mm	並	褐灰 7.5 YR 6/1 明褐色 7.5 YR 7/2	口縁部片	
9	026 -02	z 30 S Z723	弥生土器 甕					口縁部内面ハケメ 体部外面ハ ケメ	粗 ~2mm	並	にぶい黄橙 2.5 YR 6/4	口縁部片	
10	013 -04	r 9 SD705	弥生土器 甕					口縁部の下端部に刺目 外面ハ ケメ 彫描直線文 内面ハケメ	やや粗 1~2mm	並	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部片	
11	028 -02	z 31 S Z723	弥生土器 甕	(13.1)				体部内外面ハケメ	粗 ~3mm	並	橙 5 YR 6/4	口縁～体 部 1/2 残	風化大
12	030 -01	z 31 S Z723	弥生土器 甕	21.4				口縁部に刺目 体部外面ハケ メ 内面オサエ・ナデ、ハケメ	やや粗 ~4mm	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	口縁～体 部 3/4 残	
13	009 -02	q 5 SK704	弥生土器 器台	(27.9)				口縁部折り返しの後ヨコナデ 内外面ハケメ	やや粗 ~2mm	並	浅黃橙 10YR 8/3 灰白 10YR 8/2	口縁部片	
14	026 -01	y 18 包含層	土師器 杯	(14.2)	(3.0)			口縁部ココナデ 外面オサエ・ ナデ 内面ナデ	やや粗 ~2mm	並	淡黄橙 7.5 YR 8/4	1/4 残	
15	025 -06	r 9 包含層	灰釉陶器 椀			(7.5)		ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け	やや密 ~1mm	良	灰白 N 8/0	底部 1/3 残	
16	023 -01	j 9 包含層	無釉陶器 椀			7.4		ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け	密	並	灰白 5 Y 8/1	高台部一 部欠	
17	025 -08	y 21 包含層	無釉陶器 椀			(6.9)		ロクロナデ 底部糸切り 高台貼り付け 程體圧痕	やや粗 ~1.5mm	良	灰白 N 7/0	底部 1/4 残	
18	025 -07	w 13 包含層	土製品 土鍋		径 4.1	厚さ 3.8		ナデ 穴径 0.7cm	粗 ~4mm	並	にぶい橙 7.5 YR 6/4	一部欠	残存重量 48g
19	026 -05	z 18 包含層	土師質 劫鍾車	長さ 3.2	幅 3.3			ナデ 穴径 0.8cm	やや密 ~1mm	並	灰白 2.5 Y 7/1	ほぼ 完形	重量 36.6g
20	026 -04	z 17 包含層	土製品 土鍋	長さ 5.4	径 2.0			ナデ 穴径 0.4cm	やや密 ~1mm	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	完形	重量 18.2 g
21	027 -04	y 28 包含層	石製品 石鑿	長さ (2.40)	幅 1.49	厚さ 0.40						頭部一部 欠損	サヌカイト製 重量(1.1)g

第13表 出土土器・石器観察表

報告番号	登録番号	出土位置	土質構成	名 称	計測値 ( cm )			調整技法	木取り	備 考
					径	器高	厚さ			
22	037 -01	p8・p9 S K703	曲物側板 No. 3	16.7	6.6	0.4	棒縫で1か所結合する。			
23	034 -01	p8・p9 S K703	曲物側板	24.9	11.0	0.2 ~ 0.4	棒縫による結合がのこる。端が1段めぐる。			幅2.8~3.1cm, 厚さ0.3cm
24	035 -01	p8・p9 S K703	曲物底板	22.0~ 23.4		0.9	四方に木釘の痕跡が見られる。	板目		23の底板

第14表 出土木製品観察表

〔遺物観察表および木製品観察表の凡例〕

- 報告番号は、遺物番号および因版番号と同一である。
- 登録番号は、遺物以蔵番号および遺物実測図番号を示す。
- 出土位置は、上段に出土した調査区、下段に出土した遺構番号を表す。
- 遺構の上段は種別、下段は形態である。なお、形態は見た目である。また木製品は、名称に取り上げ時の番号も記した。
- 計測値で、( )は反転復元による推定値である。欠損部があるものは、残存部の長さを残存長として記した。なお、木製品は最大計測値を記した。
- 調整技法は、主な事柄を記した。
- 脂士は、密、やや密、やや粗、粗の四段階で記した。下段の数値は、砂粒の大きさを表す。
- 槌成は、良、並、不良の三段階で記した。
- 色調は、『新版標準土色誌』に準拠した。段は外面、下段は内面を表す。
- 残存度は、表せるものは分数で記した。分数で表せないものは言葉で記した。
- 備考は、その他の特徴を記した。

## 写 真 図 版



調査風景（北西から）

図版 1



調査前風景（東から）



調査後全景（東から）

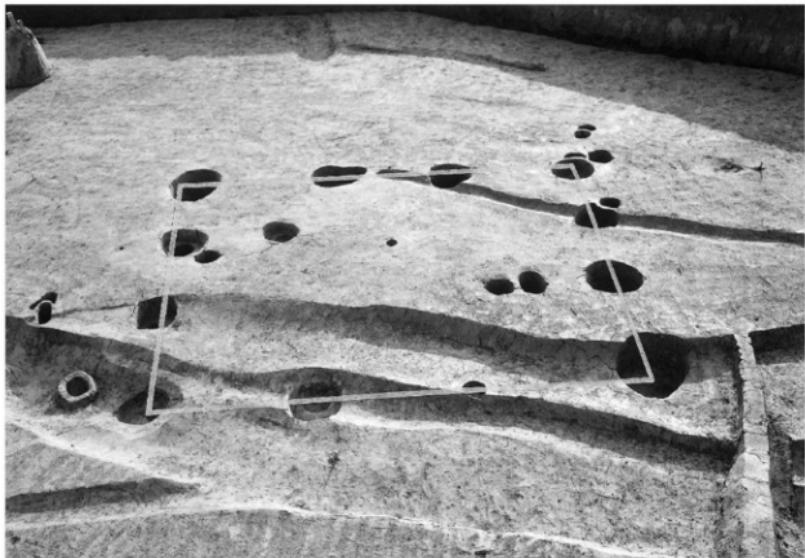


S R 630 (東から)

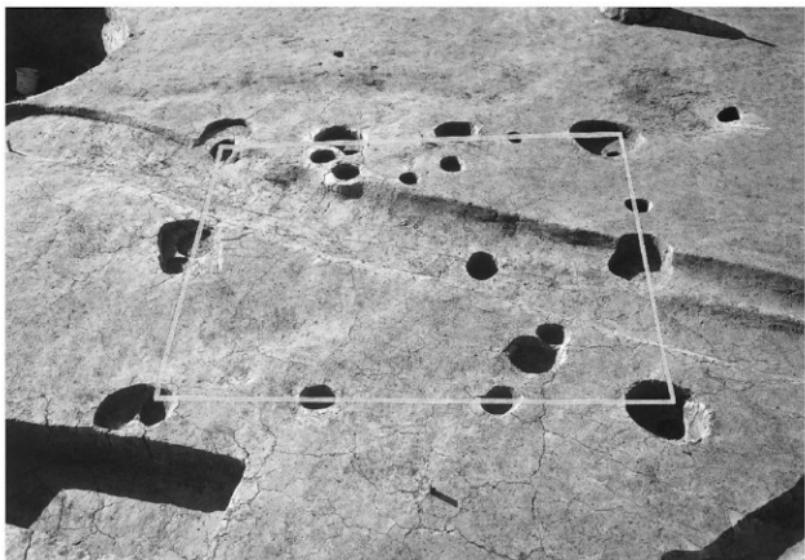


S B 612・613 (北から)

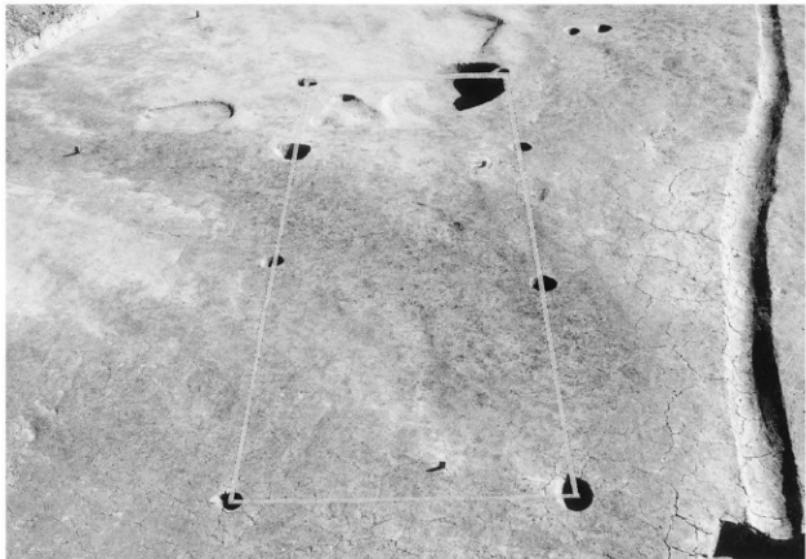
図版 3



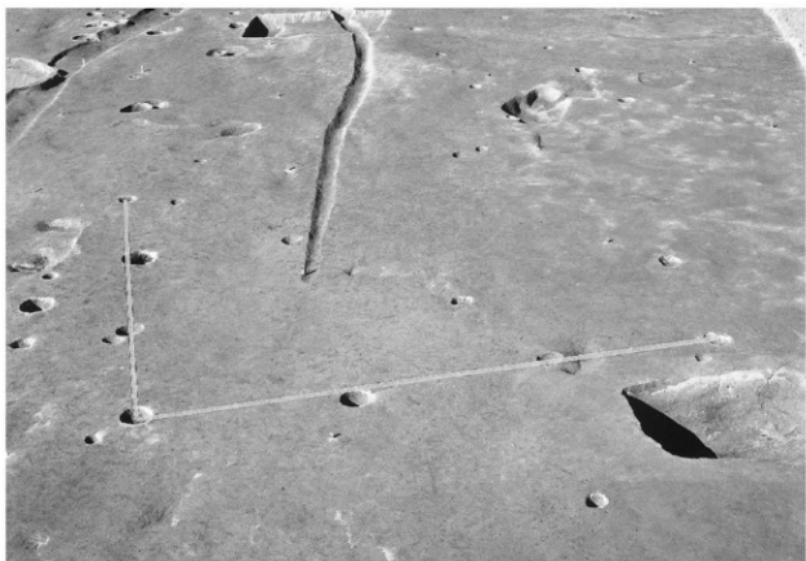
S B 621 (北から)



S B 622 (北から)



S B 624 (西から)



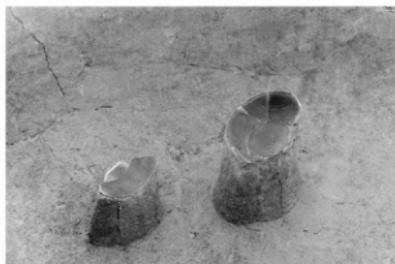
S A 631 (西から)



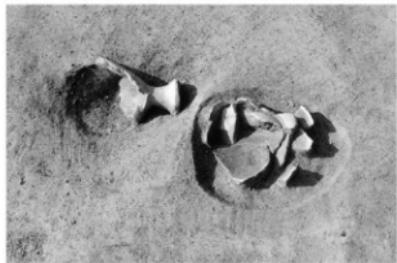
S E 611 (西から)



S E 627出土曲物底板 (西から)



S K 632出土黒色土器椀・灰釉陶器碗 (西から)



S R 630出土弥生土器壺 (東から)



S R 630出土弥生土器大型壺 (東から)



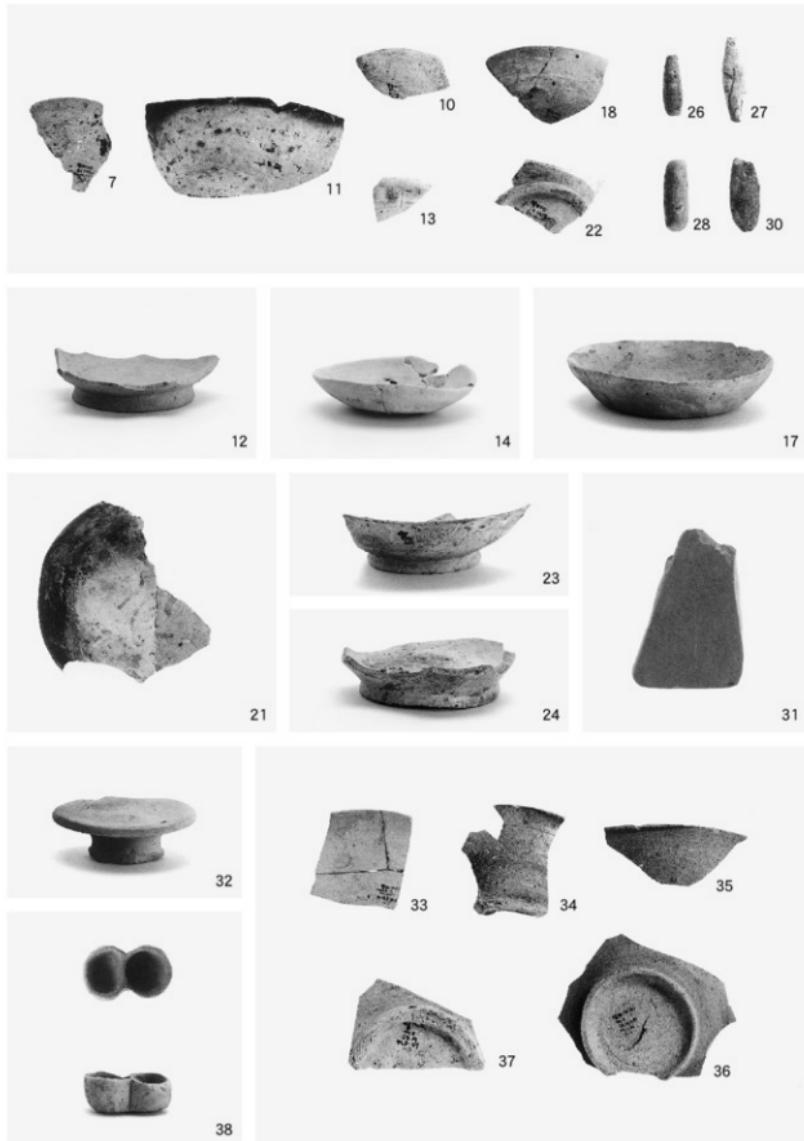
1



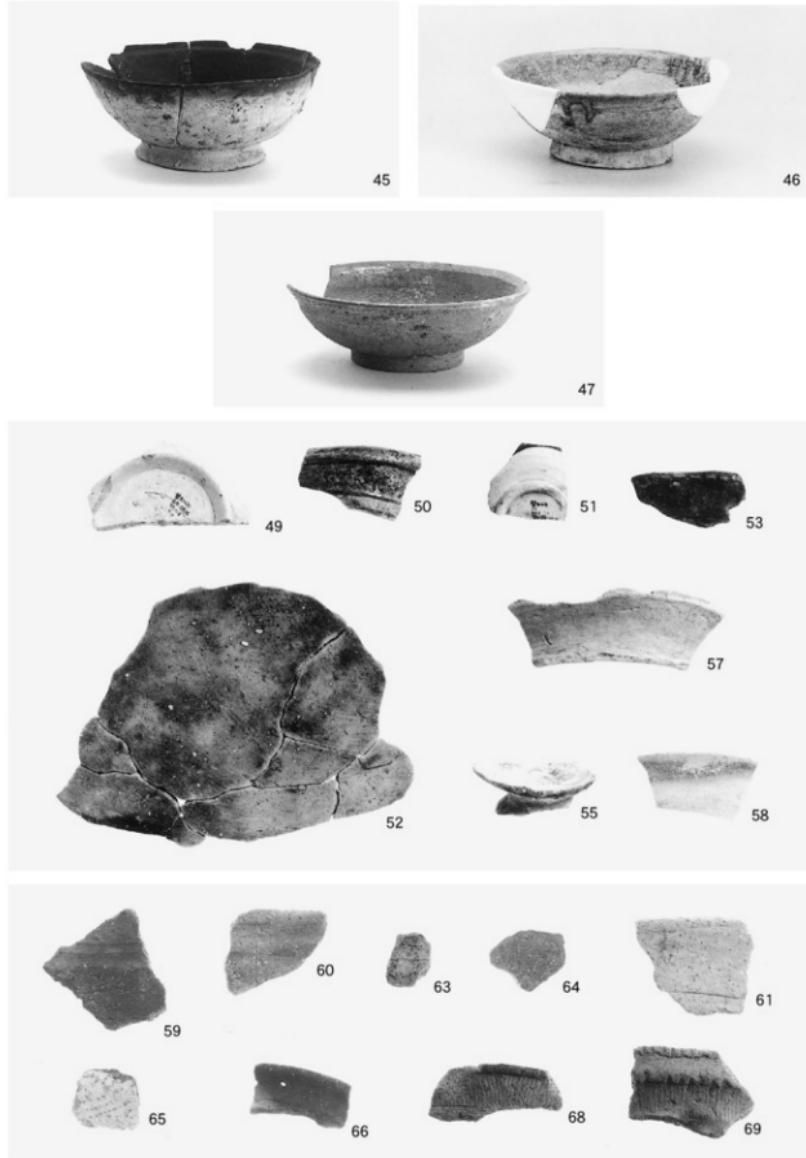
2

出土土器(1) [S R 630出土弥生土器]

図版 7

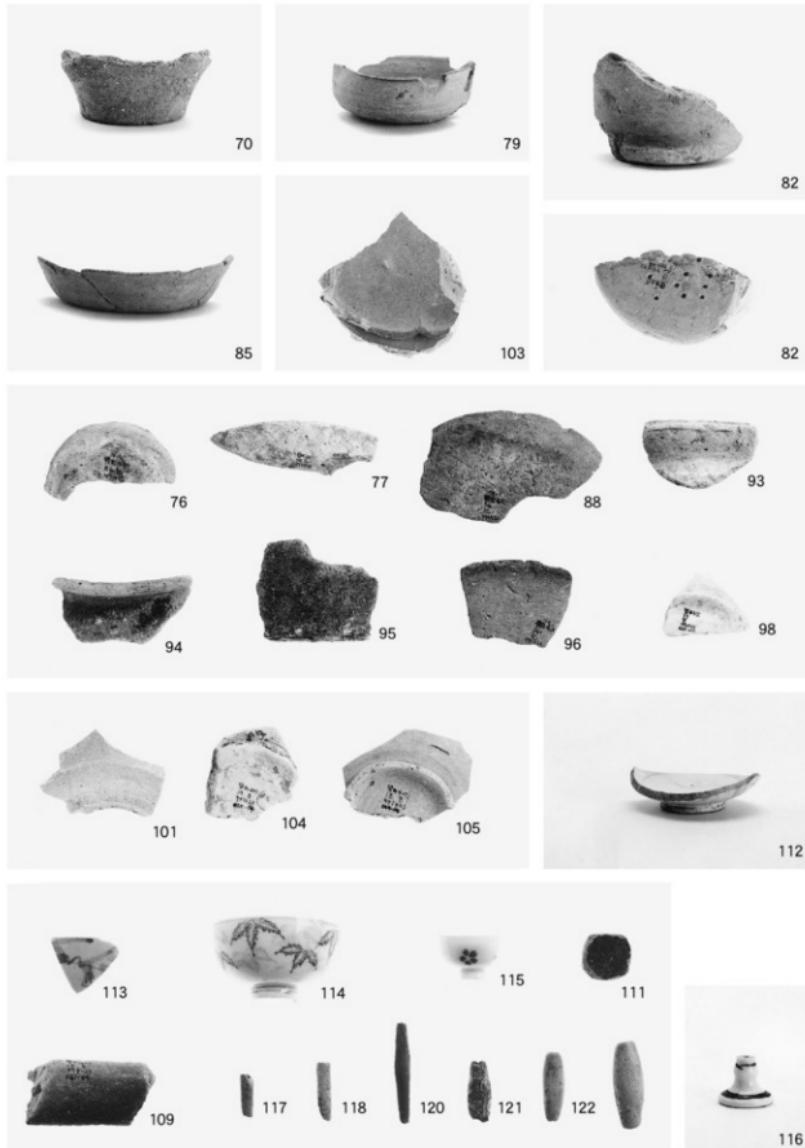


出土土器(2) [S B612、S A631・634、S E611・627出土遺物]



出土土器(3) [SK 617・632、SD 603・606、小穴、包含層・その他出土遺物]

図版 9



出土土器(4) [包含層・その他出土遺物]



123



124



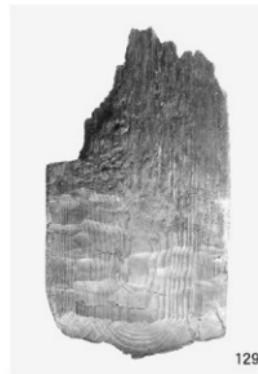
125



126



128



129



130



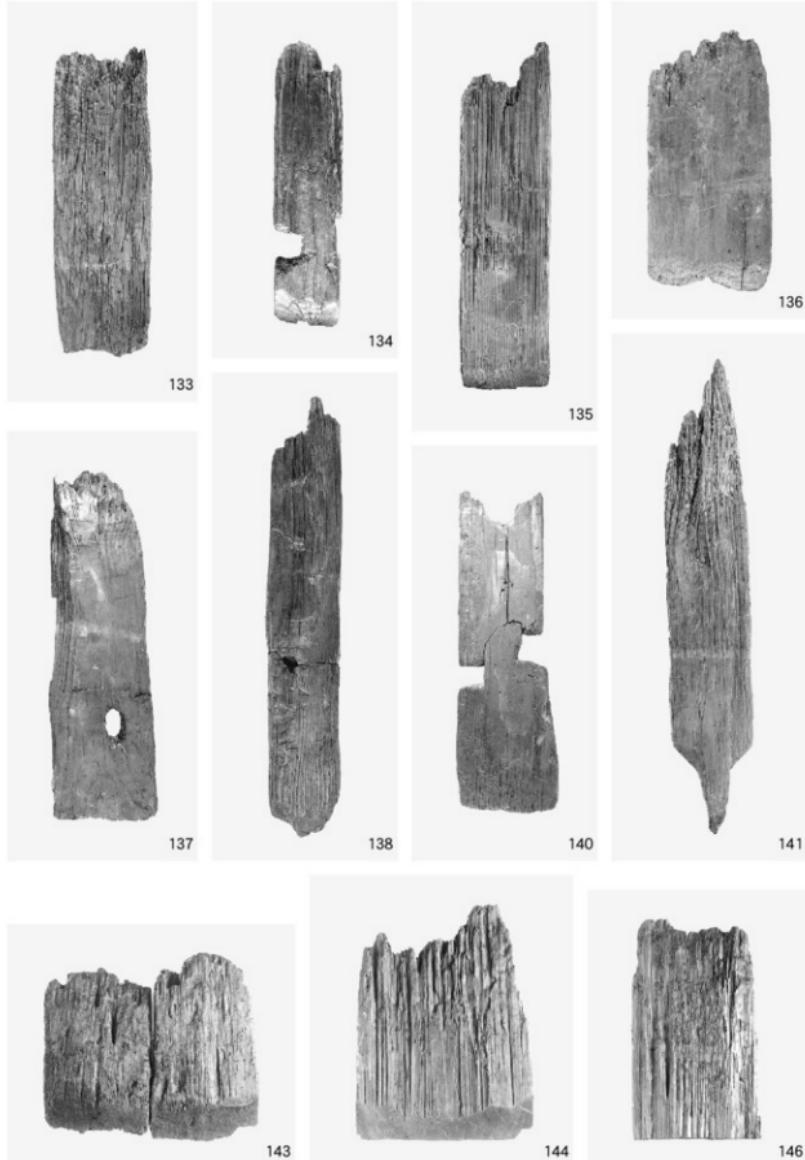
131



132

出土木製品(1)【S E 611出土井戸枠縦板（西侧から東側）】

図版11



出土木製品(2) [S E 611出土井戸枠縦板 (東側から北側)]



147



148



149



150



151



152



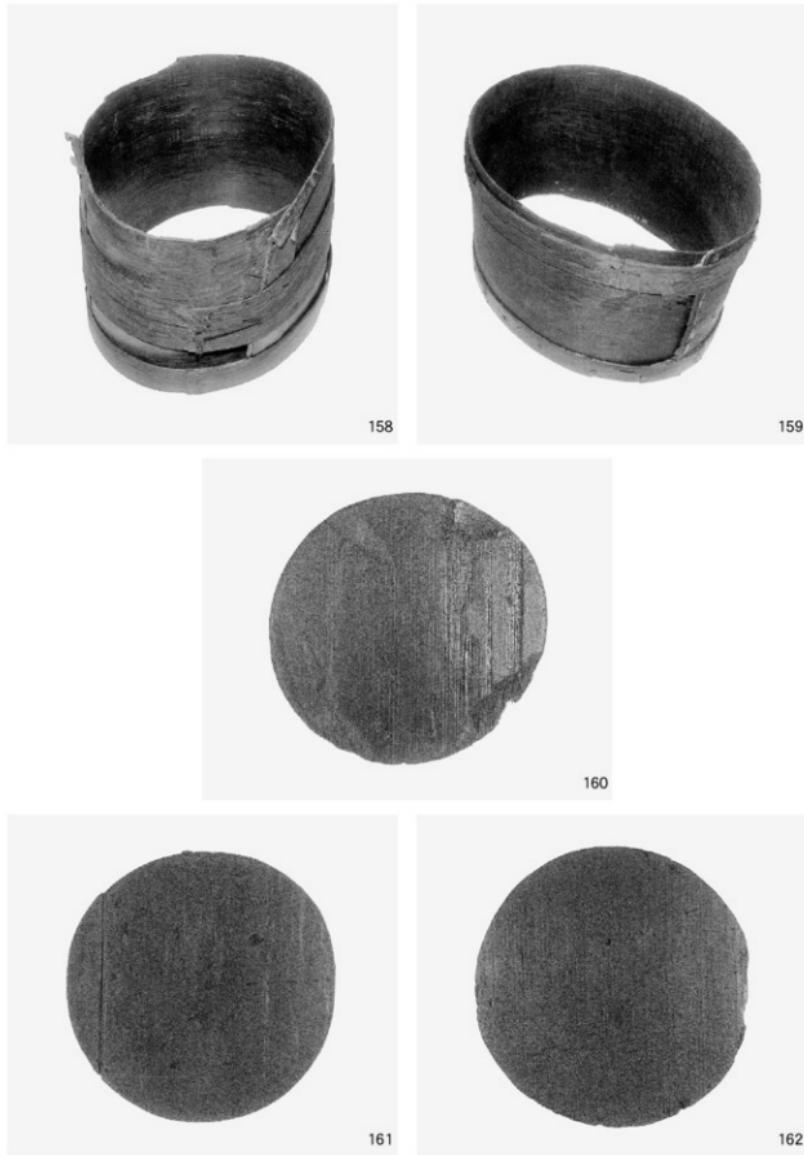
153



154

出土木製品(3) [S E 611出土井戸枠横板]

図版13



出土木製品(4) [S E 627、SK 632出土曲物]



調査前風景（南から）



調査後全景（東から）

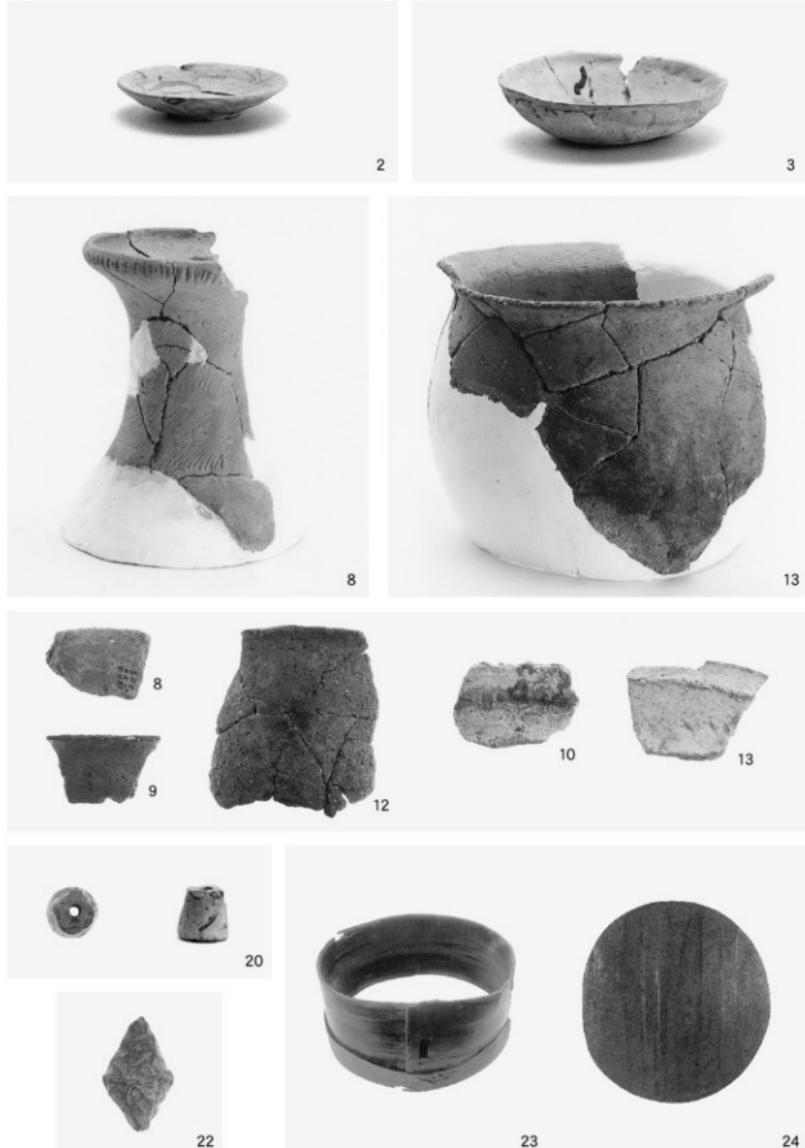
図版15



調査後（東から）



調査後（北から）



出土土器・出土木製品 [SK 603・包含層・その他出土遺物]

# 報告書抄録

ふりがな	城跡(じょうせき)はづけいとうじゆ						
書名	替田遺跡(第4次)発掘調査報告						
副書名							
卷次							
ページ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
ページ番号	252						
編著者名	宮田勝功						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732						
	西暦2004年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
城跡(じょうせき) 替田遺跡	うみぬけ丸 津市南河路	市町村 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″			
		24201	759	34度 43分 16秒	136度 28分 57秒	19990913～ 20000113	F地区 1400
		24201	759	34度 43分 10秒	136度 28分 56秒	19991111～ 19991222	G地区 280
種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
替田遺跡	F地区 集落跡	弥生時代 古墳時代 飛鳥～平安時代 鎌倉時代以降	自然溜路、土坑、溝、小穴 土坑、溝 掘立柱建物、柱列、井戸、 土坑、溝 土坑、溝	繩文土器 弥生土器 土師器、須恵器 製塙土器、黒色土器 灰陶器、八花根 陶器碗、曲物	平安時代後期の集落跡。		
	G地区 集落跡	古墳時代 飛鳥～平安時代 鎌倉時代以降	土坑、溝 土坑、溝 土坑、溝	弥生土器、石器 土師器、陶器碗、曲物			

---

---

三重県埋蔵文化財調査報告252  
替田遺跡(第4次)発掘調査報告

2004(平成16)・3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 有山文印刷

---

---